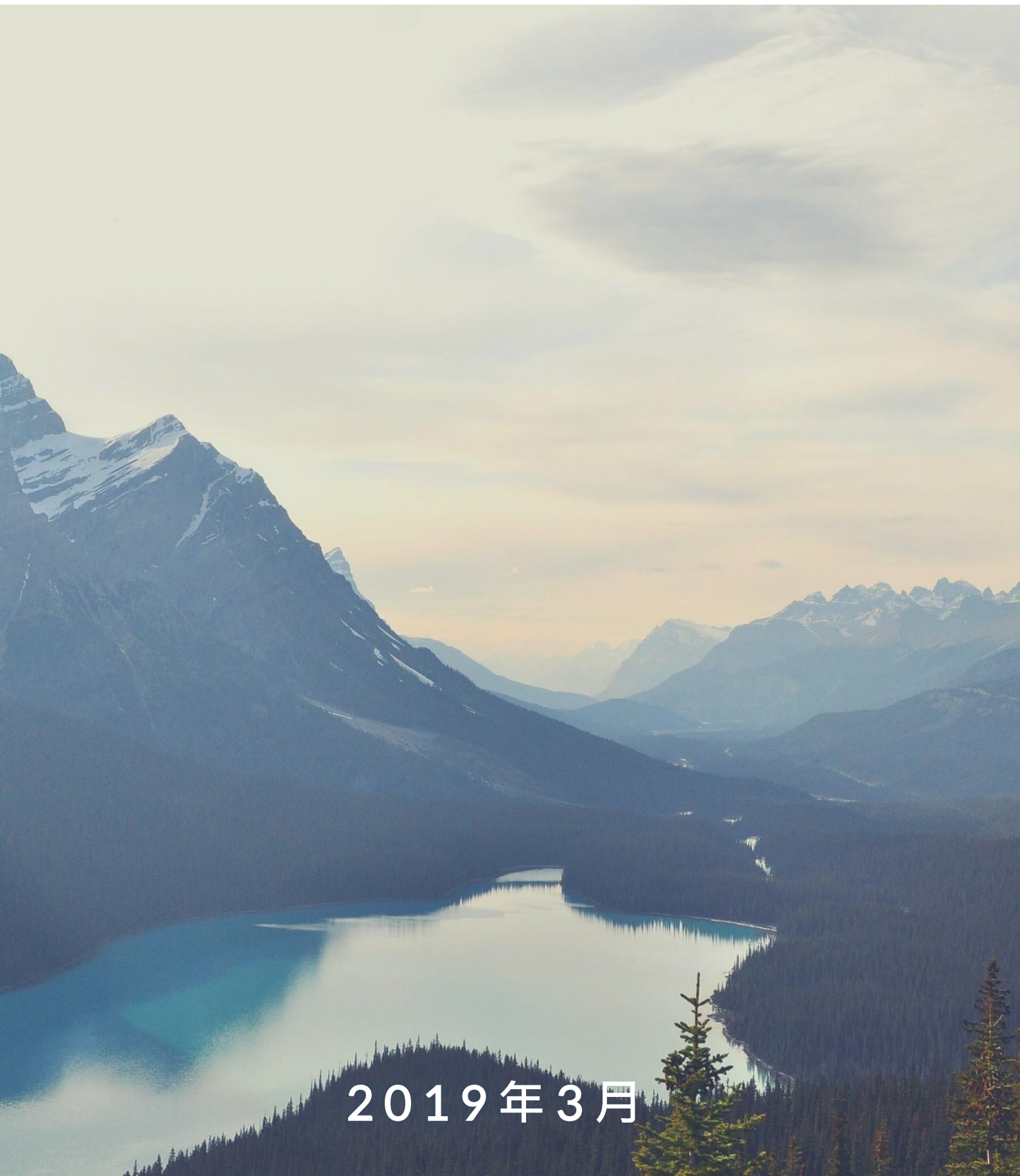


神戸大学 大学教育推進機構  
国際教養教育院 外国語第Ⅰ教育部会  
外部評価報告書 2019



2019年3月



## 目次

目次.....	2
第1部 自己評価報告書 .....	5
序章.....	6
0.1 本外部評価報告書執筆の基本理念 .....	6
0.2 執筆者 .....	6
0.3 外部評価スケジュール.....	6
0.4 本学英語教育カリキュラムの概要.....	6
第1章 目標の明示と目標に沿った教育の実施 .....	9
1.1 本章で扱う内容 .....	9
1.2 上位目標との整合性 .....	9
1.3 授業担当者間での目標の共有化 .....	13
1.4 強みと課題.....	14
第2章 組織構成と運営体制 .....	16
2.1 本章で扱う内容 .....	16
2.2 組織構成 .....	16
2.2.1 教育実施体制.....	16
2.2.2 運営体制 .....	18
2.3 強みと課題.....	20
第3章 教育の内容と方法.....	22
3.1 本章で扱う内容 .....	22
3.2 科目内容と目標の整合性 .....	22
3.3 ニーズ・学術発展動向・社会的要請と科目内容との整合性.....	22
3.4 講義・演習の組み合わせ .....	24
3.5 単位実質化.....	24
3.6 適切なシラバスの作成 .....	25
3.7 TA・SA.....	26
3.8 基礎学力不足者対応 .....	26
3.9 成績評価基準の策定 .....	26
3.10 成績評価の客観性・厳密性の確保.....	27
3.11 強みと課題 .....	28
第4章 学修成果.....	30

4.1 本章で扱う内容	30
4.2 学修の成果	30
4.3 強みと課題	31
第5章 施設など	32
5.1 本章で扱う内容	32
5.2 設備・施設	32
5.3 自習環境	33
5.4 事前ガイダンス	35
5.5 学修相談・支援	35
5.6 強みと課題	36
第6章 教育の質の改善	37
6.1 本章で扱う内容	37
6.2 改善システム	37
6.3 FD	40
6.4 支援者の研修	42
6.5 強みと課題	43
おわりに	44
第2部 外部評価・座談会	45
第7章 外部評価委員会	46
7.1 沖原委員ご質問・ご講評	47
7.2 伊庭委員ご質問・ご講評	54
第8章 外部評価報告書	63
第9章 退職予定教員座談会記録	68
0. はじめに	68
座談会の趣旨	68
座談会の概要	68
神戸大の英語教育の変遷	68
座談会の記録	69
1. 1970年代～（精読・多読・聴解・作文等）	70
1970年代の英語	70
1980年代の英語	71
女性教員	73
2. 1983年～（英語1～英語4）	75
選択クラス	75
クラスの内容	76
組織	80

3. 1992年～(人文・社会・自然) .....	83
3 領域カリキュラム .....	83
教員の配当 .....	84
総合教材へ .....	84
英語教員とESP .....	84
4. 2002年～(リーディング, リスニング, スピーキング, プロダクティブ) .....	86
コア・カリキュラムから再び技能別へ戻った背景 .....	86
上級選抜クラス .....	91
教育目標 .....	92
組織改編 .....	93
センター(SOLAC)の設立 .....	95
センターと国際文化の関係 .....	96
外国人教員 .....	97
部局協力とノルマ問題 .....	97
5. 今後の展望 .....	99
コマ数の変遷 .....	99
望ましいコマ数 .....	100
達成度をどう評価するか .....	101
努力か能力か .....	103
外部試験をどう使うか, 使わないか .....	104
教員の資質 .....	105
参考文献 .....	106

# 第1部 自己評価報告書

## 序章

### 0.1 本外部評価報告書執筆の基本理念

本部会外部評価は、2016年6月9日「評価・FD 専門委員会決定」に基づき、実施する。また、評価書の構成は、大学評価・学位授与機構による「H24 年度以降の大学評価新基準」等を参考に作成された本学「外部評価の評価項目モデル(改訂版)」に準拠する。

### 0.2 執筆者

2018 年度外国語第 I 教育部会幹事会が本報告書作成を担当した。幹事会の構成は、以下の 4 名である。

部会長 柏木治美(大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター教授)

幹事 石川慎一郎(同教授)・加藤雅之(同教授)・木原恵美子(同准教授)

第 1 章～第 6 章については、全編を全学評価・FD 委員会委員を兼務する石川が執筆し、その後、幹事および部会構成員による確認を受け、必要な修正を行い、最終版とした。

### 0.3 外部評価スケジュール

以下のスケジュールで外部評価にかかる事業を実施した。

#### 2018 年

- ・5 月 10 日 国際教養教育院評価 FD 専門委員会委員長より、「平成30 年度外部評価の実施について(依頼)」を受領
- ・5 月 16 日～17 日 2 名の委員に委嘱(内諾を得る)
- ・5 月 18 日 外部評価委員名簿を提出
- ・11 月 21 日～ 外部評価委員会開催日程調整
- ・11 月 27 日 同上日程決定(2019 年 1 月 31 日(金)1040～1210)
- ・12 月 25 日 外部評価報告書案(自己評価部分)を外部委員に送付

#### 2019 年

- ・1 月 31 日 外部評価委員会開催
- ・3 月 18 日 外部評価報告書提出(予定)

### 0.4 本学英語教育カリキュラムの概要

神戸大学では、2018 年度現在、以下のような枠組みで英語教育の提供を行っている。

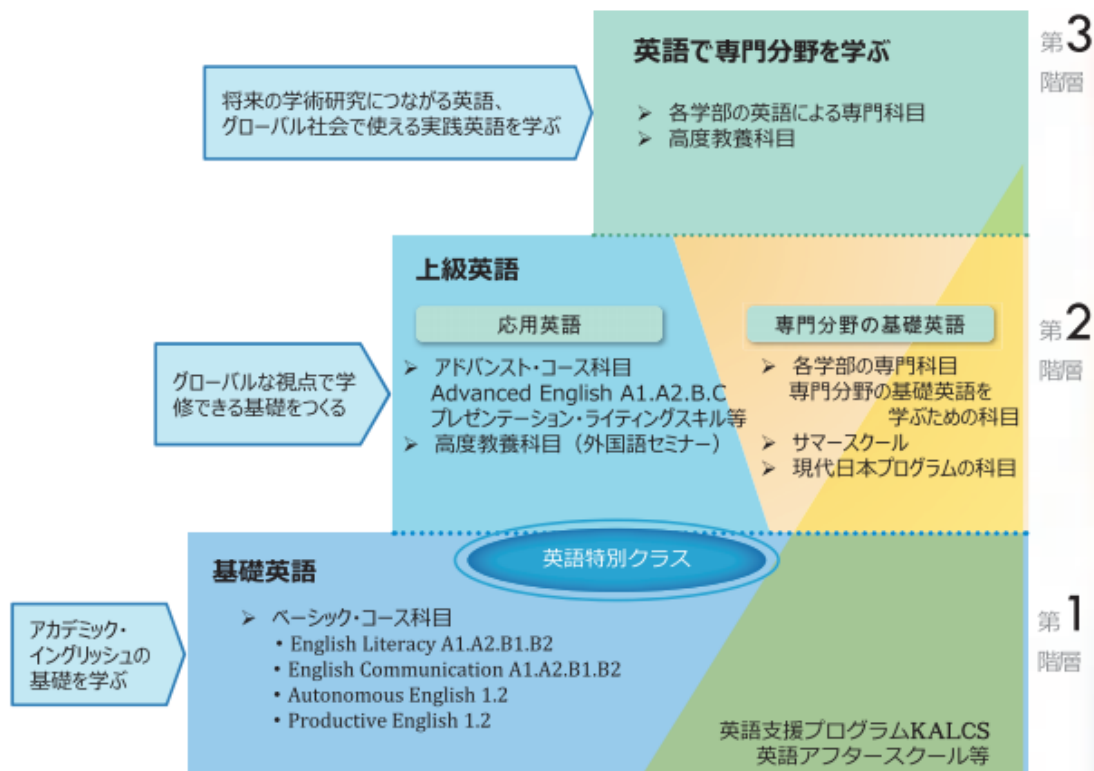


図 1 2018 年度までの神戸大学の英語教育(出典:「神戸大学外国語教育ハンドブック 2018」p. 6)

学部により英語の必修単位数は 4~6 単位の幅があるが、6 単位を必修としている学部の場合で言うと、1 年次の間に(一部の学部は 2 年次の前期までに) English Communication (聞く・話す中心の技能統合クラス: 2 単位), English Literacy (読む・書く中心の技能統合クラス: 2 単位), Autonomous English (e ラーニングを活用した自律型学修クラス: 1 単位), Productive English (エッセイやプレゼン等の発表活動を行うクラス: 1 単位) の各科目を受講する。これらはベーシックコース科目と呼ばれる。また、2 年次以降に、選択制で、Advanced English (TOEIC 等の対策, 英文講読, 短期語学研修, プレゼンテーション等) や高度教養科目 (外国語セミナー) 等の科目も設置されている。短期語学研修クラスを除き、これらの授業はすべてクォーター制で開講され、8 週ごとにテストを行って成績評価を行う(単位は 0.5 単位ずつ付与される)。

2019 年度からは、英語の必修単位数が全学部で 4 単位に統一されることに伴い、カリキュラムが変更され、ベーシックコース科目は Academic English Literacy (学術英語を意識した「読む・書く」中心の技能統合クラス: 2 単位) と Academic English Communication (学術英語を意識した「聞く・話す」中心の技能統合クラス: 2 単位) との 2 種となる。また、選択科目として、Advanced English Online (e ラーニングを使用した自律学修クラス), Advanced English (海外研修) (短期研修を組み込んだクラス), 高度教養科目 (外国語セミナー) が開講される。なお、これまで Communication 系



の科目は CALL 教室で実施されてきたが、2019 年度より新入生にノートパソコンを必携させることとなるため、これらの教室はアクティブラーニングに対応した語学専用教室に改装される予定である。以下は、2019 年度以降のカリキュラムの概要である。

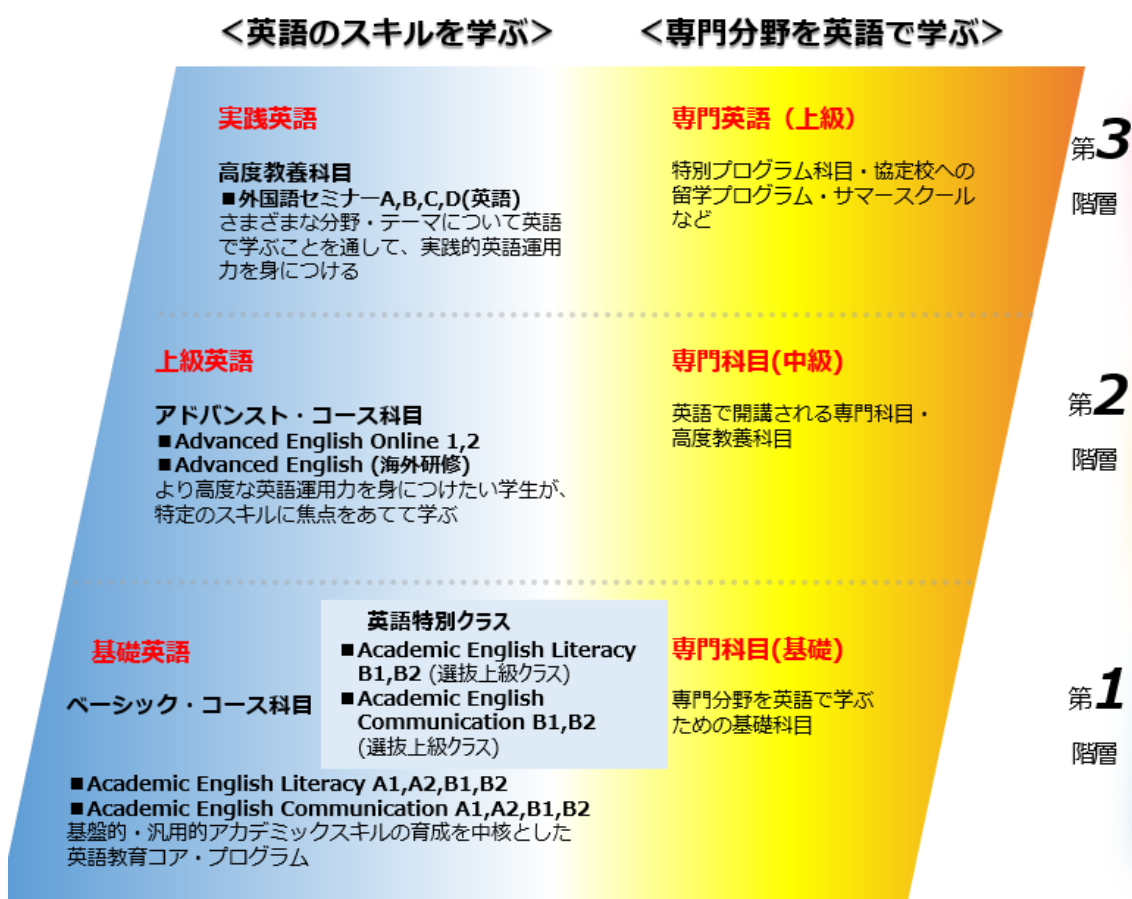


図 2 2019 年度からの神戸大学の英語教育(出典:2018 年 10 月 4 日 大学教育推進委員会資料)

## 第1章 目標の明示と目標に沿った教育の実施

### 1.1 本章で扱う内容

本章では、以下の点について、外国語第I教育部会(以下「部会」)の取り組みの現状と強み・課題を報告する。

A 当該教育部会が提供する授業科目の共通目標(特に基礎教養科目及び総合教養科目などの主要な授業科目に関し)、「基準1 大学の目的」に対応)

(1) 当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通教育授業科目の科目区分ごとの教育目標に対応したものとなっているか。

(2) 授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか。

### 1.2 上位目標との整合性

本部会が提供するものは1~2年次用の「ベーシックコース科目」と「アドバンスコース科目」である。このうち、ベーシックコースの主要授業科目につき、それぞれ以下の共通目標(一部科目は共通テーマ)を掲げている。

なお、2018年度新入生用カリキュラムまでは、上記にも示される通り、English Communication(0.5単位×4クォーター=2単位)、English Literacy(0.5単位×4クォーター=2単位)、Autonomous English(0.5単位×2クォーター=1単位)、English Productive(0.5単位×2クォーター=1単位)の6単位が必修単位数であった(※ただし、法学部・医学部・海事科学部はAutonomous EnglishとEnglish Productiveを除く4単位。国際人間科学部はProductive Englishを除く5単位、文学部はAutonomous Englishを除く5単位)。

一方、2019年度新入生用カリキュラムからは、全学部において必修単位数が4単位に統一され、Academic English Communication(2単位)とAcademic English Literacy(2単位)が開講されることとなった。なお、新設の国際人間科学部については、大学設置審議会への対応により、完成年度まで、従前のAutonomous Englishが残存する。

表1 2018年度以前の新入生用カリキュラムにおける英語科目の目標

科目名	共通目標
English Communication	■授業のテーマ 口頭英語を中心とした英語能力の向上 ■授業の到達目標 英語の発音や表現パターンの理解、また、英語による口頭での意見交換などを通し、聞く力と話す力を中心とした英語能力の総合的開発を目指す。

English Literacy	<p>■授業のテーマ 読解と作文を中心とした英語能力の向上</p> <p>■授業の到達目標 英文テキストの多読や精読, および, テキストの内容に基づく英語による産出活動などを通し, 読む力と書く力を中心とした英語能力の総合的開発を目指す。</p>
Autonomous English	<p>■授業のテーマ 英語リスニング, リーディング, 文法における習熟度の伸長を図るとともに, 自律的学習態度を育成する</p> <p>■授業の到達目標 コンピューターネットワークを活用した e-ラーニングなどを用いた語彙・文法・聴解・読解学習の実践を通し, 全般的な英語運用能力の開発と, 自らを律し, 継続的かつ計画的に学習を進める自律的学習態度の涵養を目指す。</p>
Productive English	<p>■授業のテーマ タスク/プロジェクトにもとづいた英語運用能力の育成</p>

表 2 2019 年度以降の新入生用カリキュラムにおける英語科目の目標

科目名	共通目標
Academic English Communication	<p>■授業のテーマ 学術的なテキストを扱うことによって, あるいは, 一般的なテキストを学術的な観点から扱うことによって, (1)英語を用いた国際的な学術研究の重要性に対する理解を深め, (2)「複眼的に思考する能力」および「多様性と地球的課題を理解する能力」を伸ばし, あわせて, (3)聞く力・話す力を中心として, 学術場面で要求される英語の諸技能の総合的な運用能力を向上させることを目指す。</p> <p>■授業の到達目標 (1)英語を用いた国際的な学術研究の重要性に対する理解を深め, (2)「複眼的に思考する能力」および「多様性と地球的課題を理解する能力」を伸ばし, あわせて, (3)聞く力・話す力を中心として, 学術場面で要求される英語の諸技能の総合的な運用能力を向上させることを目指す。</p>
Academic English Literacy	<p>■授業のテーマ 学術的なテキストを扱うことによって, あるいは, 一般的なテキストを学術的な観点から扱うことによって, (1)英語を用いた国際的な学術研究の重要性に対する理解を深め, (2)「複眼的に思考する能力」および</p>

	<p>「多様性と地球的課題を理解する能力」を伸ばし、あわせて、(3)読む力・書く力を中心として、学術場面で要求される英語の諸技能の総合的な運用能力を向上させることを目指す。</p> <p>■授業の到達目標</p> <p>(1)英語を用いた国際的な学術研究の重要性に対する理解を深め、(2)「複眼的に思考する能力」および「多様性と地球的課題を理解する能力」を伸ばし、あわせて、(3)読む力・書く力を中心として、学術場面で要求される英語の諸技能の総合的な運用能力を向上させることを目指す。</p>
(国際人間科学部のみ) Autonomous English	<p>■授業のテーマ</p> <p>オンラインの学修支援システムの活用によって、自律的な学修姿勢を育むとともに、英語の諸技能の基礎的運用能力の向上を図る。</p> <p>■授業の到達目標</p> <p>自律的な学修姿勢を育み、英語の諸技能の基礎的運用能力の向上を図る。</p>

これらは、以下に示す神戸大学全体の理念・憲章・ポリシーと密接に関連したものである。

表3 神戸大学における教育目標等の一覧

理念等	概要
使命	<p>開放的で国際性に富む固有の文化の下、「真摯・自由・協同」の精神を発揮し、人類社会に貢献するため、普遍的価値を有する「知」を創造するとともに、人間性豊かな指導的人材を育成(する)</p>
教育憲章	<p>(理念)学問の発展、人類の幸福、地球環境の保全及び世界の平和に貢献するために、学部及び大学院で国際的に卓越した教育を提供する</p> <p>(教育原理) 学生が個人的及び社会的目標の実現に向けて、その潜在能力を最大限に発揮できるよう、学生の自主性及び自律性を尊重し、個性と多様性を重視した教育を行うことを基本原理とする。</p> <p>(教育目的)教育理念と教育原理に基づき、国際都市のもつ開放的な地域の特性を活かしながら、次のような教育を行う。</p> <p>(1) 人間性の教育: 高い倫理性を有し、知性、理性及び感性の調和した教養豊かな人間の育成</p> <p>(2) 創造性の教育: 伝統的な思考や方法を批判的に継承しつつ、自ら課題を設定し、創造的に解決できる能力を身につけた人間の育成</p> <p>(3) 国際性の教育: 多様な価値観を尊重し、異文化に対する深い理解力を有し、コミュニケーション能力に優れた人間の育成</p>

	(4) 専門性の教育:それぞれの職業や学問分野において指導的役割を担うことのできる, 深い学識と高度な専門技能を備えた人間の育成
ビジョン	神戸大学は, 「学理と実際の調和」を理念とし, 進取と自由の精神がみなぎる学府である。この伝統を発展させ, 様々な連携・融合の力を最大限に発揮する卓越研究大学として世界最高水準の教育研究拠点を構築し, 現代及び未来社会の課題を解決するための新たな価値の創造に挑戦し続ける。… 学部と大学院のつながりを強化し, 先端研究の臨場感のなかで学生が創造性と学識を深めることを重視する。また, 海外中核大学と共同研究や連携教育の重層的な交流を図り, 世界各地から優秀な人材が集まり, 世界へ飛び出していくハブ・キャンパスとしての機能を飛躍的に高める。これらの教育研究を社会と協働して推進し, 先端的技術の開発と社会実装の促進を通じて人類に貢献するとともに, 地球的諸課題を解決するために先導的役割を担う人材を輩出する。
教養科目の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自ら地球的課題を発見し, その解決にリーダーシップを発揮できる人材へと育成する</li> <li>・神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき共通の能力を「神戸スタンダード」として定め・・・「複眼的に思考する能力」「多様性と地球的課題を理解する能力」「協働して実践する能力」の修得を教養教育の学修目標とする</li> </ul>

各科目で養成が謳われている英語の確かな基礎力(英語による意見交換・読解・作文およびそれらを用いた実践的なタスク遂行)は, 本学の使命(ミッション)である, 「真摯・自由・協同」をモットーとして「学問の発展, 人類の幸福, 地球環境の保全及び世界の平和に貢献する」人材や, ビジョンに掲げられた「先端的技術の開発と社会実装の促進を通じて人類に貢献するとともに, 地球的諸課題を解決するために先導的役割を担う人材」を養成する上で必須のものである。また, こうした能力は, 教育憲章に明示された「国際性の教育」(多様な価値観を尊重し, 異文化に対する深い理解力を有し, コミュニケーション能力に優れた人間の育成)を支える基盤となる。

教育原理では「学生が個人的及び社会的目標の実現に向けて, その潜在能力を最大限に発揮できるよう, 学生の自主性及び自律性を尊重し, 個性と多様性を重視した教育を行う」とされているが, Autonomous English 科目で開発を目指す自律的学修管理能力はこの方針に直接的に立脚したものである。

本学においては, 各教員が, 共通理念・目標を充分に共有した上で, 各自が担当クラスの特性を見て最適な教材を選択することを基本としている。このため, 共通教育目標において, クラスで扱う素材の中身を直接規定することはしていないが, 実際として, 各教員は, 新聞や雑誌を始めとする多様な素材を教材として用い, 英語を通して現代社会の諸問題を深く学ぶ授業を展開している。これにより, 教育憲章が掲げる「人間性の教育」や「創造性の教育」, また, 教養科目の全体目標で

掲げる「自ら地球的課題を発見し、その解決にリーダーシップを発揮できる人材」の育成、さらには、「神戸スタンダード」で掲げる「複眼的に思考する能力」「多様性と地球的課題を理解する能力」「協働して実践する能力」を備えた人材の育成がなされている。

なお、2019年度新入生用カリキュラムでは、従前に比べ、科目目標の記述がより精緻化され、とくに、国際教養教育院の掲げる「神戸スタンダード」との関連性がより明確に打ち出されることとなった。

### 1.3 授業担当者間での目標の共有化

本部会では、外国語第Ⅱ教育部会と合同で、毎年、全専任教員・非常勤教員を対象とするオリエンテーションを実施している。過去5年間のオリエンテーションの概要は以下の通りである。本オリエンテーションは、非常勤教員の出席にかかる経費を予算化して実施しているもので、本学の英語教育の理念や科目ごとの教育目標の共有に大いに役立っている。

2015年度授業用:2015年3月9日 外国語担当者ガイダンス実施

2016年度授業用:2016年3月8日 外国語担当者ガイダンス実施

2017年度授業用:2017年3月6日 外国語担当者ガイダンス実施

2018年度授業用:2018年3月6日 外国語担当者ガイダンス実施

2019年度授業用:2018年12月10～13日 外国語担当者懇談会(4日間連続開催)

以下は2017年度用の実施案内である。

2017(平成29)年度 神戸大学外国語科目担当者ガイダンス

日時:2017(平成29)年3月6日(月)13:00～16:00

場所:神戸大学鶴甲第1キャンパス B棟 109教室, その他

内容:

<全体会> 13:00～14:40

1. 神戸大学の教育改革と外国語教育の方向性について

大学教育推進機構機構長 藤田 誠一

2. 神戸大学大学教育推進機構国際教養教育院における教育について

国際教養教育院院長 大野 隆

3. 神戸大学の外国語教育改革と授業ガイダンスについて

外国語教育部門部門長 横川 博一

4. 教務事項(授業日程, シラバス, 成績評価など)について

教育推進課共通教育グループ専門職員 堀江 智子

<分科会> 14:50～16:00

各外国語別(英語, 独語, 仏語, 中国語, 露語)分科会

部会長・幹事が中心となり、教員紹介や授業内オリエンテーション等に関する打ち合わせなどを行います。会場は当日お知らせいたします。

なお、ガイダンスに先立って、下記のプログラムも開催されますので、ご参加ください。

◆11:45～12:45 CALL 教室使用に関する説明会(希望者のみ)

会場 D506 教室

なお、2019年度用のガイダンスについては、新しい試みとして、前年度の12月に4日連続で実施し、専任・非常勤教員を対象としたガイダンスを行うこととした(2019年度新規採用非常勤教員は別途個別に対応予定)。なお、2018年12月実施のガイダンスでは、2019年度からの改革(ノートパソコン必携化+4単位化と科目名称変更)に合わせ、(1)神戸大学BEEF(※オンライン授業管理システム)の外国語教育での活用法や、(2)新科目の科目理念の説明を行い、教員からの質問に回答した。この間、出張者等を除き、出席率はほぼ8割以上になっており、理念の共有という目的は達成されていると考える。

#### 1.4 強みと課題

目標設定と目標に即した教育実践に関する強みとしては、以下の点が挙げられる。

- ・科目目標を共通化していること
- ・目標の周知を図るために専任・非常勤全員を招集するオリエンテーションを定例開催していること
- ・オリエンテーションの場で、指導のノウハウを学びあう教授法研修を実施していること

一方、課題としては、以下の点が指摘できる。

- ・科目理念が共有されるよう措置を講じてはいても、細部については、教員間で捉え方に差異があること
- ・とくに、英語スキルの指導と、多元的視野や批判的思考力等の指導のバランスについて教員により捉え方に差があること

これらの点については、共通教材・共通テストの導入など、教育内容の統制をより強めるという方向の対応もありうるが、本部会は、10学部を擁する研究型総合大学であるという本学の特性を踏まえ、個々の教員の創意工夫の余地を奪うよりも、むしろ、個々の教員が、担当する学部学生の学問的興味や関心を十分に考慮した上で、それを各自の授業内容に反映させ、結果として、教育効果を高めることを基本方針としている。もっとも、科目理念の共有をさらに進める必要があるのも事実である。2019年度からの新カリキュラムにおいて、科目目標を従前以上に詳細に記述する方向に転換したのは、この点についての対応の一環である。





## 第2章 組織構成と運営体制

### 2.1 本章で扱う内容

本章では、以下の点について、外国語第I教育部会の取り組みの現状と強み・課題を報告する。

B 当該教育部会の組織構成と運営体制(「基準2 教育運営組織」に対応)

(1) 基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか。

### 2.2 組織構成

#### 2.2.1 教育実施体制

本学の英語教育担当者は、以下の通りである(2018年4月1日現在)。

【専任教員:24名】

(専任教授:17名)青山 薫/石川 慎一郎\*/岡田 浩樹/柏木 治美\*/加藤 雅之\*/GREER, Timothy Sean\*/柴田 佳子/島津 厚久\*/田中 順子/遠田 勝/西谷 拓哉/野谷 啓二/松家 理恵/水口 志乃扶/大和 知史\*/横川 博一\*/米本 弘一

(専任准教授:7名)伊藤 友美/井上 弘貴/北村 結花/木原 恵美子\*/安岡 正晴/保田 幸子\*/山澤 孝至

【特任・特命教員:5名】

(特任教員:4名)SHOLDT, Gregory Paul /QUINN, Cynthia/SOWTER, Andrew/ANTON, Alina

(特命教員:1名)RETTIG-MIKI, Ellen

【非常勤教員:40名】

浅野 真也/芦田 利恵子/有井 松雄/石野 美香/岩井 麻紀/小川 洋介/川上 聡/木戸 康人/小橋 薫/西條 さゆみ/佐藤 由美/杉田 米行/多賀谷 真吾/武内 正美/田原 志都可/団野 恵美子/土平 紀子/中尾 朋子/長嶺 圭子/中村 則之/中村 裕子/西川 美香子/西山 史子/廣部 昭子/朴 真理子/宮川 和子/森井 祐介/山中 司/吉田 ひと美/BUSSINGUER-KHAVARI Vivian/CINCIRIPINI, Eric/DIEGEL, James/ELVITA, Wiasih/HASHINISHI, Hazel/HOWE, Bradley/KANDUBODA, Prabath/LIEB, Jonathan/PARK, Kyung Woon/PORRIT, Steve/THOMAS, Julian

専任教員のうち、大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター主配置教員(上記で\*つき)は通年で9コマを担当し、国際文化学研究科主配置教員は同6コマを担当する。また、特任教員は3~8コマ程度、特命教員は16コマ程度を担当する。非常勤教員は原則として4コマ程度を担当

当する。

専任教員のうち、応用言語学および英語教育を研究上の専攻分野とする専門家は 10 名程度で、他は、英文学・英語学などの言語系研究者、芸術学・政治学・社会学・心理学などを主専攻とする研究者である。教員の研究上の背景の広さは、「学術目的のための英語」の教育を行う本学の英語教育の理念に合致する。

特任教員・特命教員については、それぞれ厳しい審査を行い、学術目的のための英語の教育実践者としての適性を最優先して採用を行っている。

非常勤教員については、かつては専任教員による紹介だけで雇用する等の事例もあったが、より適性の高い教員を採用するため、2010年以降は明確な公募制を採用している。公募にあたっては、修士号以上の学歴と大学での教歴に加え、「5年以内に英語での学会発表・学術論文刊行の業績があること」を最低要件として明示している。これにより、国籍・母語を問わず、英語を自分自身の研究ツールとして日常的に活用している教員の雇用を目指している。

採用は2段階で行っている。JRECIN で全国に広く公募を呼びかけた後、学歴・業績・教授歴などの要件について第1次審査を行う(ウェブエントリーフォームを使用)。その後、第2次審査として面接を実施し、採用者を決定している。下記は 2018 年度に実施した非常勤公募の条件の一部である。

#### ○応募資格 Qualifications

下記の条件をすべて満たす者。

- (1) 本学の教育理念を十分に理解し、熱意と責任をもって本学学生の英語指導に当たれる者。
- (2) 英語・日本語の両言語における高度な運用能力を有する者(国籍は問わない)。
- (3) 英語教育学または英語関連分野において修士号を取得している者。
- (4) (2019年4月1日時点で)修士号取得後、2年以上の大学・短大レベルでの教育歴を持つ者。
- (5) 自己の専門分野において、過去5年以内に1点以上の英語による公刊学術業績、あるいは、英語による学会発表の経験を持つ者。
- (6) 神戸大学鶴甲第一キャンパスに通勤が可能な範囲に居住する者。
- (7) 2019年度中に65歳に満たない者。

#### ○応募方法

下記のエントリーフォームより必要事項を記入すること。

<http://bit.ly/2hy0Bej>

#### ○選考過程

第一次審査(エントリーフォーム記載内容に基づく審査)に合格した方に対して第二次審査(書類・面接)を行います。合格者には面接の日程調整の連絡を行います。面接には模擬授業を含

むことがあります。面接にかかる交通費は自己負担となります。面接に先立ち、(1)履歴書、(2)業績報告書、(3)主要 3 点の業績コピー、(4) English Communication, English Literacy, English Productive の 3 種のシラバス(各 A4 で 1p)の 4 点を e-メールの添付ファイルとして送信いただきます。面接は 2018 年 8 月を予定しています。

上記に示すように、本学の非常勤教員選考システムでは、当初のエントリーはウェブ応募だけで完了するため、応募者の負担は減る。また、選考側にとっても、数十件のデータを Excel 上で整理し、要件チェックができるため、メリットが多い。

面接は現職の大学教員であっても原則として一律で実施しており、意欲・識見・教授力ともにごくれた人材の採用を行っている。2018 年度例では、公募で 30 名程度の応募があり、1 次審査の結果、7 名程度に面接を行い、最終的に 5 名程度を採用した。採用率は約 2 割である。

## 2.2.2 運営体制

以下は、部会における意思決定のメカニズムである。

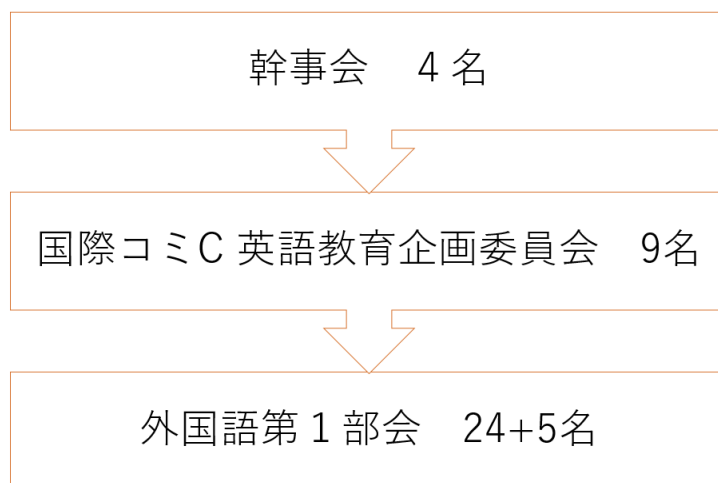


図 2 外国語第 I 教育部会における意思決定の段階(※国際コミ C=国際コミュニケーションセンター)

部会の決定プロセスは 3 つの段階を踏む。まず、第 1 段階として、部会長と 3 名の幹事で構成される幹事会(随時開催)において、部会の日常業務(時間割作成、非常勤募集・審査・採用、教科書希望とりまとめ、部会準備・実施、授業振り返りアンケートの結果分析、教員の授業改善サポート、Autonomous English 科目の企画と実施支援等)を行うとともに、各種議案について原案を作成する。

第 2 段階として、幹事会で決定された原案は、国際コミュニケーションセンター英語担当教員全員で構成される英語教育企画委員会(毎月第 2 金曜に開催)に示され、構成員の意見を聞く。幹

事会は、企画委員会での意見をふまえて原案を練り直す。

そして、第3段階として、幹事会は練り直した原案を部会(毎月第3金曜に開催)に上程する。そして、部会での審議を経て(必要に応じてさらなる修正が加わって)部会レベルでの決定がなされる。その後、規定変更等を伴う案件や人事関係の案件などは、大学教育推進委員会や国際教養教育院の上部会議にかけられる。

このシステムを動かしていく上で、重要になるのは、幹事会である。幹事の選出は選挙によるものと上位規定に定められている。従前の「教科集団」制度から現在の「部会」制度に切り替わった2012年度(平成24年度)当初は、部会において、国際コミュニケーションセンター教員から2名、国際文化科学研究科教員から2名を選挙で選んでいたが、両部局所属教員の全学外国語教育に対するコミットメントの差をふまえ、2013年度中に内規の変更がなされ、2014年度以降、(1)すべての幹事は国際コミュニケーションセンター教員が務めること、(2)幹事(部会長)の推薦は国際コミュニケーションセンター内に設けられた英語教育企画委員会が行うこと、(3)前項の推薦を受けて部会で信任投票を行い、幹事を決定することとなった。

神戸大学教育推進機構外国語第I教育部会幹事候補者選出規約

平成24年4月20日制定

平成25年12月11日改訂

(趣旨)

第1条 神戸大学教育推進機構外国語第I教育部会(以下「部会」という。)における幹事候補者(以下「幹事」という。)の選出は、この規約の定めるところによる。

(選考の機関及び方法)

第2条 幹事の選出は、国際コミュニケーションセンター英語教育企画委員会において選出された候補者に対する、部会の信任投票により行う。

(選挙権者)

第3条 選挙権を有する者は、選挙公示の日において、部会に所属する専任教員とする。ただし、休職中の者、海外渡航中の者、長期研修中の者を除く。

(被選挙権者)

第4条 被選挙権を有する者は、選挙公示の日において、国際コミュニケーションセンターおよび部会に所属し、かつ当該年度に通年で授業を担当することが確定している専任教員とする。

(選挙の公示)

第5条 部会は、選挙の期日をその7日前までに公示しなければならない。

(幹事の決定)

第6条 有効投票数の過半数を得票した場合、候補者を幹事として信任する。

2 過半数の得票数がないときは、候補者を不信任とし、速やかにこの規約により再信任投票を行う。

(以下略)

なお、部会長には全学の規定により所定の手当てが支給され、部会内の取り決めにより、通年ノルマ9コマのうち2コマを減免している。また、幹事には1コマを減免している。これらは部会長・幹事職を遂行することに伴う負担の軽減措置であるが、近年、部会長・幹事の仕事量が激増しており、問題となりつつある。

### 2.3 強みと課題

教育実施体制の強みについては、以下の点を挙げることができる。

- ・英語教育および関連分野を研究対象とし、外国語教育の企画・実施・評価を主務とする国際コミュニケーションセンター教員と、様々な専門分野を背景とする国際文化科学研究科教員が協働して指導にあたる体制ができていること。
- ・非常勤教員選考の基準や手続きが確立しており、jREC-IN Portal 上での公募を原則とするによって、適任者の選考がなされる体制が整っていること。

一方、課題としては以下の点が指摘できる。

- ・専任教員の後任不補充などにより、非常勤依存率が上昇していること。この点の解消も含め、2019年度より、全学部の必修英語単位数を4コマにする改革を行った(現状は、法学部・医学部・海事科学部は4コマ、文学部・国際人間科学部は5コマ、その他学部は6コマ)ので、非常勤依存率は今後漸減する見通しである。
- ・優秀な非常勤教員を長く安定的に雇用するシステムが存在しないこと。本件については、一部大学で実施されている外国語教育専科特命教員制度などの導入の検討が将来的に必要だろう。

また、運営体制の強みとしては、以下の点がある。

- ・部会長と幹事の各職を規定によって設置し、部会内の運營業務の遂行に責任を持たせていること。
- ・同じく、部会長と幹事に各種原案作成の責任を持たせていること。
- ・幹事会の提案を直接部会にあげるのではなく、国際コミュニケーションセンター内の英語教育企画委員会での審議を間にはさむことで、原案を改善してから部会に提出するプロセスをシステム化していること。

一方、課題としては、全学的に研究への一層の注力が求められる中、全学共通教育の負担について軽減が急務となっていることである。国際コミュニケーションセンター所属教員、国際文化学

研究科所属教員の各々について、教育負担の適正化を考えていくことが重要であろう。

あわせて、以下の点も、今後、検討を要する課題と言える。

・部会長・幹事の業務負担がきわめて大きくなっていること(2016-2017 年度は Autonomous English クラスの運営サポート業務, 2018 年度は新カリキュラムの導入準備作業があり, とりわけ負担が大きかった)。

・幹事会, 英語教育企画委員会の出席率はほぼ 100%であるが, 部会については, 教員の多忙により(部会を開催する金曜昼休みに別の会議が重なることも少なくない), 実出席率(委任状提出等ではなく教員が実際に会議に足を運ぶ率)が必ずしも高くないこと。

## 第3章 教育の内容と方法

### 3.1 本章で扱う内容

本章では、以下の点について、外国語第I教育部会の取り組みの現状と強み・課題を報告する。

C 当該教育部会の教育内容及び方法(「基準5 教育内容及び方法」に対応)

- (1) 個々の授業について内容が共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか。
- (2) 授業の内容が学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮したものになっているか。
- (3) 教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。
- (4) 単位の実質化への配慮がなされているか。
- (5) 適切なシラバスが作成され、活用されているか。
- (6) TA等の教育補助者の活用が適切に図られているか。
- (7) 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。
- (8) 成績評価基準が組織として作成され、学生に周知され、それによって成績評価・単位認定が適切に実施されているか。
- (9) 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための組織的な措置が講じられているか。

### 3.2 科目内容と目標の整合性

主要科目に関して目標を共通化していることから、シラバス内容と教科書の内容について幹事会で検討を行い、問題がある場合は、連絡して書き直しを依頼する体制が整っている。また、英語担当者懇談会や各種FD等の場で、科目目標を担当者全員が理解できるよう、詳細な説明を行っている。

とくに、2019年度からの新カリキュラム施行にあたっては、シラバス執筆と教科書選択に先立ち、2018年12月に4日間にわたって懇談会を実施し、新科目の設置趣旨や望ましい教材について説明を行った。

### 3.3 ニーズ・学術発展動向・社会的要請と科目内容との整合性

ニーズとの整合に関しては、原則として、学部(学科)別のクラス編成とし、専攻を同じくする学生集団のニーズ(興味・関心)に沿った授業展開がなされやすい体制となっている。

学術発展動向との整合については、とくに、英語教育周辺分野を自身の専門とする専任教員が研究と実践の融合を積極的に進めており、最新の研究成果を教育実践に還元している。たとえば、横川教授は科研費プロジェクト(基盤A)「学習による気づき・注意機能および相互的同調機能と第二言語情報処理の自動化プロセス」の成果をふまえ、L2使用の自動化(automatization)を促進するタスクを授業内に取り入れている。石川教授は同じく科研費プロジェクト(基盤B)「アジア圏英語学習者自然対話コーパスICNALE-Dialogue開発と分析」の成果をふまえ、アジア圏における大学

生の発話流暢性の比較結果を学生に示し、流暢性を高めるためのトレーニングプログラムを開発して授業内で実践している。

英語教育に関わる社会的要請は、文部科学省による以下のまとめに要約されている((a)～(d)の記号と下線の付与は本稿筆者による)。

○グローバル化の進展の中で、(a)国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき。今後の英語教育改革においては、その(b)基礎的・基本的な知識・技能と(c)それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成は重要な課題。

○ 我が国の英語教育では、現行の学習指導要領を受けた進展も見られるが、特に(d)コミュニケーション能力の育成について改善を加速化すべき課題も多い。東京オリンピック・パラリンピックを迎える2020(平成32)年を見据え、小・中・高等学校を通じた新たな英語教育改革を順次実施できるよう検討を進める。並行して、これに向けた準備期間の取組や、先取りした改革を進める。

文部科学省「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」

上記は初等・中等教育の改革の文脈で述べられた内容であるが、社会が大学を含む日本の学校英語教育に求めているポイントはおおよそ上記の(a)～(d)の4点でカバーされていると言えよう。2019年度新入生用カリキュラムの科目目標は、これらと十分に整合するよう作成されている。

表4 文部科学省「五つの提言」と本学英語教育目標の関係

五つの提言	新カリ科目目標
(a)国際共通語である英語力の向上	(1)英語を用いた国際的な学術研究の重要性に対する理解を深め(る)
(b)基礎的・基本的な知識・技能(の育成)	(3)聞く力・話す力／読む力・書く力を中心として、学術場面で要求される英語の諸技能の総合的な運用能力を向上(させる)
(c)それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成	(2)「複眼的に思考する能力」および「多様性と地球的課題を理解する能力」を伸ば(す)
(d)コミュニケーション能力の育成	(3)聞く力・話す力／読む力・書く力を中心として、学術場面で要求される英語の諸技能の総合的な運用能力を向上(させる)

この点において、社会的要請との整合性は担保されていると判断できる。



### 3.4 講義・演習の組み合わせ

英語の授業では、知識を伝達するレクチャー要素と、それを定着させるトレーニング要素の両面が必要である。この点については、ベストティーチャー賞受賞者などを講師に招き、非常勤教員を含めたFD研修を実施し、すべての教員が教授力を向上できるような仕組みを構築している。

### 3.5 単位実質化

大学設置基準法による45時間ルールを順守するには、1週間あたり、1時間以上の授業外学修が必須となる。この点については、シラバスのテンプレートに「事前・事後学修」という項目を設置し、各教員に必要な事項を書き込ませることで、授業外学修時間の確保を目指している。下記は記載事項の一例である。

#### ■事前・事後学修

- ・毎回、指定された準備をした上で授業に臨み、授業後に授業内容の復習を行うことが必要です。
- ・質問を必ず1つ考えてきてください。分からない語の意味を調べるなど十分な予習を行ってください。また、授業で確認した事項の復習を行ってください。
- ・Preparing for the dictation test is needed.
- ・予習に基づいた毎回のパフォーマンスが細かく評価されます。
- ・各ユニットの練習文の音読を事前学習として行い、各ユニットの音読と筆写を事後学習として行うこと。

ただ、こうした取り組みにも関わらず、学生の学修時間は必ずしも望ましい量に達していない。2018年9月にとりまとめられた「平成30年度前期授業振り返りアンケートの回答結果」(当該期間に開講された全402クラスの11,504人が回答)の【設問1】この授業に関して、平均して毎週どれくらい自己学修(予習、復習を含む)をしましたか、の回答状況は以下の通りであった。

表5 2018年度前期授業振り返りアンケートにおける学生学修時間

	3H+	2H+	1H+	0.5H+	<0.5H
人数	584	769	2833	4193	3125
比率(%)	5.08	6.68	24.63	36.45	27.16

英語科目に関して、設置基準で定める「1週間に1時間」以上の授業外学修をしている学生の比率は37%で、約4割にとどまっている。この点については、シラバスの書き方指導など、さらなる学修時間を確保させるような工夫が必要だろう。

### 3.6 適切なシラバスの作成

前述のように、FD 研修で科目理念を共有した上で、幹事会においてシラバスチェックを行い、適切なシラバスが作成されるような体制を取っている。また、国際コミュニケーションセンターにおいて、モデルシラバスを作成して公開しているほか、各教員がシラバス作成のヒントにできるよう、サンプルシラバスを以下のように公開している(外国語第 I 教育部会学内サイト)



図 3 部会サイト上のサンプルシラバスへのリンク

また、「外国語第 I(英語)授業科目実施の手引き」(2018.3 刊行)を作成し、シラバスの書き方についてとくに非常勤教員向けに解説を行っている。

#### 目次内の関連箇所抜粋

##### ○カリキュラム

##### (1)カリキュラム

##### (2)クラス編成

##### (3)英語外部試験

##### (4)「英語特別クラス」(Accelerated Course in English)について

##### (5)英語単位授与制度

##### ○授業の準備

##### (1)教科書選定

参考 教科書例

##### (2)シラバス作成

参考 モデルシラバス

### 3.7 TA・SA

TA・SA 制度については、部会構成員に周知し、希望をとりまとめて上部会議に送る制度を設けている。毎年、希望に対して 30%程度の予算しかつけられていないが、予算の範囲で希望する教員に配分を行っている。

#### 2018 年度 教員希望と配分数

石川教授(60) →17

柴田教授(56) →16

クイン准教授(15)→6

木原准教授(15) →6

田中教授(60) →17

なお、たとえば数コマを希望していても 1 コマ分しかつかないというような事例が過去に発生したので、2018 年度からは、実際の配分数をふまえて「受領を辞退する」というオプションを設け、有限の TA 等コマの有効活用を促進している。TA・SA については、全学の管理システムのもと、該当者に作業内容を報告させ、趣旨にかなった運用がなされているかどうかチェックする体制が整えられている。

### 3.8 基礎学力不足者対応

本学においては入試が有効に機能しており、いわゆる基礎学力不足問題は顕在化していないが、Autonomous English において高校までの学修内容を復習するプログラムを課しており、これがリメディアル的な教育を担っていた。2019 年度以降の新カリキュラムでは、大学設置審議会によって教育内容の変更が制限がかけられている新設学部を除き、当該授業は廃止されるが、同様のコンセプトのクラスとして Advanced English Online が開講される。英語力の高い学生だけでなく、不足を感じる学生についても、こうしたオンライン自習科目を積極的に受講することでそれぞれのニーズに応じた英語力の涵養をはかることが可能になっている。

### 3.9 成績評価基準の策定

成績評価基準については、全教員がその詳細を明示することを義務化している。その上で、全学ルール(とくに秀=Sを上限 10%以内にする)の順守を求めている。以下は、成績評価基準に関する各教員のシラバス記載の一例である。

(教員A)

#### ■成績評価方法

下記の割合にもとづき総合的に評価する。

<p>①授業中の基本的な活動(10%)</p> <p>②授業内外の課題(タスクシート, 録音課題など)(50%)</p> <p>③Progress Test(40%)</p> <p>■成績評価基準</p> <p>授業の理解度, および授業内活動への参加度によって評価します。それぞれの課題について目標を設定し, その達成の度合いに応じて評価します。なお, 期間中3回欠席した者またはProgress Testを受験しなかった者は成績評価の対象としません。</p> <p>(教員 B)</p> <p>■成績評価方法</p> <p>次の点にもとづき, 総合的に評価します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出席テスト(Quiz)(30%)</li> <li>・授業内外の課題提出や活動(15%)</li> <li>・プレゼン発表(25%)</li> <li>・期末テスト(30%)</li> </ul> <p>■成績評価基準</p> <p>プレゼンテストでは, 事前にテーマについて説明し, content/structure/vocabulary&amp;style/grammar/attitude の項目に基づき評価する。</p> <p>(教員 C)</p> <p>■成績評価方法</p> <p>Evaluation will be based on the average of the participation point and the term exam point.</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●Participation Point (/100): Participation point is the sum of the scores in the dictation test, pronunciation test, group work, the mock TOEIC test, and the assignments.</li> <li>●Term Exam Point (/100): Students will take two kinds of exams at the end of the semester and the better score is adopted as the final exam point.</li> <li>●Evaluation Policy: Evaluation will be based on the points.</li> <li>●Absence: No points will be given to absentees.</li> <li>●Score Report: Personal score reports will be given to the students.</li> </ul> <p>■成績評価基準</p> <p>S: 90%+ and within the top 10%    A: 80%+    B: 70%+    C: 60%+</p>
---

### 3.10 成績評価の客観性・厳密性の確保

成績評価については、「S の上限 10%ルール」の順守を全担当教員に求めており, 逸脱した例があれば, 幹事会で事情聴取を行うこととなっている。以下は, 「全学共通授業科目成績分布(平成 29 年度第 3Q, 第 4Q, 後期(セメスター))」(2018/6/22 集計)の抜粋である。なお, 上級選抜制 ACE コース等, 「S 上限ルール」不適用科目は除外している。

表 6 2017 年度後期の成績評価状況

評価	全学共通科目全体	外国語第1(英語)
S	9.5%	6.0%
A	32.1%	37.6%
B	26.7%	31.6%
C	17.2%	18.4%
不可	14.5%	6.4%

出典:平成 30 年 8 月 1 日 教務専門委員会「平成 29 年後期全学共通授業科目成績分布について(ご確認依頼)」

外国語第1科目の成績概況を分析すると、S については、上限 10%ルールを順守しているだけでなく、全学共通科目以上に厳格な運用がなされていることが確認される。また、人数別では、全学共通・外国語第1とも、A>B>C>不可>S の順序になっており、外国語第1科目の成績評価は、全学の状況と比べ、逸脱は認められない。

### 3.11 強みと課題

教育内容・方法にかかる強みとしては、以下の点が挙げられる。

- ・近隣の同規模の国立大学と比べて、教育内容をコントロールする体制的枠組みが機能していること。
- ・全学の教育目標や社会の要請をふまえた科目目標が部会における審議のプロセスを経て決定されていること。
- ・FD 研修会や幹事会によるシラバスチェック・教科書チェックなど、科目目標を各自の授業に反映させる仕組みが出来上がっていること。
- ・e-ラーニングをうまく使用し、学生が個々のニーズに応じて英語の基礎力あるいは応用力を高められるカリキュラムが用意されていること。
- ・成績評価の説明性(accountability)の確保の重要性が教員に周知されており、問題があれば、呼び出して事情聴取を行う体制ができていること。

一方、課題としては、以下の点が挙げられる。

- ・授業外学修時間が短いものが少なくないこと。
- ・充実した指導のために必要となる TA・SA については、希望コマ数に対して配分が 2~3 割にとどまっており、十分な手当が予算的になされていないこと。
- ・同じく、部会として使用できる経費が年間 64,500 円であり(2018 年度実績)、部会独自で教育改善のためのアンケートを実施したり、必要な手当を講じたりする財政的基盤がきわめて脆弱であ

ること。以下は、2018年度の予算と執行状況である。

外国語第 I 教育部会 2018 年度予算執行計画

(収入) 64,500 円

(支出) メイリングリスト管理費(3つ): $\yen1,500 \times 3 = \yen4,500$

外部評価等テープ起こし:40,000 円

ACE カンファレンス消耗品:20,000 円

## 第4章 学修成果

### 4.1 本章で扱う内容

本章では、以下の点について、外国語第I教育部会の取り組みの現状と強み・課題を報告する。(なお、以下の原文にあった「学習」は、本学での用語使用ルールに基づき、「学修」に変換している。)

D 当該教育部会の教育活動による学修成果(「基準6 学修成果」に対応)  
 ・授業評価等、学生からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。

### 4.2 学修の成果

2018年9月にとりまとめられた「平成30年度前期授業振り返りアンケートの回答結果」(当該期間に開講された全402クラスの11,504人が回答)の【設問2】この授業の内容はよく理解できましたか、および【設問3】シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか、に関する全受講生の回答状況は以下の通りであった。

表7 2018年度前期授業振り返りアンケートにおける学生の授業理解度  
 理解度(理解できた)

	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらとも言 えない	どちらかと言 えばそう思わ ない	そう思わない
人数	3243	5161	2021	527	552
比率(%)	28.19	44.86	17.57	4.58	4.8

表8 2018年度前期授業振り返りアンケートにおける学生の授業目標達成度  
 到達度(達成できた)

	十分に達 成	ある程度 達成	どちらとも 言えない	あまり達 成できな かった	達成でき なかった	目標がわ からない	シラバス を読んで いない
人数	1812	4630	2192	620	220	324	1706
比率(%)	15.75	40.25	19.05	5.39	1.91	2.82	14.83

まず、理解という点では、73%が一定の理解ができたと回答している。また、理解できなかったという学生の比率は10%未満である。これにより、授業で扱われた内容について、学生は一定のレベルで理解・咀嚼していると結論できる。

次に、到達度についてであるが、56%が十分に、あるいは一定の程度で達成できたと述べている。

理解度に比べると比率は下がるが、一方で、達成できなかったと答える者は 7.3%にとどまっている。本学の学生は、こと英語については、厳しい自己評価を行う傾向にあり、この点をふまえて考えると、学生は授業を受けることで、内容を理解し、一定の達成の手ごたえを感じていると総括できるだろう。なお、シラバスを読んでいなかったり、シラバス目標をきちんと把握できていなかったりした学生があわせて 17%程度存在したことは課題である。英語科目については、他の科目と異なり、教員によってはシラバスをすべて英語で書く場合があり、このことが影響している可能性があるが、シラバスの目標を確認させるプロセスを初回授業で共通で行う必要があると思われる。

#### 4.3 強みと課題

学修成果について、強みとしては以下の点が挙げられる。

- ・学修成果の確認の前提である「授業振り返り」に学生を参加させることが全学的に積極的に行われており(※回答率が低い場合は全学の評価 FD 委員会で対応を報告させられる)、英語についても、半期で、延べ 1 万人を超える回答数が得られていること
- ・「内容が理解できなかった」「目標が達成できなかった」と回答する者が全体の 10%未満であり、多数の学生においては、一定の学修成果が確認できていること

一方、課題としては以下が挙げられる。

- ・シラバスやシラバス目標を把握しないまま授業を受けている学生が 10%程度存在すること。

課題点については、2019 年度より、授業の初回でシラバスを読み上げさせるなど、対応を講じる予定である。



## 第5章 施設など

### 5.1 本章で扱う内容

本章では、以下の点について、外国語第I教育部会の取り組みの現状と強み・課題を報告する。(なお、以下の原文にあった「学習」は、本学での用語使用ルールに基づき、「学修」に変換している。)

E 当該教育部会の教育活動に関わる施設・設備及び学生支援(「基準7 施設・設備及び学生支援」に対応)

- ・教育活動を展開する上で必要な設備・施設等が整備され、有効に活用されているか。
- ・自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。
- ・授業科目の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。
- ・学生支援へのニーズが適切に把握され、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

### 5.2 設備・施設

本学では、CALL 教室が整備されており、音声・動画を使用することが多い English Communication の授業の大半は CALL 教室で実施されている。



図4 CALL 教室配置



図5 CALL 教室教卓

以下は 2018 年度前期において、英語が担当されている月曜と水曜の CALL 教室配当状況である。12 室の語学専用特別教室のうち、2 室はタブレットパソコン(iPad)が常備され、可動式の椅子をおくなど、アクティブラーニング対応型教室になっている。

(月曜)

月	D405		D406		D503 (iPad)		D504		D505		D506		D509		D510		D511		D512		D615		D404 (iPad)	
	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当
1限	Com A	岩井	Com A	ハシニシ			Auto	伊藤	Lit	木戸			Com A	北村			Com A	川上	Com A	中尾				
2限	Com A	岩井			英語科コン テンツ演習	木原	Com A	石川	Com A	木戸	Com A	青山	Com A	宮川			Com A	川上	Lit A	中尾				
3限	Lit	遠田	Com A	ハシニシ			Com A	石川	Lit	木戸					Com A	小川 ※1			Com A	長機	Com A	柏木	英語科ト プラー	レッツパ ンクはな
4限	Com A	伊藤	Com A	ハシニシ	Com A	芦田	Auto	石川 ※3	Com A	水口	Auto	青山	Auto	柴田	Auto	北村 ※2	Prod	木原 ※4	Com A	長機	Auto	田中 (順)	Prod (ACE)	グリア
5限	Auto	伊藤					Auto	松家	Auto	水口	Auto	青山	Auto	柴田	Auto	北村	Auto	木原			Auto	横川		

(水曜)

水	D405		D406		D503 (iPad)		D504		D505		D506		D509		D510		D511		D512		D615		D404 (iPad)		
	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	授業	担当	
1限	Com A	朴 (環)	英語 文章表 現)	(ショルト)			Lit	木原	Com A	木戸							Com A	柴田	Com A	朴 (真)	Com A	柏木	英語文 章表現	ショルト	
2限	Com A	朴 (環)	Com A	田中 (順)	Prod (ACE)	レディマ チニキ	英語科 コンテ ンツ演習	石川	Com A	木戸	Prod	多賀 谷					Com A	西條	Com A	朴 (真)	Com A	横川			
3限	Com A	遠田	Com A	田中 (順)	Prod (ACE)	ショルト	Com A	石川	Com A	木戸	Prod	多賀 谷	Com A	青山	Prod	エルヴィ タ	Com A	伊藤	Com A	北村	Com A	柏木	Prod (ACE)	グリア	
4限								Lit	木戸	Com A	多賀 谷	Com A	佐藤	Com A	エルヴィ タ			Com A	朴 (真)				英語上 級1	ショルト	
5限			Auto	田中 (順)			Auto	石川	Auto	水口	Auto	木原			Auto	松家	Auto	横川				英語 トプ ラー	パニ ユウ	仏語 中級C	廣田

図 6-7 2018 年度の CALL 教室配当表(月曜・水曜)

CALL 教室では、各室に 45 台程度の学生パソコンが設置されており、パソコンを使って会話練習を行ったり、自分の発音を録音して音声分析したりする等のトレーニングが可能となっている。また、教卓には教師用パソコンがあり、学生の学修の様子をモニターできるほか、パソコン・DVD・OHC 等を使ってメディアを教室前方の大型スクリーンや学生の卓上の中間モニターに送出することができる。

なお、大学全体が 2019 年度新入生より、個人にノートパソコンを持参させる、いわゆる「BYOD」(Bring your own device)方針を採用することに伴い、既存の CALL 教室は 2018 年度末で(学生用パソコンを常設しない)語学専用教室に改装される予定である。新しい教室では、教員パソコンのモニター提示等の基本機能を維持しながら、椅子や机の可動性を高める等、アクティブラーニングへの対応力をさらに強化する予定である。

### 5.3 自習環境

前述の CALL 教室では、アルク社の「Net Academy 2」等のオンライン学修システムが利用できるようになっており、教室の一部を週 3 日(火曜・水曜・金曜)、学生の自習用に開放している、学生は空き時間にこれらの教室で英語のトレーニングを行うことができる。

また、国際コミュニケーションセンターが運営する「ランゲージハブ室」には、月曜から金曜まで、常時、留学生 TA が待機しており、学生がいつでも英会話(他言語にも対応)の現地体験を持てる環境が用意されている。



図 8 ランゲージハブ室活動風景 出典: [http://www.solac.kobe-u.ac.jp/Language\\_HUB.jpg](http://www.solac.kobe-u.ac.jp/Language_HUB.jpg)
















授業時間	セッション時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
2限 10:40 ~ 12:10	11:40 ~ 13:10	11/12 ~  Todor (英・仏) ブルガリア	10/23 ~  Elisa (英・独) ドイツ	11/14 ~  Miriam (英・仏・葡) ポルトガル	10/18 ~  Zack (英) アメリカ	11/16 ~  Dana-Maria (英・独) ドイツ
3限 13:20 ~ 14:50	13:20 ~ 14:50	10/15 ~  Ku (英・中) 台湾	10/23 ~  Vilde (英) ノルウェー	11/14 ~  Gabriela (英) チェコ	11/15 ~  Veera (英) フィンランド	10/19 ~  Li (英・中) 中国
4限 15:10 ~ 16:40	15:10 ~ 16:40	10/15 ~  Amar (英) モーリタニア	11/6 ~  Nicholae (英) ルーマニア	10/24 ~  Andrei (英) ルーマニア	11/15 ~  Jerusa (英・独) ドイツ	11/16 ~  Ugne (英) リトアニア

図 9 2018 年度後期のランゲージハブ室担当 TA 表

下記は過去4年間のハブ室の利用状況である。

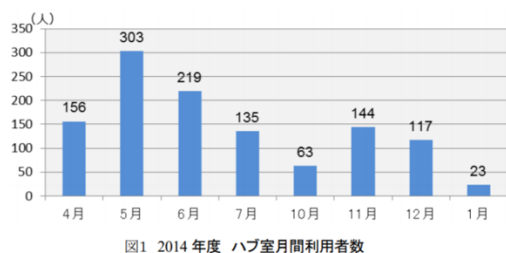


図1 2014年度 ハブ室月間利用者数

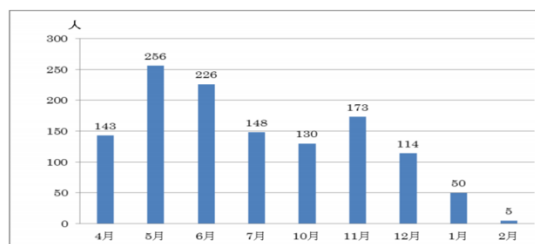


図1 2015年度 HUB 室月間利用者数

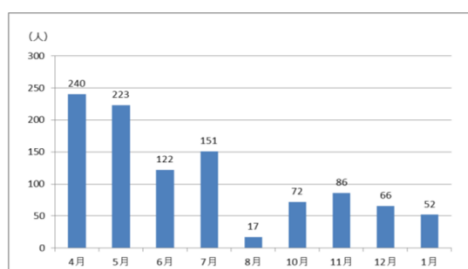


図1 2016年度 HUB 室月間利用者数

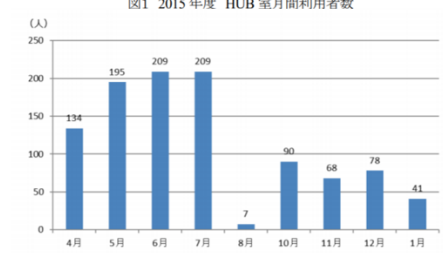


図1 2017年度 HUB 室月間利用者数

図 10 2014～2017 年度のランゲージハブ室月次別利用者数(出典:国際コミュニケーションセンターメディア研究部門による部門報告書の資料より再掲)

年度により差があるが、前期には1か月に100～300名程度、後期には同じく1か月に10名から200名程度の参加がある。この間、大学のクォーター制度導入などがあり、学生が総じて忙しくなったことで、利用者は漸減傾向にあるが、それでも一定数の学生がランゲージハブ室を定期的に利用している。

#### 5.4 事前ガイダンス

かつては新入生を集めて、口頭による「外国語ガイダンス」を実施していたが、説明した内容が記録に残らないといった課題もあった。そこで、2010年度からは、ガイダンス実施の効率化を図るため、国際コミュニケーションセンターシステム研究部門において、「神戸大学外国語ハンドブック」を毎年作成することとしている。ハンドブックは英語以外の外国語の情報も掲載しており、約70ページである。

ハンドブックは、英語の初回授業で、担当教員より、新入生全員に1冊ずつ配布される。担当教員は、初回授業の約20分間を使って、ハンドブックに基づき、英語科目の履修上の注意や、自律学修の進め方について導入指導を行う。また、非常勤教員を含め、すべての教員が同じ内容を確実に伝達できるよう、新年度の授業の開始に先立ち、例年3月(2019年度については2018年12月)に教員向けガイダンスも実施している。

#### 5.5 学修相談・支援

上記の事前ガイダンスにおいて質問があれば、その場で対応するほか、担当教員で解決できな

い問題(留学に関わる質問など)は幹事会に回送し、幹事会から担当教員を介して回答を返す仕組みができています。また、すべての専任教員はオフィスアワーを設け、学生の質問や相談に対応している。

## 5.6 強みと課題

施設等に関して本学の英語教育の強みは以下のようにまとめられる。

- ・CALL 教室や、タブレットコンピュータ(iPad)型教室など、ICT やアクティブラーニングに対応した教室環境が整っていること。
- ・ランゲージハブ室や CALL 室の自習開放など、学生の自律的な学びを支援する設備・体制が整っていること。

一方、課題としては以下の点が挙げられる。

- ・「ノートパソコン必携化」に伴う CALL 教室の一般教室化が 2019 年度から開始されるが、新しい教室環境での教育の実践についてはいまだ模索の途上であり、今後研修などの充実が求められること。
- ・教室の改装においては学生の可動性を高める教室デザインの必要があるが、教室面積と 1 つの教室に入れる学生の収容人数が変更できないことから、設計上の問題が存在すること。

## 第6章 教育の質の改善

### 6.1 本章で扱う内容

本章では、以下の点について、外国語第I教育部会の取り組みの現状と強み・課題を報告する。(なお、以下の原文にあった「学習」は、本学での用語使用ルールに基づき、「学修」に変換している。)

F 当該教育部会の教育の質の改善・向上(「基準8 教育の内部質保証システム」に対応)

- ・学習効果などを自己点検・評価し、教育の質の改善・向上を図る体制が整備され、機能しているか。
- ・ファカルティ・ディベロップメントが適切に実施され、組織として教育の質向上や授業改善に結びついているか。
- ・教育支援者や教育補助者に対し、教育活動の質向上を図るための研修等の取組が適切に行われているか。

### 6.2 改善システム

本学では、クォーターごとに「学生による授業振り返り」をオンラインで実施している。前述のように学生に「振り返り」を行わせることが教員に義務付けられており、本部会については、下記のように7割を超える回答率を達成している。

## アンケート回答率 H29年度より呼びかけが「教員義務」化

・英語に限れば回答率は7割を超えている(大教全体57%)

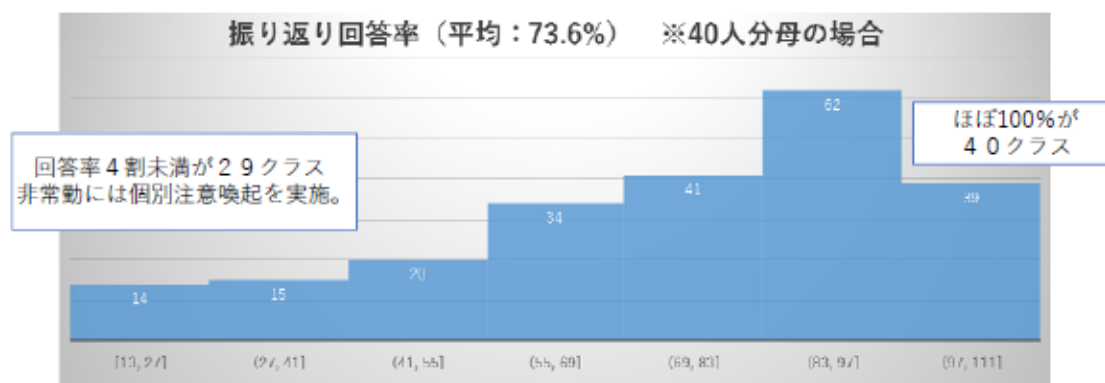


図11 学生授業振り返り回答率分析(出典:2017/7/21 外国語第I教育部会報告資料)

この調査で得られたデータは、担当教員各々が確認できるようになっており、担当教員はクォーターごとに学生の回答結果を確認して、コメントを送信することが求められている。

5：この授業を振り返って自らの学修に関する感想や、授業をより良くするための意見・要望があれば書いてください。【記述式：500以内】

回答番号	回答
1	毎週スピーチを用意しなければならなかったのが大変でしたが、ためになったと感じます。
2	多くの事項について考える機会ができてよかった
3	とても興味深い内容の講義であるため教養が身についたと思います。英語を通じて実社会の問題を扱ってくれたのが良かったです。
4	正しい発音を学習したことでリスニング能力が少しながらも上がり留学生との英語での会話でもう一度聞き返すということが減った。
5	最高です
6	自分が知らない問題についても触れることができ、とても内容の濃い授業でとても良かったです。
7	自分の英語を見つめなおし、学習するいい講義になったと思う。
8	有益であった。

6：総合的に判断して、この授業を5段階で評価してください。【選択式：5者択1】

回答番号	回答	人数
1	有益であった	33
2	どちらかといえば有益であった	7
3	どちらともいえない	0
4	どちらかといえば有益ではなかった	0
5	有益ではなかった	0

7：あなたはこの授業の担当教員を全学共通教育ベストティーチャー賞に推薦したいと思いませんか。（複数授業での推薦可）【選択式：2者択1】

回答番号	回答	人数
1	はい	37
2	いいえ	3

アンケートの結果に対するコメントを入力してください。

コメント	半期、お疲れ様でした。いただいた意見をふまえ、さらなる授業改善に努めます。その都度の授業改革の報告などは研究室のウェブサイトでも公開していますのでご興味があればご覧になってください。
コメント英文	

コメントを登録する

図 12 授業振り返りシステムにおける教員コメントの記入欄（石川教授例）

さらに、学期終了時には、全教員は、「全学共通授業科目の自己点検・評価」を作成し、それぞれが所属する部会の部会長に提出することが求められている。下記は自己点検の評価項目である。

- 5-1-③ 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。
- 5-2-① 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。
- 5-2-② 単位の実質化への配慮がなされているか。
- 5-2-③ 適切なシラバスが作成され、活用されているか。
- 5-3-② 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

6-1-② 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

7-2-① 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

7-2-② "学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

以上の 2 つの仕組みにより、教員は、個人単位で自分の授業を振り返り、改善の模索を行うことができる。

加えて、上述の学生による「授業振り返り」の全回答データと、教員による「自己評価・点検」のデータは、幹事会においてもチェックする。とくに、授業振り返りにおける記述式回答に書かれたコメントは丁寧に分析し、問題があると判断されれば、該当教員を呼んで、面談を行っている。2017～2018 年度については、年ごとに 1～2 名程度を呼んで授業の様子を聴取し、必要に応じて改善の助言を行った。なお、過去に面談した教員のクラスの評価は、面談後、向上しており、こうした助言が一定の効果を持つことを示している。

また、「授業振り返り」の回答データに基づき、全学共通教育ベストティーチャー賞を選定する工夫も設けられている。下記は過去の受賞者のリストである。なお、2012 年度までは、外国語第1と外国語第2から1名を選ぶ制度であったが、2013 年度からは外国語第 I 教育部会のすべての授業で1名を選ぶ方式となっている。

2010 年度 前期:なし 後期:杉浦清文(非常勤)

2011 年度 前期:堤美佐子(非常勤) 後期:なし

2012 年度 前期:杉浦清文(非常勤) 後期:なし

2013 年度 前期:堤美佐子(非常勤) 後期:Tim Greer

2014 年度 前期:石川慎一郎 後期:石川慎一郎

2015 年度 前期:RETTIG-MIKI, Ellen(特命) 後期:Tim Greer

2016 年度 前期:石川慎一郎 後期:石川慎一郎

2017 年度 前期:ウアン・マリアン(特任) 後期:西川美香子(非常勤)

2018 年度 前期:シヨルト・ポール(特任)

なお、2017 年度からは、受賞者に加え、上位 10 名を公表するようになっている。2018 年度前期は以下の教員が該当した。

石川 慎一郎／岩井麻紀(非常勤)／小川 洋介(非常勤)／川上 聡(非常勤)／多賀谷 真吾(非常勤)／西川 美香子(非常勤)／HOWE, Bradley(非常勤)／ハシニシ ヘイゼル(非常勤)



勤)／山中 司(非常勤)／吉田 ひと美(非常勤)

このような仕組みにより、教員の授業力を評価する体制ができあがっている。

### 6.3 FD

教員向け FD の中でとくに重要な催しは、原則として、新年度授業の開講前の 3 月に開催される外国語科目担当者ガイダンスである。下記は 2017 年のガイダンス例である。

2017(平成 29)年度 神戸大学外国語科目担当者ガイダンス

日時:2017(平成 29)年 3 月 6 日(月)13:00～16:00

場所:神戸大学鶴甲第 1 キャンパス B 棟 109 教室, その他

内容:

<全体会> 13:00～14:40

1. 神戸大学の教育改革と外国語教育の方向性について

大学教育推進機構機構長 藤田 誠一

2. 神戸大学大学教育推進機構国際教養教育院における教育について

国際教養教育院院長 大野 隆

3. 神戸大学の外国語教育改革と授業ガイダンスについて

外国語教育部門部門長 横川 博一

4. 教務事項(授業日程, シラバス, 成績評価など)について

教育推進課共通教育グループ専門職員 堀江 智子

<分科会> 14:50～16:00

各外国語別(英語, 独語, 仏語, 中国語, 露語)分科会

部会長・幹事が中心となり, 教員紹介や授業内オリエンテーション等に関する打ち合わせなどを行います。会場は当日お知らせいたします。

英語:石川教授授業デモ/Sholdt 教授授業デモ

なお, ガイダンスに先立って, 下記のプログラムも開催されますので, ご参加ください。

◆11:45～12:45 CALL 教室使用に関する説明会(希望者のみ)

会場 D506 教室

備考 当日参加も可能ですが, 準備のため, 参加希望の方は事前に CALL 編集室([call-office@solac.kobe-u.ac.jp](mailto:call-office@solac.kobe-u.ac.jp))にご連絡いただければ幸いです。

◆10:00～11:30 外国語教育セミナー(模擬国連と外国語教育に関する講演)

講演 National Model United Nations: Preparation, Participation and Outcomes

講師 Lori Zenuk-Nishide 先生(神戸市外国語大学)

会場 D615(事前申込不要)

前述のように、非常勤教員には手当措置を行った上で出席を求め、本学の外国語教育の理念を共有し、新学期の初回の授業で行うガイダンスへの対応を整え、あわせて、各自の授業技術の向上を図る場としている。

また、国際コミュニケーションセンター主催で、毎年 12 月に、外国語授業担当者の授業ピアレビューを組み合わせた FD を実施している。下記は 2018 年に実施した内容である。

神戸大学 大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター
第 25 回外国語教育セミナー:公開ピアレビュー+講演会
日時 2018 年 12 月 7 日(金) 0850~1120
会場 神戸大学鶴甲第1キャンパス(国際文化学部キャンパス)D615 (CALL 教室)
第 1 部 センター教員ピアレビュー(0850~0950)
報告者
英語:大和教授「ライティングを取り入れた English Literacy の授業について」
英語:横川教授「アカデミックスキルを涵養する English Communication の授業について」
未修:朱教授「MRI 動画を用いた中国語の発音指導について」
※ビデオカンファレンス方式を採用しています。各教員が自分自身の授業風景をビデオに撮影し、その一部を上演しながら、それぞれの授業の工夫などについて報告します(質疑・入れ替え込み1名 20 分)。
第 2 部 講演会(1000~1120)
講師 大阪府立大学高等教育推進機構 清原文代教授
演題 「外国語教育におけるスマートフォン及びタブレットの活用」

こうした取り組みの結果、英語科目に対する学生の評価はおおむね好意的なものとなっている。2018 年 9 月にとりまとめられた「平成30年度前期授業振り返りアンケートの回答結果」(当該期間に開講された全 402 クラスの 11,504 人が回答)の【設問 4】この授業で改善が必要と思われる事項があればチェックしてください(複数可)、に対する回答状況は以下の通りである。

表 9 2018 年度前期授業振り返りアンケートにおける学生の授業に対する改善希望

	熱意	接し方	話し方	板書・メディア	シラバス	進度	特に無し
人数	594	1104	1126	1233	300	1563	7922
比率	5.16	9.6	9.79	10.72	2.61	13.59	68.86

複数回答を許容したにもかかわらず、「特に無し」とした学生が 7 割近くになっている。進度の速さや板書の仕方やパソコンの使い方などに改善がいくらか指摘されているものの、全体として見れば、

PDCA の仕組みや FD 研修は授業の質の向上に一定の効果を上げていると言えるだろう。

また、同じ調査における【設問6】総合的に判断して、この授業を 5 段階で評価してください、の回答状況は以下の通りである。

表 10 2018 年度前期授業振り返りアンケートにおける学生の授業に対する評価(有益度)

	有益	どちらかと言 えば有益	どちらとも言 えない	どちらかと言 えば有益で なかった	有益でなかつ た
人数	3859	4244	2032	633	736
比率(%)	33.54	36.89	17.66	5.5	6.4

全体の 70%超が授業は有益またはどちらかと言えば有益であると答えている。このデータからも、本学の英語教育が一定の質を維持できていることが証明される。

#### 6.4 支援者の研修

現状において、英語授業の支援者となるのは TA ないし SA に限られるが、該当者には、文書で以下のような注意喚起と助言がなされている。

「スチューデント・アシスタント実施報告書」または「ティーチング・アシスタント実施報告書」

・最終勤務日終了後、速やかに実施報告書を学務課総務グループにご提出下さい。

「SA・TAの心得及び義務」

1. 業務内容を事前に担当教員に確認し、綿密に打ち合わせを行うこと。
2. 勤務時間が履修している授業時間と重複しないようにすること。
3. 勤務時間がSTA, RAやチューター等の他の業務と重複しないようにすること。
4. 学生との対人関係に注意すること。
5. 事前に使用機器の操作方法等を熟知しておくこと。
6. 勤務時間を厳守すること。
7. 業務上知り得た学生の成績や連絡先等の個人情報を、SA・TAの業務以外に利用しないこと。

また、どのような媒体や方法によっても、個人情報を自宅等の学外に持ち出さないこと。

8. 毎回、出勤簿に押印し、定められた期日までに部局担当係まで提出すること。

9. 雇用期間終了後は、実施報告書を定められた期日までに部局担当係まで提出すること。

出典:「SA・TA採用に関する連絡事項」 (大学教育推進機構)(2018 年 10 月)

多くの場合、英語担当教員の TA は、同教員が大学院国際文化学研究科で主指導教員を務める留学生であり、他の教科に比べ、教員と TA 等の連絡は密で、平素のゼミ指導等の場を使って、TA

業務に対するサポートや監督も提供されている。

## 6.5 強みと課題

教育の質の改善に関して、強みとしては以下のような点が掲げられる。

- ・学生による授業振り返り、教員による授業の自己評価、という2つの仕組みによって、教員が自主的に学生の反応を確認し、自ら改善を試みる体制が整っていること
- ・教員自己評価の提出先が部会長になっており、未提出に対して指導が入るなど、PDCA が義務として回る仕組みになっていること
- ・加えて、幹事会による授業振り返り内容のチェックや、面談など、問題の発生を未然に防ぎ、かつ、授業の改善を行うための仕組みが実際に稼働していること
- ・豊富なFD機会が設けられ、専任教員のみならず、非常勤教員に対しても授業力を向上させる研修の機会が提供されていること

一方、課題としては以下のような点が挙げられる。

- ・学生による授業振り返りの結果が特によかった教員についてはベストティーチャー賞という顕彰の仕組みが、また、特に問題があった教員については面接などの仕組みが存在するが、いずれにも該当しない多数の教員について、授業力向上のインセンティブを喚起する仕組みが必ずしも十分ではないこと。
- ・学生による授業振り返りに対して教員がフィードバックを返すことは重要であるが、現在のシステムでは、実施日から結果の公開日（つまり、教員がフィードバックできる日）まで2か月程度のブランクがある。たとえば、2018年度の第2クォーターを例にすると、クォーター終了2週間前の7月16日からアンケート期間が始まったが、その結果が公開されたのは夏休みをはさんだ9月28日である。しかも、結果の公開日は教員に通知されず（各自でシステムにアクセスして確認が必要）、さらに、フィードバックの未入力をチェックする体制は整っていない。この点については全学評価FD委員会等で検討し、全学的にシステムとして改善を図ることが必要であろう。

## おわりに

以上、神戸大学の英語教育について概観し、強みと課題について分析を行ってきた。今後、内部教員や外部評価委員の諸氏からご指導・ご批判をいただきながら、「真摯・自由・協同」の精神を発揮し、人類社会に貢献するため、普遍的価値を有する「知」を創造するとともに、人間性豊かな指導的人材を育成(する)という本学の設立の使命に貢献できる英語教育の在り方についてさらに模索を続けていきたい。

## 第2部 外部評価・座談会

## 第7章 外部評価委員会

第1部の内容を委員に事前送付の上, 神戸大学において, 外部評価委員会を開催した。以下は委員会の概要である。

平成30年度神戸大学大学教育推進機構国際教養教育院  
外国語第I教育部会 外部評価委員会

日 時 平成31年1月31日(木)10:40~12:10

場 所 神戸大学鶴甲第1キャンパスD603

### 【実施スケジュール】

- (1)開会挨拶・委員紹介
- (2)外国語第I教育部会からの説明・質疑応答
- (3)外部委員による講評と意見交換
- (4)閉会挨拶

### 【出席者】

外部評価委員

沖原 勝昭 神戸大学・名誉教授

伊庭 緑 甲南大学・教授

自己評価委員

柏木 治美 外国語第I教育部会長, 大学教育推進機構・教授

石川 慎一郎 外国語第I教育部会幹事, 大学教育推進機構・教授

加藤 雅之 外国語第I教育部会幹事, 大学教育推進機構・教授

木原 恵美子 外国語第I教育部会幹事, 大学教育推進機構・准教授

陪席者

藤田 誠一 理事(教育担当)・大学教育推進機構長

齋藤 政彦 副学長(共通教育・数理データサイエンス担当), 大学教育推進機構国際教養教育院長

坂本 千代 大学教育推進機構国際教養教育院評価・FD 専門委員会委員長

委員会では, 報告書の各章ごとに幹事より説明を行い, 委員から質問・指導・助言を受けた。詳細については, 議事録を確認されたい。

## 7.1 沖原委員ご質問・ご講評

(序章・1章関連)

沖原 ベーシック・コースの English Communication, あるいは, English Literacy の中に, A1, A2, B1, B2 が付いていますが, その区別は何でしょうか。

石川 いわゆる Semester の授業を半分に割って, A1, A2 という形で, 0.5 単位ずつ出しているということです。

沖原 A と B の違いはどうか。

石川 これは 1 年間の中での前期と後期ということなのですが, 緩やかな積み上げというふうに申しています。このところの積み上げを, どのぐらいクリアにするかっていうことは, 内部でも議論があったんですが, 例えば, 1 年生と 3 年生なら, ある程度, 3 年生のほうがレベルが高いのは分かるにしても, 1 年間の中で, 春と秋で, どこまで能力の違いがあるのかっていうところは, かなり難しいんで, 一応, 緩やかな積み上げということで A と B という名称にしています。ですから, 前期の A を落とした人は, 前期の A を, 取り直さないといけない。やはり, 前期と後期に質的な差が, 一定程度, 認められているというふうなことでございまして, それが, 今, A, B というふうになっております。

沖原 アドバンスト・コースで, A が必修, B が選抜上級 (p.7) となっていますが, これの説明をしてもらえますか。

石川 いわゆるアドバンストの科目には, 誰でも普通に受けられるアドバンストクラス, アドバンストというのは, 学生の能力が高いというよりは, ちょっと高めのレベルのことを教えるということで, 希望に応じて受けるような科目が, 各種設定されています。

ABC というのは, 内容に応じて分けていまして, 例えば, プレゼンテーションをやるクラスであったり, 短期留学と一緒にいくクラスであったり, 希望制で取れるようなアドバンストクラスというのがございます。

それとは別に, ACE って, いわゆる特別選抜クラスというふうなものの中にも, アドバンストの科目が設定されていますので, そこはちょっと, 並走してるといふような格好になっております。

沖原 4 単位にそえるということは, 6 単位必修にしていた学部が 4 単位に減るわけですね。これから, それが進行するわけだけでも, ざっくりした話として, コマ数の減が見込まれますね。

石川 全体ですね。



沖原 全体で、担当コマ数の減がありますが、それに応じた担当教員の定員減、後任不補充ということは、あり得るのかどうなのか。

石川 これは、全学の動向にもよるんですけども、例えば、学長なんかは、共通教育を支える教員については、手厚く全学で見ているといけいねというふうなことをおっしゃっておられます。定員がきっちり補充しにくいというのは、むしろ、国際文化学研究科のほうの問題でありまして、国際文化は、専門性を非常に高めておられますので、その中で、英語のプロパー教員が次第にへってきたという側面はあると思います。

沖原 不補充ということはもう起こっているし、これからも見込まれるということですね。

坂本 それは、第二外国語のほうが、もっと険しい。

石川 ですから、内情をいえば、これまでのコマを維持するためのお金だとかスタッフだとかというのがかなり厳しくなってるという、率直な状況はありますね。

(2章関連)

沖原 部会長の選出方法は、どうなっていますか。

柏木 国コミのほうから幹事を出すという体制になりましてから、国コミの中で、互選で部会長を決めて、その部会長と、それから幹事、その体制を信任投票していただくという形で、部会のほうに上げております。ですので、原案は、いわゆる、国際コミュニケーションセンターでの英語教育企画委員会で、という形です。

沖原 今は、センター長が自動的になるということじゃない？

柏木 センター長は、外国語教育部門長になるので、部会長とは別という形になります。

沖原 はい、分かりました。あと、特任、特命教員について、それぞれの部局で、当然、任用等のお世話はされるわけですね。

柏木 そうですね。他部局に関しましては、人事等は部局で行っておられます。その方に、何コマ持っていただくかという形になります。

沖原 だから任用についての選考には、センターは関わらないということになりますね。

柏木 タッチしていないですね。

沖原 はい、分かりました。あと、そのことに関連して、専任が15名、国文所属になっていますが、任用のときに、共通英語を担当するための資格審査がどのくらいされるのか。私がいた当時は必ずしも十分ではなかったように思いますが、それは今も変わりませんか。

柏木 そうですね。

沖原 はい、分かりました。

石川 例えば、過去5年以内に、1本以上、英語の論文を書いてない専任がいるとは、ちょっとあんまり思えないんですけれども、例えば、そういう何らかの基準を決めて、この人、英語部会に入れたいんだけど、学部から言ってきたときに、すいません、NOというふうな仕組みは、実はないです。その確認は取っていないので、それは非常勤に対してのみ、対応ということです。

沖原 現状の制約に妥協しないとイケないとは思いますが、それは本当はおかしな話ですね。自分たちの職務を共有する人の任用に主体的に関われないという状況は、制度上の矛盾だと前から思っていました。

石川 ちょっと、坂本先生に、例えば、国際文化で、いわゆる専任教員を雇われるとき、その方に外国語の負担がくっ付いてる場合、ありますよね。そういう場合は、外国語の教授能力なんかについても、若干は見てくださっている感じなんでしょうか。

坂本 採用の段階では、もちろんです。英語で、あるいは、フランス語だったら、フランス語で論文書いているとか、それから、フランス語で話したり、聞いたり、あるいは会議をしたりする能力があるのかは、かなり調べてます。ただ、英語の専門の先生ではないですから、言語学でも何でもなくて、例えば、国際関係論とかなんかだった場合、多分、英語圏の大学で学位取りましたとか、多分、そういう点は見てると思いますけれども。だから、あんまり関係ないけど、英語にとかっていうことは、あり得ないことですよ。それはあり得ないと思います。

沖原 はい、分かりました。次に、幹事を中心にして、今、業務が増えているということですけど、これは、新カリキュラムの導入に関わって増えてきているのか、それとも、恒常的に続くのか、さらにこの先増えていくのか。そこらあたりは、どうですか。

柏木 恒常的に、忙しいというところはございます。それに加えてということで、去年から今年に関して、やはり、こういう移行に関して、プラスアルファで増えているっていうような状況です。

沖原 幹事会に4名、全部センターから出すことになって、それも結局、負担増ですね。

柏木 そうですね。

石川 ただ、幹事会を、国際文化とセンターから2,2,出していたほうが良かったか、国コミから4出す、今の制度がいいかっていうことについては、やっぱり、プラスマイナスあるんだろうと思います。明らかなプラスというのは、国コミ側としては、コミットメントが高まったということと、責任を、より私たちセンターで担ってるんだという意識を持って、取り組みやすくなったというところがありますし、固まってますからね、教員が。もう、ほとんど、日常的に話せるようになってるところは、プラスです。

一方で、そのことによって、国際文化の先生がたからすると、ちょっと、コミットメントが、関わろうとするお気持ちはあるんだけど、下がってしまうというところが、実態としては、一部あるかなというふうなところもあります。

幹事会が、どうしてこんなに大変になったかっていうことを、過去にさかのぼって考えてみると、一つは、Autonomous English というのを導入したことが、決定的に大きかったと思います。それは、要するに、何を教材にするのか、どうやって評価するのか、どうやって試験するのか、どうやって1回目のインストラクションやるのかっていうのを、初めて部会がといますか、幹事会が全部決めるという、要するに、全員の授業のやり方まで、幹事会が原案を作ってコントロールするっていうことが、これまではなかったことなんですけど、これは、加藤先生を中心にやってくださったんですけど、これのお世話が、幹事会の仕事に乗っかってきたってところが、非常に大きかった。これは一つあるかなと思います。

沖原 あと一点、部会の出席率が必ずしも高くないとのことですが、24名中平均して何パーセントぐらい欠席があるのですか。ざっくりした印象で結構です。

石川 この間、選挙しましたけれども、選挙のときは半分弱は欠席。多いときは。

(3章関連)

沖原 ベストティーチャー賞の選考方法として学生の回答データに基づくということですが、どのようなデータでしょうか。

坂本 学生の振り返りアンケートの点数から選んでいます。

沖原 学生にはどういう質問で、どういう回答が何パーセントっていうような、そんなことですか。

坂本 ベストティーチャーに推薦しますか、しませんかっていう。

沖原 分かりました。非常勤講師が多いような印象を受けますが、そうですか。一番新しいデータだと、ほとんどが非常勤の人ですが。

石川 一つ理由があるとすると、これ、担当しているクラスの全平均値なんですね。ですから、例えば、1学期に1クラスだけ教えているという場合、そのクラスが非常にうまくいくと評価が上がるんですが、専任の場合は非常にたくさんのクラスを教えています。その中には、英語が好きな人もいれば嫌いな人もいます。なので全体の平均値になると専任のほうが低く出やすいのかもしれませんが。これ、また、37, 38 ページ辺りで、ちょっと出てくるかなと思います。

沖原 あと、シラバスについて1点。特に、ベーシック・コースの同一科目内のクラスは、恐らく、学生には選択の余地のない指定クラスだと思いますが、それについては、先ほど、授業テーマと到達目標は共通にしているが、あとの項目については、それほど厳しく縛りをかけていないと伺いました。上から目線でこうなさいというのは、なかなか難しいところがあるのはよく分かりますが、18年度の授業について、外部に公開されているシラバスを見る限りは、教員間で結構ばらつきがあります。例えば、Literacyの科目で、リーディングしかやってない、あるいは、ライティングを非常に強調しているなどの例が見受けられますが、そういうばらつきは許容範囲でしょうか。

木原 そこは非常に難しいところで、本当は課題を統一するのが、次の段階だとは思っているんですが、これがなかなか、何年も前から気は付いておりますし、話題には上るんですけども、やっぱり先生ご自身の教授スタイルが確立されてる先生もいらっしゃいますし、そうではない方にもお願いしやすいんですけども、そこがなかなか、難しい。お願いしても、できるかどうかっていうところもありますし、お願いしてもできないんだったら、やっぱり、その先生の強みの授業をやっていただくほうが、いいのではないかっていうところもあって、なかなか、統一を目指すのか、目指さないほうがいいのかってところが、毎年、私、個人的にも悩むところではあります。

沖原 ただ、学生が目線から見たときに、例えば、ある学生は、Literacyといいながら、ライティングばかりやったとか、リーディングばかりやらされたというようなことが、仮に起こるとすれば、まずいと思います。実際のシラバスでは、到達目標、授業のテーマも教員によって違いが見られます。

木原 再編集されてるところもあるかと思いますが、コマによって。

沖原 少なくとも、それらの項目は最終版シラバスにおいて共通にしておかないといけないと思います。実際の授業では、多少の偏りが出てくるのは仕方ないとしても、同一科目内ですから、やっ

ぱりそろえないと、不公平になるし、カリキュラムの精神や趣旨が生きてなくなるような気がします。

石川 シラバスレベルでは、共通シラバスっていうことで、部会が設定できることになっています。一番上の部分は、一応、入れた形がデフォルトでみんなに配られて。ただ、それを編集することもできるっていうことにはなっているんで、なかなか難しい。一応、そういう最低限の、統一は取ろうとしています。

沖原 はい、分かりました。

(6章関連)

沖原 最後の点[※現在の学生振り返りシステムで、学生が入力した内容を教員が見られるようになる時期が遅く、たとえば1Qでの学生コメントを2Q冒頭から反映することができなくなっているという問題]ですが、それは物理的に、スケジュール的に可能ですか。

石川 これは、事務方との話になるんですが、私なんかの個人的な印象ですと、基本的にオンラインに入れてるわけで、入れた瞬間に見られるわけなので、それを見られるようにするまでに時間がたってるということは、改善の余地があるんじゃないかなというふうに考えています。

齋藤先生、これ、技術的に、それほど大きな問題があるわけではないですよ。ある期日までに、学生が回答をします。その最終日、その瞬間に、いわゆる、パーミッションオンにして、誰でも、関係者、見られるようにすれば、特にその段階で加工してるというふうなことはない、私は理解していますが、いかがでしょうか。

齋藤 それは技術的な問題だと思うので、可能のような気がしますけれども、それ以外のファクターで、何らかのストップがかかっている可能性はあると思います。

石川 私、個人的にやっていて、一番強く感じるのは、いわゆるクォーター制になって、Q1の終わり、要するに、入学してきて8週間授業を受けて、そこで、彼らなりに書くんですよ、一生懸命。書くんだけ、その書いたことが、残り8週間に即反映されるようにするためには、ここの時間を短くしていかないといけない。そうすると学生は、なんか言った、先生変えてくれたっていうのが見える。このことは、今後、大事かなと考えて、これは、また、全学とも連携をして、部会としても考えていきたい。

(全体講評)

沖原 まず、優れている、よくやってるなと思ったところを、7点ぐらい挙げております。アドバンスト・コースが非常によく整備されているということ。それから、教員間での教育理念の共有化を非常に

意識しながら推進されているということ。つぎに、部会の運営責任がより明確になったということ、つまり4名全部センターから出るというのは、良い方向だと思います。それから、成績評価の客観性確保の手だて。これも非常に行き届いた仕組みができてると思います。さらに、ランゲージ・ハブ室について。これがいつまで続くかなと思っていましたが、運営体制も向上しているし、よく活用されていると思います。さらに、ベストティーチャー賞について、先ほど言いましたように、教員の創意工夫というのは、常に必要なことですので、それを促進するという意向が実現された例として、良い試みです。あと、教育の質の向上のための授業振り返りは、私がいた頃にはなかった改善点として非常に高く評価できる点です。学生の声に教員が耳を傾けて、授業改善に役立てていくためのこの取り組みは継続していただきたい。

沖原 課題および改善を要する点を3つあげています。1「科目の理念や目標の共有化」と2「シラバス記載内容」は幾分関連しています。1については、まだ教員間でばらつきが認められる状態であるということ。先ほど、言いましたように、例えば、English Literacy 内の授業間でのばらつきの問題など、もう少し統一されてもいいのではないかと。

2番目はシラバスの記載内容。例えば、同一科目内の授業テーマや授業の到達目標は、もう統一されているということでしたが、それ以外の項目についても、統一したり、記入指示を細かくしたりするなどの工夫が必要です。例えば、同一科目内では「成績評価方法」「成績評価基準」は同一にすべきではないのか。また、「授業の概要と計画」には、全ての科目について、毎回の指導内容・計画を記入させることを義務付ける必要がある。

ベストティーチャー賞については、逆の見方もあります。ベストティーチャーを出さないようなシステムが優れていると。つまり、誰が教えても変わらない、みんながベストティーチャーだというようなカリキュラムをこそ目指すべきではないか。このような考え方も併せて検討していただければと思います。

3番目の組織構成について。専任教員の2層構造、これは以前からあって、神戸大がいわば、ずっと積み残してる問題だと思います。だからこれを解消する検討はやるべきではないでしょうか。ポストを移動することによって、お互いに幸せになるのではないかと私は思います。

齋藤 先生、それ、ぜひ、入れてください。

沖原 国文のほうは、共通英語の荷物を背負い込む込むことはもうなくなるわけでしょう。センターのほうは、全員で心をつなげて共通教育に取り掛かれるわけだから、教員にとって、それ以上に学生にとって、幸せだと思います。

全体的な印象として、共通英語はうまくいっていると感じました。学生の反応の中に、それは見て取れます。これだけいいものが用意されているよと、教員や大学は言えると思います。あとは、学生がいかに努力するかです。

柏木 以前、90年代でしたか、英語の授業では、人文社会自然というような形で、分野を分けてというような、そういう取り組みもなされていたとのことでした。もし、沖原先生にご助言いただければと思うんですけど、コンテンツの部分で、特に、人文系はいいんですけども、理系とか、経済とか、社会とか、そういった部分で、どの程度まで、われわれは関与していったらいいのかなってところ、もし伺えましたら、ざっくばらんにお聞かせいただければと思いますが。

沖原 英語教育の内容に何を持ってくるか、何ができるのかは大学レベルでもっとも切実な問題になります。常識的には、各分野の専門用語レベルは扱わず、その手前の語彙や語法・文法に限りなく近づくとということになると思います。一つの切り口として、「アカデミック」をどう捉えるかということ。近年、生活言語と学習言語/学術言語という区別がかなり具体化されています。実は、英語の学術語彙はそう多くないんです。確か、700か800語ぐらいです。それは、大学レベルで分野横断的に使われる共通の語彙になっています。そのような語彙の運用力をもっと高めることが考えられてよい。例えば、「analyze＝分析する」とはどういうことなのか。日常語としては、ほとんど使わない語彙ですが、学術の場では多用される。だから、そういう言語材料にもっと習熟させることが、一つの行き方かと思います。このような言語材料だと英語教師が扱えます。この「学術言語」についての正確な情報(日本語と英語双方について)は英語教育の場でしか教えられないかもしれませんが、専門教育に対する英語授業の役割は大きなものになるでしょう。このことは、最近の CLIL(Content and Language Integrated Learning)の研究や実践から気づかされました。英語教育に興味をお持ちの専門分野の先生方とも連携すれば、「学術英語」の中身がもっと具体的になってくると思います。

## 7.2 伊庭委員ご質問・ご講評

(序章・1章関連)

伊庭 [セメスター内の2つの授業について]同じ先生が、A1, A2 を持たれるんですか。

石川 そうですね。16週は1人の教員が一つの科目を持つ。ただし、真ん中で中間テストもやりまして、成績も、1回、出しちゃうと。で、0.5単位ずつ出していくと。これによって、前半だけ通って、後ろ、落ちるとか、より多いのは、前半はちょっとさぼって落ちるんだけど、後半頑張って、後半だけ通るとか、0.5単位だけ取るような人も出てまいります。その場合は、翌学期以降、翌年度以降に落ちた分だけ取るというふうな制度設計になっています。

伊庭 ということは、次年度からのカリキュラムですけども、学生が望めば、1年生で必須科目が終わるとしても、どんどん上に行って、4年生まで取れるように設計しているってことでしょうか。

石川 そうですね。ただ、もちろん、制度上、そうなるんですけども、本学は、学部によりますが、キャンパスを出ていく人がいますので、そこは一つの課題でありまして、われわれが、例えば、鶴甲

で、いろんな授業を用意するから、2年、3年、4年、来てねというふうに言いますが、ここにいる国際文化の学生たちがきてくれることはあり得るんですけども、そうじゃない学部にとっては、ちょっと来づらいという、物理的な支障はあります。ここについては、古くから、学部のほうから、学部に出張ってきて、教えてくれないかだとかいうようなニーズもあるのでありますが、うちは学部分属制ではありませんので、そのところ、もし、それを認めた場合は、全体のコマの回し方が非常に難しくなります。今のところは、基本はここに来ていただいて、受けていただくというところですよ。

伊庭 2019年のカリキュラム改革に至ったいきさつについてうんですかね。なぜ、この度、大きく変革しようとしたのかっていうのを、ちょっと、お聞かせいただいたら。

石川 いろいろな改革が、ずっと定期的に行われているんですが、その中で、英語についても、いくつかの問題が指摘されるようになってきました。一つは、単位数。神戸大学は、六甲台に、法・経済・経営、三つの学部があるんですが、経済と経営は6単位、法学部は4単位だったんです、今まで。なぜなのかと言われると、それは長い、歴史的な話の経緯があるのですが、現時点で見ると、なかなか整合的な説明がつかないと。これが一つ目。

二つ目は、非常勤依存率とコストの問題。これが増大をしていく、あるいは、非常に高い水準で高止まりをしていく中で、大学としては維持が難しくなってきたという部分。

三つ目は、後で出てきますように、英語教員、とくに、国際人間科学部に所属していらっしゃる先生の負担軽減を図る必要が、全学的に出てきたというふうな問題。こうしたさまざまな問題が出てきて、4単位化というふうなことになりました。

上層部から言われましたことは、数が減っても、中身を落とさない。いわゆる、水準を落とさないということが言われてきて、それを、われわれなりに議論をしました。例えば、これまで緩かった **English Communication** や **Literacy** に新たに「**Academic**」という枠を定めて、目指すべき方向をはっきりしようということであるとか、学部のほうからも英語の授業を出してもらって、それを全学で整理をして、4年間の英語系のカリキュラムの連関を学生に見えるようにしていこうというふうな改革が一度に起こったという状況です。

伊庭 なるほど。学部からアカデミックな英語の科目を出してもらおうっていうこと？ 学部についている英語の先生もいらっしゃるっていうことですか。

石川 基本はいないんですね。

伊庭 いないけれども、一応、例えば、経済を英語で教えるみたいな科目を作り出しましょうみたいなことですかね。

石川 学部によっては、例えば、外国人で経済学者だとか、そういう方もおられる。その方は、今ま



でも、英語で授業やってらっしゃったんですが、その授業を、そういう枠の中にも、読み替えていくということです。

伊庭 ということは、他学部の学生も受けられるってということですか。

石川 学部間関係によっては、それはあり得ると思います。特に、六甲台なんかは、かなり学部を超えて相互に単位を取れるようにしていますので。この目的のために新しい科目を出して下さるっていうことを、こちらは期待してるんですけども、これまでの科目を、読み替え方式でやるとか、ということも、もちろんあり得るわけです。ともかくは、学部で出してる英語的な授業と、われわれ一般教養で出してる英語の授業を、4年間通してみようということが、今回の改革の大きな柱の一つになっております。

伊庭 なるほど、ありがとうございます。

伊庭 昔、私が、こちらで、非常勤でお世話になったときは、オーラルのコミュニケーションのクラスも60名だったんですね。それで、大改革が行われて、40名になって、それでもまだちょっと多いんですよ。コミュニケーションが40っていうとね。だから、本当は、20名ぐらいが理想的なので、そこにいけたらいいなっていうのが、すごくあるんですけど、やっぱりそれは、大学全体の方針としては難しいという感じですかね。

石川 そうですね。少人数っていうようなことは、私たちも、ここにいる教員全員、常に、上には言っているんですけども、結局のところ、40人クラスを20人クラスにして、開講コマ数が2倍になったときにどうするのかということになります。そのときに、専任が2倍持つのか、あるいは、非常勤を2倍増やすのかというふうに考えると、かなり厳しい状況にはなっていると思っています。

伊庭 非常勤の先生の、非常勤率が上がってしまうという矛盾もありますし、少人数教育をしようと思ったら、それなりに投資が必要で、そうすると、専任は、もう、今、多分、アップアップで、そうすると、非常勤の先生を雇うことになり、そうすると、また、予算、場所ですとか、いろんなことが難しくなってくるんですが、そこでも、その中で、何とか少人数教育を目指すっていうのは、とても大事なことだと思うんですね。ですから、TAやSAを付けるというのも、一つの手ですけども、やはり、できたら、何とか工夫ができないかなっていうのがあると思います。

石川 同感でございます。神戸大学では、アクティブ・ラーニングということ、非常に言っていて、アクティブ・ラーニングの前提は少人数であるということです。上のほうの学年で開きます外国語セミナーなんていうのは、昔やってたアドバンスをちょっと上級化したようなものなんですが、希望制というか、選択制なので、受講生も少なく、ちょっと近いものはできてるんですが、やっぱり、

マスに対する教育のところでは少人数を入れないと。

伊庭 そうなんです。1年生の一番最初は、一番大事だと思いますので、そこでアカデミックなスキルをたたき込むとか、そういうとき、やっぱり、40だと、ちょっと先生がしんどいかなみたいなのがありますので、20で、ゼミ方式みたいな感じでやればよいなと思います。

(2章関連)

伊庭 教授会組織と、かなり違うとは思いますが、例えば、私が属している甲南大学の国際言語文化センターも教授会があるんですけども、教授会、もうほぼ、絶対に出席しなきゃいけないみたいな、そういった圧があるんですけど、そういうのは部会にはないということですかね。それだけお休みされる方が多いという。

石川 もちろん、国際文化の先生にとっての国際文化学研究所教授会、センター教員にとってのセンター運営委員会に関して言えば、事務も立ち合うなど、公式性が高く、ともに相当強い出席のプレッシャーがあるんですが、部会というのは、それらとは性質が異なりますので。

あともう一つは、決してさぼっておられるというふうには、私、見てなくて、本当に、仕事が多いので、特に昼休みに設定するしか、もうないので、昼休みだと、先生がたによっては、三つぐらい会議がかぶっていて、一番、自分が欠けると困るものに、当然、出られますので、そうすると、英語部会が後回しになることが多いということかなと。

伊庭 特命教員っていうのは、どういうお仕事なんですかね。

柏木 これに対しては、いわゆる特定のプロジェクトということで、今回の特別編成クラスの、ACEのクラスができる、そこに関連して付けていただいたという形になってます。

石川 もともとはこれ、プロジェクトの支援要員としてでしたかね。

柏木 はい。グローバル人材育成事業が大学のほうで採択になった際に、GECコース、グローバルイングリッシュコースというのができまして、そこで、特別クラスができた。その際に、特命を、その資金で採用したっていうところがスタートになっております。

伊庭 ということは、そのプロジェクトが終わると、もしかしたらなくなってしまう。

柏木 プロジェクト資金自体は、もうなくなるわけですが、一方で、文科省のほうから、(プロジェクト資金が)終了してからも、何年かプロジェクトは続けるようにという、そういう縛りもあります。

伊庭 なるほど、大変ですね。ものすごく先生がた、お忙しくて、専任の先生がですね。大変なことは、本当に、お察しできるんですけども、24名いらっしゃるというのは、われわれからすると、ものすごくうらやまして、甲南の場合、6名しか、英語教員はおりませんで、特任は、今度から1人増やしてもらって6名ですから。ほぼ、入試なんかには作問は、もう本当に、専任教員だけですから、ほぼ、アップアップの感じで。ですから24名いらっしゃるの、ちょっとうらやましいなという気もあります。まだまだ、実際、働いてらっしゃる先生がたは大変かなとは思いますが、かなり恵まれている感があります。

石川 大学の規模という問題があるでしょうね。また、教員構成に関しては、特命教員が、英語の組織に入ったことは、ある意味、エポックメイキングだったと思います。すでにいた特任教員の場合、実は、授業ノルマの数って、一般の専任と原則同じなんです。つまり、全学的に、英語教員として、ノルマは、大体、このぐらいだろうという共通理解があったんですが、特命はこれに縛られておらず、最高で半期10コマぐらいまでやってもらうことができます。これまでなかったことなので、そういう人が入ってくると、例えば、英語の負担というふうな議論のときに、どういうふうなものが適正値であるのかだとか、あるいはもう、研究者としての側面を要求せずに、グッドティーチャーだけで人を雇うということが、いいのか悪いのかっていうようなことも含めて考えさせられるきっかけにはなったなど。

### (3章関係)

伊庭 [教育内容の統一と教員の裁量権について]うちの英語も同じで、やはり、個人の先生がたの自由な教え方を尊重するところもありますけど、同じ名前の科目であれば、同じような教育を、本来は行うという建前はあるでしょう。うちの第二外国語の場合、フランス語も、ドイツ語も、中国語も、韓国語も、全部統一教科書を使っています。初修外国語っていうのもあるんですけど、レベルも大体そろえるとか、70パーセントまでは従ってくれ。30パーセントは先生がたの自由ですみたいなね。結構、統制型のことをされてる。でも、英語は、ちょっと無理だよみたいな感じで、やってるのが現状なんですよ。

石川 その点について、例えば、ソフトに、全部の教員に同じことをさせようと思うと、かつて、神戸大がやっていたように、科目名でしぼるっていう手はあるんですね。例えば、リーディングという科目名なら、普通、リーディングをやるし、スピーキングという科目名なら、スピーキングやってもらえる。実は、われわれもかつて、そういうコース名、クラス名でやっていたときもあるんですけども、やはり、評価されている教員に授業公開なんかをやってもらって分かったことは、いい授業は全て、4技能統合型であると。これが、前回の改革で、LiteracyとCommunicationという、あえて技能を特化しないクラス名に変えた原因でもあったんですね。

伊庭 そうですね。今、本当にそのとおりで、4技能の統合型のCLILっていいですよ。全部、

CLIL に。

石川 おっしゃるとおりで、非常にいい授業をされている人は、4技能、全部を組み込んで、うまくやってくさるんだけど、そうでない方にとっては、昔みたいに、何の縛りもない。リーディングしか教えたくない人は、リーディングだけでもいいんじゃないかと。これは俺にとっての Literacy だというふうに言えてしまってるところが、課題なので、ここも本当に一長一短というか。ただ、逆に、オーラルと名前を付けて、ちょっと読ませただけでも怒る学生がね、実態としてあったんですよ。オーラルなのにか。それはやっぱり、英語の学び方としては、非常に不自然なので、読んで、聞いて、情報を入れて、書いて発信するっていう流れの中で、授業が組みやすいように、今、Literacy, Communication という名前にしているんですが、ご指摘のとおりで、その中で、この緩やかさを、ちょっと保ちつつ、ちょっとそろえていくっていうことが課題かなと。

(4・5章関連)

伊庭 よろしいですか。BYOD で、来年度からノートパソコン持参っていうことなんですけども、学生がノートパソコンを持ってくるっていうのは、もう、10年以上前から、いろんな大学で試みがありますよね。今、それがちょっと、行き詰まってるような感じで、どっちかっていうと、このBYODは、ほぼ、スマホで、これからいきましようみたいな感じになってるときに、なぜ、ノートパソコンなのかなっていうのは、ちょっと、思ったんですけれども。それはいかがでしょう。

加藤 私が言うよりも、多分、齋藤先生から補足いただくとよいかと思いますが、一言だけ、私の感じでは、スマホって、何もスキルが身に付かないような気がする。

伊庭 それは偏見かもしれない(笑)。

加藤 少なくとも、キーボードを使うという面で、会社とかで、本格的に仕事をするときに、どれだけスマホで打ったとしても、そうじゃなくて、エクセルであったり、パワポであったり、あるいは、もっと別のソフトであったりという、フォーマルな、どちらかというところ。

伊庭 キーボード入力、今のところ、できたほうがもちろん、いいですけども。

加藤 キーボードだけでもないかもしれないんですけど、そこがあるかと。

齋藤 この議論の中で、もうスマホでいいんじゃないかとか、タブレットでいいんじゃないかっていう議論もありました。ただ、もともと始まった九州大学とか広島大学の例を見ると、やはり、完全にネットをつないで、資料だったり、多分、語学の教育だと、スマホで十分だと思うんですけども、今、言われたように、それ以上の能力を課すような話でないと、結局、BEEF で資料見るとかっていう話だ

と、スマホで十分です。私、今、データサイエンスの科目を立ち上げてるんですけども、実際、資料上げましても、パソコンで見てる学生と、スマホで見てる学生、大体、同じぐらいの比で見てるので、そのレベルで使うのであれば、先生、言われるとおりに、スマホで十分だと思います。

ただ、今後、やはり、言われたように、エクセルとかワードも含めて、パソコン能力を付けていくってところまで、共通の中に入れていくってことを目標にしていかないと、PCの必携化は失敗するかなと思いますんで、私が今、立ち上げてる、数理・データサイエンス標準カリキュラムにもなりませぬけれども、その中で、順次、データをどう使うだとか、そういう授業を入れていこうと思ってます。

伊庭 ですから、英語教育だけでなく、コンピューターリテラシーの涵養っていうことで、導入されるってことですよ。

齋藤 でも、一方で、英語のカリキュラムについては、必携化で活用していただきたいと、一つの理由になってますので、そこはちょっと、英語の先生がたにはご考慮をお願いしたいと思います。よろしくをお願いします。

伊庭 ただ、今、シンギュラリティは近いみたいな、言われ方もしており、これからどういうデバイスが中心になってくるか、私たちも分からない状態ですよ。

齋藤 そうですね。10年前ぐらいのスパコンがここにあるおかげで、全く問題ないんですけども、実際、企業に行きますと、デバイスはエクセルになってたりとかありますので、先生、言われてるところはある。今後、企業でも、デジタルトランスフォーメーションっていうことで、スマホだけで業務ができるような世の中になるかもしれませんので、それはちょっと、対応しながらやりたいなと思ってます。

伊庭 本当に今、移行期ですから、特にそういう関連のことは、様子を見ながらですね。

齋藤 パソコン必携化っていうのは、ある意味で、枠組みの話なので、これから教育の中身をどうやって作っていかかっていうのが、問われてることだと思いますので、その辺はいろいろ知恵を絞って、進めていかないといけないところだと思います。

(全体講評)

伊庭 先ほどからも、申し上げているように、特にすぐれているなっていうところは、まず、一番最初に、やはり、来年度以降の、新入生のカリキュラムの策定に当たって、非常に、神戸大学全体の理念、憲章、ポリシーと、それと、外国語教育のカリキュラムと関連性、ちょっと整合性が取れているなということで、恐らく、先生がたが認識されて、目標も細かく書かれて、反映されているのではないかと思います。

そして、先ほど申し上げたように、非常勤依存率が上昇してるとおっしゃいますけども、かなり、専

任 24 名っていうのは、その先生がたが、それぞれが本当に力を発揮できれば、かなり恵まれた体制ではないかと、私には映りました。そして、非常勤の差異、これ、一番最初に報告書を拝読したときに、一番強く残ったのが、実は 3 番なんですけども、非常勤教員の採用、非常に公募制で、JREC-IN を使われて、採用プロセスが明示化されてて、いいなと思いました。これはすごく評価できることだと思います。

あとはやはり、ベストティーチャー賞ですね。これは、もちろんネガティブな面もあるんですけども、やはり、モデルとしていい先生を、皆さんで授業内容ですとか、方法などを共有するのはいいことだとは思いました。

そして、改善を要する点ということで、ちょっとおこがましいんですが、一つ目としましては、神戸大学の教育憲章、見させていただきますと、多様な価値観を尊重し、異文化に対する深い理解力を有し、コミュニケーション能力に優れた人間の育成をするということなんですけど、これ、非常に外国語教育に関連性の高い項目であると思われるんですけども、もう少し、それが科目やシラバス、もちろん、4 技能のことは、コミュニケーション能力とは書いてあるんですけども、もう少し、人間を育てるところですね。それをどういうふうに科目やシラバスに落とし込むかっていうのは、非常に大事なことじゃないかなっていうふうに思いますので、もし、できればと思いました。

そして、2 番ですが、神戸大学に入学した学生の英語力が、卒業時、または、高学年、例えば 3 年次の終わりとかに、どう変化したか。やっぱり客観的に外部に示す、例えば、今度から外部試験が導入されますけれども、神戸大、どうか、存じ上げないんですけども、外部試験を組織的に、まず受験させて、最後はどうだった。伸びたのか、または落ちたのかとか、それは今、もう本当に全国的に推奨されているトレンドではないかと思うので、そういうものを、お金かかるんですけど、何とか入れられないかなというのがあります。そして、もう少し、AP、CP、DP に基づいた書き方をされたほうが、今後の認証評価などにはいいんじゃないかなっていうふうに思いました。

あと、裏面の 3 番とか、4 番ですね。これはもう、ご回答いただいたので、大丈夫です。

全体的な講評といたしましては、先生がたが、少ない予算で、よく工夫して、神戸大学の外国語教育の運営に当たっておられることが、報告書からもにじみ出ていると。ただ、現行の運営体制では、非常に、部会長、幹事の先生がたの仕事量が多くなって、ちょっと大丈夫かなっていうのがありますので、組織の運営体制を改善できれば、したほうがよいのではないかと思います。

2 段落目なんですけど、外国語教育は人格教育につながりますと。人を育てるんだっていう意識を、やっぱり反映させたもので、そういった認識を持っていただかないといけないのかなと。グローバル化が進む中、複眼的な思考、異なる文化の人と共同する力を養うのも、外国語教育の使命の一つ。その外国語教育の質を高めるために、繰り返しますけど、40 名じゃなくて、20 名を目指す。なかなか難しいことではありますけども、予算化を大学執行部に要求し続ける等と、努力が必要であると。神戸大が、国立大学の中では、頑張っておられると思うんですよ。例えば、もっと、枠をはずまして、ものすごく外国語教育に特化していると言えるようにするには、やはりそこに、もう少し予算と人を付けられないといけないのではないかなというようなことは考えられます。

あと、神原先生もおっしゃってましたけども、学部とも共同して、どのような人物を世に送り出した

いか。そのために外国語教育では、どのようなカリキュラムを組むべきか、シラバスにはどう反映さすか等、教員間で、もっと議論して、共有していったら、4人の先生だけじゃなくて、もっとよく、議論の場をつくって、したほうがいいんじゃないかなってというのが、日々、私も思っていることですので、自戒の念を込めて、申し上げます。

そして、新カリキュラム、このままうまく機能すると、これだけ一生懸命やってるんですから、頑張っていたきたいなど、うまく機能すると確信しております。ただ頑張り過ぎないで、頑張らないでも困るけども、頑張り過ぎないように、疲れないように、うまくバランスを取って、臨んでいただきたいと思えます。

あと、アカデミックって学術的になってこと、記述が結構あったんですけども、英語で考えても、アカデミックっていうのは、必ずしも学術的というよりも、「大学でやっている」ということで、どちらかっていうと、学術方面に進む卒業生は一部ですよ、大学院から研究者になっていくような。ですから、どちらかという、アカデミックって言った場合に、アカデミックスキル。大学で、例えば、批判的な考えを身に付けるですとか、論理的に物事を考えるとか、そういったことで、アカデミックっていうのを使う、もちろん、学術的な意味もあるけれども、その部分を強調されるのもいいんじゃないかなっていうふうに思いました。

伊庭 [専門的内容と英語教員の関係について] ちょうど、理工学部の学部長と、昨日、その話をしたところで、やはり、向こうからの要請で、理系の学生っていうのは、本当にもう、プレゼンも、それから論文も、英語で書かなければいけない中で、がちがちのカリキュラムで、どうやって伸ばせばいいかというところで、理系のための英語っていうのは、3年前から始めてるんですけども、先生がたからの要請は、取りあえず、1年生に対しては、英語で書かれている、高校生、中学生、海外のテキストを使って、本当に理系の最低限のことを教えてほしいんだと。

というのも、例えば、韓国とかでは、マーケットが小さいので、直接、英語で書かれたテキストを使ってる。シンガポールなんかもそうですし。ですから、もうすごく差が付くらしいんですね。だから、そういうのを、もっと、1年生レベルでやってほしいっていうのがありますので、分かりましたってことで、来年度からそういうの、取り入れてやっていこうかとは思っているんですけども。

ネーティブの先生なんかで、特任の先生で、今回も、ちょっと意識しまして、理系のバックグラウンドを持っている、アプライドサイエンスですね。バイオケミストリーやってこられた方で、大学院で英語教育のほうに来られた方ですとか、そういう方のアドバイスをいただきながらやっていくっていうのも、一つの手かなというふうに思っています。

## 第 8 章 外部評価報告書

外部評価委員会での質疑応答もふまえ、2名の委員より、以下の報告書の提出を受けた。

### 外部評価委員報告書

平成 31 年 1 月 31 日

国立大学法人神戸大学

国際教養教育院外国語第 I 教育部会 御中

評価者 神戸大学名誉教授 沖原 勝昭

外部評価委員として国立大学法人神戸大学国際教養教育院外国語第 I 教育部会が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

#### 意見

##### ○特に優れている点

##### 1. 選択制の「アドバンストコース」(p.6)の整備・充実

上級レベルの学生のための科目 (Advanced English Online, 外国語セミナーなど) がよく整備されており、共通英語の天井が除去されている。

##### 2. 教員間での教育理念共有化の努力

オリエンテーションへの出席率が 80%以上で (p.13), しかも非常勤教員も参加できるよう予算措置までしているこの努力は継続してほしい。

##### 3. 部会の運営責任の明確化

部会長と幹事は全て国際コミュニケーションセンター教員が務めることになり (p.18), 英語教育への責任母体が明確にされた。今後は、その結果予想される負担を適切なものにするための方途を探っていただきたい。

##### 4. 成績評価の客観性確保の手立て (p.27)

評価基準についてのルールを厳密に遵守していること。例えば、逸脱例をチェックしたり、説明したりする透明性を担保するきめ細かい仕組みが設けられている点。

##### 5. ランゲージハブ室の活用 (p.34)

センター発足時にスタートしたこの施設がその後も多くの学生に活用されていることは心強い。あ



まり目立たないが、学生の自律的な学修を支援するための関係者の努力は評価に値する。

#### 6.「ベストティーチャー賞」(p.38)

教員の創意工夫を促すとの意図の現れとしてよい試みである。

#### 7. 教育の質向上のための授業振り返り(p.42)

幹事会で内容のチェックや面談を実施するなど、授業の質向上のための努力が行き届いている。

#### ○課題および改善を要する点

1. 科目の理念や目標について、教員間で捉え方に差異があるとのこと。(p.13) 教員の個人的裁量をどの程度認めるか、の検討が必要ではないか。

(例)English Literacy: 「読むこと」に偏ったり、「書くこと」に特化したり、と実際のシラバスは統一されていない。どのレベル(授業のテーマ、授業の目標、授業の概要、成績評価など)で教師個々の裁量(創意工夫 p.14)を認めるのか、についての原則を決める必要がある。学生にとって、受講科目間の有機的な関連が担保されていないと系統的なカリキュラムとは言えない。同一科目内のシラバスを統一することから始めるべきである。

#### 2. シラバスの記載内容 (p.24)

2018年度のシラバスを見る限り、授業内容の具体性が教員によってまちまちである。すなわち、どのような授業を受けることになるのかについて、具体的にイメージできるものと、何を学ぶことになるのかほとんどわからないものが混在している。この点は、部会で構想・決定したカリキュラムを実効ならしめるためにも是非とも是正すべきである。例えば、ベーシックコースの指定クラス授業群(例、English Communication A1 など)については、「授業のテーマ」「授業の到達目標」「成績評価方法」「成績評価基準」は同一にすべきではないのか。また、「授業の概要と計画」には、毎回の指導内容・計画を記入させることを義務付ける必要がある。例えば、2回目 Project 1; 3回目 Project 2...と言った安易なラベルの繰り返しでなく、具体的な授業の中身がわかるような毎回異なる語句の記載を求めるべきである。できる限り詳細な記述を心掛ければ、受講生だけでなく担当教員にとっても有益なものになる。

#### 3. 「ベストティーチャー賞」(p.38)について

評価できる試みであり、持続してほしい制度だと考えるが、他方、逆の見方も成り立つ。つまり、教員個人の創意工夫が強調されればされるほど、それだけカリキュラムの成否を教師個人に負わせる度合いが大きくなる。そうなると、教員により「当たり外れ」のあるカリキュラムということになり、学生にとっては公平性が損なわれていることになるし、システムとしてのカリキュラムの実効性も低下することにもなる。

今後は、「ベストティーチャー賞」を存続させながら、「ベストシステム」確立のために、授業科目の

標準化, 等質化を目指して, 到達目標と授業方法の共有化を一層推進してほしい。

#### 4. 組織構成について:専任教員内の二層構造(p.16)の解消

専任教員は以下の2つのカテゴリーから構成されている。

A: 国際コミュニケーションセンター所属の教員:9名×9コマ担当

B: 国際人間科学研究科所属の教員:15名×6コマ担当

上記2グループの教員が協働して指導に当たる体制は「強み」(p.19)とされているが, この2層構造は組織上齟齬を生んでいるのではないかと。このことの弊害はこれまでも度々指摘されてきたし, 現任教員自身も痛感していることであろう。

後者 B:15名の定員を按分して, 部会の専任教員は全てセンター所属にできないか, 検討すべきである。その理由は明白である。神戸大学の外国語教育に対する「コミットメントの差」(p.18)をなくして, 共通英語プログラム実施の責任母体を実質的に明確にするためである。単純計算では, Bの担当コマ数90コマ分の定員として, 10ポストをセンターに配置換えすることである。

実現のための具体的な取り組み方はいろいろ考えられるであろう。この改革を大学全体の課題として時間をかけて取り組まれることを期待する。

#### ○全体的講評

全体的に見て, 授業改善の努力は実を結んでいる。授業改善希望調査(p.40)において, 70%近くの学生が「特になし」としていること, および, やはり70%超が現状は有益だと回答していることは, ある意味, FD努力は「閾値」に到達しているのではないかという印象を与える。つまり, 教える側の努力は効果を発揮していると考えてよいであろう。ほんの20年くらい前まで, 神戸大学の英語授業の悪評が学生を通して高校現場に伝わり, それが「語り草」になって大学教員に跳ね返っていたことを思い起こすと, 隔世の感がある。部会の先生方のご努力に敬意を表したい。

## 外部評価委員報告書

平成 31 年 1 月 31 日

国立大学法人神戸大学

大学教育推進機構 国際教養教育院 外国語第 I 教育部会 御中

評価者 甲南大学 国際言語文化センター  
教授・学長補佐 伊庭 緑

外部評価委員として国立大学法人神戸大学 大学教育推進機構 国際教養教育院 外国語第 I 教育部会 が実施した自己点検・評価書を審査し、当該組織の活動に関して次のとおり報告いたします。

### 意見

#### ○ 特に優れている点

1) 2019 年度以降の新入生用カリキュラムの策定にあたり、神戸大学全体の理念・憲章・ポリシーと大学における外国語教育のカリキュラムとの関連性、整合性がおそらく再認識され、各科目の目標にも反映されている。

2) 非常勤依存率が上昇していると報告されているが、専任教員 24 名、特任・特命教員 5 名の教育実施体制はかなり恵まれている。

3) 非常勤教員の採用が 2010 年以降、公募制になり採用プロセスも明示化され、質の高い教員を採用できる可能性が高くなった。

4) 学生のふりかえりアンケートを分析し、授業改善に役立て、ベストティーチャー賞の主な指標にしている。

5) ランゲージハブ室で、留学生と学生が交流して自然な英語習得の場になっている。しかし近年利用者が減っていることに関しては、役目を終了したと考えるのではなく、自律学習のハブとして位置づけ、留学から帰国した神戸大学の学生の活躍の場として活性化するなど工夫していただきたい。

#### ○ 特に改善を要する点

1) 神戸大学の教育憲章にある「多様な価値観を尊重し、異文化に対する深い理解力を有し、コミュニケーション能力に優れた人間の育成」は外国語教育に関連性の高い項目であると思われるが、もうすこし科目やシラバスに反映されるべきではないか。

2) 神戸大学に入学した学生の英語力が卒業時(または高学年時)にどう変化したか客観的に外部に示すことができる材料(例えば同じ外部試験を組織的に受験させて結果を比較する等)が、必要ではないか。AP/CP/DP に基づいた自己点検が求められる。p.25 の「本学においては入試が有効に機能しており、いわゆる基礎学力不足問題は顕在化していない」という表現は自己点検評価の視点からすると危険なので「入試が有効に機能しており」は省いた方が安全。

3) アルクの e ラーニング、ネットアカデミーを利用することで学生の *autonomy* が涵養されるというのには少々違和感を覚える。効果の検証が必要ではないか。

4) 資料を事前に拝読して BYOD でノートパソコン必携は少し古いのではという印象を持ったが、評価委員会でコンピュータ・リタラシーの獲得のための導入という説明をうかがって納得した。ただ依然として今後どのようなデバイスが社会で主流になっていくのかという点は予測が難しいので、時代にあわせて柔軟に対応していただきたい。

#### ○ 全体的講評

先生方が少ない予算で良く工夫して神戸大学の外国語教育の運営にあたっておられることが、報告書からも滲み出ています。ただ現行の運営体制では、部会長、幹事の先生方の仕事量が多くなりすぎる懸念が外の人間から見てもありますので、組織の運営体制を改善する必要があるのではないのでしょうか。

外国語教育は人格教育につながります。グローバル化が進む中、複眼的な思考ができ、自分の意見を明確に述べ、異なる文化の人と協働する力を養うのも外国語教育の使命のひとつです。その外国語教育の質を高めるためには 1 クラス 40 人ではなく、20 人を目指すべく、予算化を大学執行部に要求し続けるなどの努力も必要でしょう。

学部とも協働してどのような人物を世に送り出したいのか、そのために外国語教育ではどのようなカリキュラムを組むべきか、シラバスにはどう反映させるかなど教員間で議論し、共有していただけたらと自戒の念を込めて申し上げます。

評価委員会でも述べましたが、*academic* は学術的という意味以外にも「大学での・大学レベルの」という意味もありますから、学術にこだわらずに「大学生が身につけるべき」と解釈してもよいのではないのでしょうか。

新カリキュラムがうまく機能することを確信しております。ただ先生方や学生が頑張りすぎて疲弊しないように、その反対も困りますが、うまくバランスを取って臨んでいただきたいと思います。

## 第9章 退職予定教員座談会記録

### 神戸大学外国語第 I 教育部会平成 30 年度退職予定教員座談会

#### —神戸大学の英語教育を振り返って—

加藤 雅之 ・ 水口 志乃扶

本座談会は、長年、本学の英語教育に携わってこられた両先生による個人の視点での振り返りであり、示された見解は、外国語第 I 教育部会全体を代表するものではありませんので、参考資料として御覧ください。

#### 0. はじめに

##### 座談会の趣旨

長らく神戸大学の英語教育で主導的な立場を取られた 2 名の教授が退職されることになり、両名にご参集をいただき、1980 年代以降の神戸大の英語教育の変遷や今後への提言などを伺うこととした。当日は聞き手である石川がレジュメを用意し、レジュメに従って質問を行った。なお、本座談会は外国語第 I 教育部会の外部評価の一環として位置付けられ、外部評価委員会開催に先立って実施された。

##### 座談会の概要

日時:2019 年 1 月 31 日(木)

場所:神戸大学鶴甲第1キャンパス(国際教養教育院)D601 会議室

出席者[50 音順]:加藤雅之教授(大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター)

水口志乃扶教授(国際文化学研究科)

聞き手:石川慎一郎教授(大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター)

オブザーバー:柏木治美教授(同上。外国語第 I 教育部会長)・木原恵美子准教授(同上・同幹事)

##### 神戸大の英語教育の変遷

神戸大の英語教育のカリキュラム変遷については、およそ以下のようであった。

表 1 神戸大学の英語教育の組織および科目の変遷

年度	組織	主な提供科目
1970s～	教養部英語科	精読・多読・聴解・作文

1980s～	同上	リーディング・ヒアリング・ライティング
1983～	同上	英語1～4(4は選択)
1992～	大学教育センター 外国語第 I 教科集団	人文・社会・自然
2002～	同上	Reading/ Listening(他, 選択で Speaking と Productive)
2006～	大学教育推進機構 外国語第I教育部会	Reading/ Oral(他, 選択で Advanced)
2015～	大学教育推進機構国 際教養教育院外国語 第 I 教育部会	Communication / Literacy (一部学部では他に Productive/ Autonomous。また, 選択で, Advanced。上 級用 ACE クラスもあり)
2019～	同上	Academic English Communication/ Literacy + Advanced 他(全学部必修 4 単位化)

水口(2018), p. 272 に掲載された図を基に石川加筆

#### 座談会の記録

当日の座談会の発話は録音し、業者に書き起こしを依頼した。その後、両先生に内容の確認を依頼した後、聞き手の責任で、若干の編集(用語の解説、匿名化、文言の補い)を行った。また、座談会では、用意したレジュメに沿い、およそ時系列順で話を進めたが、途中で時間軸をさかのぼっての回顧も多かった。そこで、以下は、できるだけ時系列にあうよう、当日の発話の順序を若干入れ替えて記載している(文責:石川)。

## 1. 1970年代～（精読・多読・聴解・作文等）

### 1970年代の英語

石川 1970年代の英語教育というのは、先生方の赴任前かと思うのですが、どんな感じだったんでしょうか？

水口 ライティングとか。ライティングの授業。実は、私が赴任する前にあったと先生方がおっしゃっていらっしゃいました。

加藤 ありました。かなり前ですけど。

水口 かなり前にあった。

石川 どんな人が教えておられたんですか。

水口 知らないです。

加藤 普通の人じゃない？

石川 普通の人？

加藤 普通の、専門家とかいうんじゃないしに。だって授業科目としてあったんです。

水口 らしいです。

石川 ただ、どうなんでしょう。当時の状況として可能ですかね？

加藤 多分、純粋な和文英訳だと思います。

水口 短いパラグラフ・ライティングとかじゃなくて。

加藤 そういうのじゃない。自由英作文とかじゃなしに、本当に入試に出るような和文英訳を恐らくやってたんじゃないかと思います。

石川 なるほど。

加藤 ライティングでしょう。(制度としては)よくできていましたね。

水口 でも私が赴任した頃はそれがなくて、それを教えておられた先生方は、添削が大変でやめたみたいな話を裏事情としては伺った記憶があります。

石川 じゃあ、その当時はこの「英語 1, 2, 3, 4」より前の時代には、今、ほとんど資料がないんですけども、その頃に実はライティングっていうのがあったということですね？

加藤 ありました。

石川 他にどんなクラスがありましたか？ それはリーディングとかだったんでしょうか。

加藤 パソコン持ってきていいですか。

石川 はい。じゃあまた後、そこ伺います。昔はそういうのがあったということですね。

加藤 ありました。

水口 あったらしいです。

加藤 先ほどの(1970年代～1980年代の設置)科目。今、資料出たんですけど。

加藤 1970年代いきます。

石川 1970年代。

加藤 精読コース, 多読コース。

石川 そんなだったんですね。

加藤 作文コース, 聴解コースっていうのがありました。

水口 1970年代。

石川 精文コース? 精読コース?

水口 精読。

加藤 25名。

水口 クラス, ちっちゃかったんですね。

石川 すごい。

加藤 でも多読コースは50名。作文コースは25名。聴解コースは100名。

水口 聴解。

加藤 多分, テープレコーダー持ってきて, 100人に声聞かせて, さあどうだ, というコースだと思います。でも, 今思えばなかなか先取りしてる。

石川 ほとんど4技能別ですよ。

加藤 4技能。

水口 そうだ。

加藤 作文あって, スピーキングはないんですけど。2年生は自由選択。それから1980年代はそれがライティングコースが。

石川 これ, 1970年代?

加藤 今, 1970年代です。

石川 はい。

#### 1980年代の英語

加藤 1980年代はライティングコース25名で, これ, (以前のものがまだ)残ってます。それでライティングコース50名。精読と多読の区別はなくなって, ヒアリングコース100名。

石川 そこは100名なんだ。

加藤 それが90年代になると今の(資料の)話で。

石川 「英語1~4」ですね。なるほど。

加藤 (その後)人文, 社会, 自然とこういうようなコースになるので。

水口 私, それで精読コースとか知らないです。

加藤 これ多分, 「英語の1, 2, 3, 4」と微妙に連動してたのか, 混ざってたのか。これだけではないような気がします。こういう科目があったという。

水口 私が来た時は, すでにそういうくくりで教えるっていうのはなかったです。

水口 だんだん思い出してきた。それでとにかく文学作品を読めないで, 昔まだ紙媒体だった雑誌の「タイム」とかを印刷して, それで読んだ覚えもある。

石川 「タイム」, ありましたね。はやってましたよね。

水口 そうです。「タイム」を読むみたい。

石川 ありました。



水口 大学生になったから「タイム」を読んでみようみたいなことを、若気の至りでやりました。

石川 なるほど。

水口 でも結構、学生ついてきました、昔の学生。今みたいにふんぞり返ってるんじゃないくて、来る人たちが少なかったっていうのもあるし。

石川 それはその2年生、3年生の選択という意味ですか。

水口 大学に来られる人、女子学生がすごく少なかったです、ここは。だから女子トイレもとても少なく。まず神戸大赴任して最初に英語集団の先生に教えていただいたことが、女子トイレはここですって。それくらい少なかったっていうことなんです。

石川 私が学生だったころを思い出しても、「英語 1, 2, 3, 4」、みんな精読。それ以外のことをやった記憶は全くないので。ときどき、詩の朗読のテープ聞かされたっていう記憶はありますけど、あれをリスニングというのでなければみんな精読でした。

水口 私、研究室にいまだに教養部っていうカセットテープレコーダーがあるので、博物館みたいだと。置いていこうか。

水口 そうですね。こういうのがありました。だからカセットテープだったかもしれない。CDとかじゃなくて、その後CDだと思うんだけど。

石川 私、森先生の遺品を引き継いで、今、研究室に置いているんですけど、昔、オープンリールもありましたよね、英会話のオープンリール。

水口 そこまでは私も知らない。

石川 そこまでは。

水口 私はカセットだった。

石川 なるほど、分かりました。

水口 じゃあ、今度持ってきます。石川研究室に。

石川 はい。ただ、本当にそれは考えてることで。旧制姫路高校の理科の実験器具なんかが・・・。

水口 何か(建物の)下に置いてますよね。

石川 あれ、結局手放すことにしたらしいんですけども、維持できないからどこか博物館に寄贈するって言ってますけど。ああいう感じのことの英語版ができたらいいと。今度、この教室、改装するときに昔のカセットとか展示するとか。

水口 こういうのがあったんだよって。

石川 昔、使ってた教科書とか、昔の試験問題とか。お持ちじゃないですか。残していつにいただけたら。

水口 試験問題は持ってないです。

加藤 持ってない。ちょっと面白いデータなんですけれど、今思うとわれわれが昔はこうだっただろうというような型にはまらなくて、例えばコミュニケーションという、English Sharing Practice という教科書を使ってる先生がいます。

石川 どなた？

加藤 名前は分かんないですけど、『諸君の最も遅れていると思われる、ヒアリングの能力を伸ばし

たいと思っています』。これ、1970年です。それから1975年、対極ですけど、『真夏の夜の夢』を使っています。『君たちのほうに想像力があれば、堅苦しい講読でも興味がわくことは請け合い』。

水口 それ、A先生だよ。

加藤 『見れば2時間で済むものを1年間に引き伸ばして、できるだけ面白く読むという嫌がらせをします。それに君が耐えられれば相当の芝居好きです』。

石川 A先生か。可能性は高い。

加藤 多分、選択を念頭に置いてると思うんだけど。

水口 そういうのを書いてたんですね。

加藤 はい、書いてました。

水口 それで、学生が選ぶと。

石川 なるほど。

加藤 精読、多読ではエリック・シーガルの『ラブストーリー』を1980年に『ある愛の詩』の原文を講読するという。『きびきびした現代アメリカ英語、口語英語のやり取りをテキストから学んでほしい』とか。

水口 映画をお好きな先生もおられたので。

加藤 当時、訳読べったりでもなくて、個々のレベルでは先ほどのコミュニケーション、1970年、ヒアリングが、コミュニケーションが遅れているっていうような認識の下でいろいろとやっておられたという人もいるということが分かりました。

水口 ただ、全体に広がらないんだよね。

石川 ですね。

水口 今もそうだけど、個人のレベルでは皆さん、楽しんだり、一生懸命、学生も。でもすごいです。『諸君』って書けるんですね。『君たち』とか。今、絶対書けないです、シラバスに。

石川 皆さま、とか。皆さんか。皆さまって言いそうなるけど。

加藤 1975年のこの先生は、「タイム」、「ニューズウィーク」の最新記事をプリントで読むということ。

石川 なるほど。

加藤 時事的なものも、もちろんやっておられると。

#### 女性教員

石川 先生が赴任されたときに、既にいらした、女性の教官の先生っていうのは？

水口 あと4人いらっしゃいましたけど。私、5人目だったんですけど、森本先生という方が英語集団におられて。

石川 まゆみ先生。

水口 あとは中国語とかロシア語とかドイツ語か。

石川 算先生とかもおられましたね。

水口 中国語の算先生ですね。ロシア語の小野先生とか。

石川 いらっしゃいましたね。

水口 ドイツ語の光末先生。

石川 おられた。

水口 そういう方々と、なぜか魔女の会とかっていうのをつくって読書会やってました。

石川 なるほど。

加藤 小野先生っておられましたね、ロシア語の。

石川 小野 理子先生かな。

水口 そうなんです。

## 2. 1983年～(英語1～英語4)

石川 神戸大学の英語のことを振り返る場合に、大綱化でどうなったのか、その前と後で何が変わったのか、どうやって今みたいになったのかっていうのが、われわれとしては一番気になるところなんです。

石川 この水口先生の論文の資料にある『1983年から1992年の英語1から4の選択制』って、これどういうふうな感じでやっておられたのか。その辺、伺ってよろしいでしょうか。

### 選択クラス

水口 さっきもちょっと言ったんですけど、「選択制」っていうのはちょっと語弊があって、単位は今、石川さんがおっしゃってくださったようにきっちり義務的に何単位取りなさいって決まってるんですけども、クラスが、今だったら1回生だったら学番順に、あなたは何クラスに入るからどのコマを取りなさいってなってたんですけども、(当時はそれが選べたんです。)確かこれ(が適用されるのは)2年生でしたか、加藤さん。

加藤 1年生は(割り当てクラスが)決まっていたと思います。

水口 2年生が義務的に決められたクラスではなくて、自分の希望を(出せたんです)、第何希望までかちょっと忘れちゃったんですけども。

加藤 結構書かせました。

水口 それをパンチカードに書いてもらって、英語集団のほうで希望と人数を突き合わせていって、それで1週間後に発表するという・・・結構、手間暇の掛かる(制度でした)。本当、1週目から始められなかったです。

石川 じゃあ、学生は好きな授業に1週目は出るんだけど、2週目もそこにいることができるかどうかは分からない。

水口 1週目は、だからショッピングです。

石川 なるほど。

水口 2週目に実際決まって、ただ、学生の希望っていうのは本音を言えば、単位の取りやすい先生のところに行きたいわけで。

石川 ですよ。

水口 そういところはやはり人気がとてもあったように思います。そういう先生のところ。ですから当然、選に漏れる人もいて、そういう人たちは第何希望まで回されたり、そういう調整があったりとか。学生ですからいろんな事情で来られないとか、失念していたとかいろいろあって処理が結構、みんな教員がやってたので、特に新人。

石川 ちょうど水口先生、赴任された頃ですよ。

水口 はい。私はなぜか2回もやってしまって、本当にばかだと自分でも思いましたけれども、結構な手間暇でした。当時は本当に文学の先生もすごくたくさんおられたし、皆さんは内容も点でバラバラで、その四つのスキルがどうたらこうたらということを口にもできないような、そんな雰囲気、・・・何か戯曲を読むとか、イギリス小説を読むとか、そういう先生が本当に多く

て。語学が多分、私ともう一人、二人くらいしかおられなかったくらいで、あとみんな文学の先生で。

石川 当時、そのもう一人、英語学の先生って、ちなみにどなた。

水口 吉田先生とか。吉田 一彦先生ってご存じですか、英語教育の。

石川 もちろん。

水口 ラジオで大変にご高名な先生で。あと、どなたがおられました？

加藤 西光先生とかはこちらに？ 文学部かな。

水口 西光さんもいた。

加藤 もう文学部、移ってたか。

水口 文学部、移る前に西光先生いらして。あと、田中先生がちょっと語学のことをしゃべられた。でもほとんどいつもストップードでした。

石川 質問なんですけれども、選択制っていうのが、今、神戸大学では(上級クラスを除けば)全くと言っていいくらいないんですけども、これがどうやって成立し得ていたのかと。普通に考えれば、人気のクラスにはば一と人が固まって、いっぽう、この先生は希望者ゼロってなりそうです。でも、調整をすると、学生の不満が高まるでしょうし、この辺はどうやって回ってたんですか。

加藤 第2, 第3 希望で救ってたってということかな。それか第1 希望で結構、大人数クラスもつくったようにも思います。

石川 大人数、例えば覚えておられる中で。

加藤 大人数というか、40とかじゃなしに50ぐらいまでいこうかとか。

水口 ここにも私書きましたけど、これ平均数なんですけど、当時54名ですか。今よりかすごく多いわけで、私の成績の取ってあったのを見ると最高70人いました。

石川 70名。2コマのノルマ換算じゃないんですね。

水口 それで1コマ。

石川 なるほど。

水口 そうだったから、きっと学生が、大学の授業なんてこんなもんだみたいなの。

石川 ですね。

水口 当時は思ってたんだと思います。

#### クラスの内容

石川 「英語の1~4」っていうのは、それぞれ、特に何を、っていうのはなかったですか。

水口 なかったです。

石川 全くフリーハンドで、何の制約もなくて。

水口 なんとなく4種。教師が勝手に決めていたっていう、すごく。何の方針もない。

石川 私、自分の成績表(※1988年~1989年度に教養部で英語を履修)を見て今、思い出したんだけども。

水口 成績表も取ってあるんですね。

石川 私、(2単位=2クラス取らないといけない)「英語 1」を1つ落としたんです、1 単位分。で、今、昔の成績表を見ると、「英語 1」は結局 1 単位しか取れていなくて、その分、「英語 3」を余分にとって、それで OK になってるんです。ということは積み上げ制ではなくて総枠に総単位数でいくっていう計算だったんじゃないか…。

水口 一応、数字的には 1, 2, 3, 4 で積み上がってるように見えるんだけど、内容は誰がチェックするということもなく。

石川 ですよ。ただ、4 種類の授業で単位を取っていけばいいという。

水口 総単位数で何単位取ればいいっていうから、多分、1 を落とされても 3 で振り替えたとか。

石川 ですよ。

水口 非常になんかいい加減にだったんだと思います。

石川 私が落とした授業っていうのは A 先生。

水口 長いこと非常勤しておられた。

石川 入学してすぐ、いきなり、A 先生が詩をやられたので、その当時、詩をやる気が全然なくて、落としてしまったんですけども。ということはそのときは科目目標みたいなものも恐らくなかったんでしょうね。

水口 ないです。

加藤 ないです。

水口 きっと何か書いてはあったんだろうと思いますけれども。

石川 それぞれの先生が好きなことを目標として掲げてやっておられたっていう。

水口 当時は本当、文学の先生が多かったので詩をやらせる先生とか、小説、戯曲。

教材・授業の進め方

加藤 教科書も小説や戯曲といった類い。いわゆる総合教材はあったのかもしれないけど。

水口 なかった。あんまり。

加藤 基本的に。

石川 研究社の小英文叢書みたいな。

加藤 まさに。

水口 そうそう。

石川 白と黄緑の。

加藤 (自分では)使わなかったけどあれ、使ってる人もいました。

石川 ちなみにその当時に両先生が使っておられた教科書はどんな感じなんですか。あるいは授業の内容とかは。全く自由であった時代に。

水口 全く自由でした。私は語学に関係した、さすがに研究社叢書は使いませんでしたけれども、言語学っぽいものをつくって、ロビン・レイコフをちょっと簡単にしたようなものとか、あるいは心理学を使ったときもありました。

石川 なるほど。

水口 そうすると学生が内容的に興味を持ってくれたっていう。その当時、ほとんどがリスニングとかいう概念がまずなかったのでリーディングと、あとすごく無理をしてライティングのクラスをやったことがあります。

石川 やらなくてもいいのに。義務でもないのにも関わらず。

水口 やらなくてもいいのにやって。あるいは欧米圏で出ている速読を訓練する教科書とか、「リーディング・ファースト」とか、リスニングもやらなくてもいいのにやっていて、それも「ビトイン・ザ・ラインズ」っていった文脈を読むみたいなの、そんなのを使って。まだ研究室にあるかもしれませんが、そういう本当、総合教材っていうものがまだ発達していなかったもので、直接に欧米から取ったりとか。ちょっと高いんですけど、でも当時の学生、文句も言わずに買ってくれました。

石川 なるほど。今でいうと3000円ぐらいの値段だったんですか。

水口 そうです。もちろん、マニュアルも出回ってないし。

石川 インターネットで訳も見つけられないし、インターネットもないし。

水口 ない。

石川 なるほど。

水口 せいぜい何か裏講義情報みたいな、そんなもんしかなかった。

石川 裏講ってありましたよね、確かに。

水口 散々なこと書かれたっていう。

石川 加藤先生は？

加藤 私は英文学関係を最初は使いました。例えば、コンラッドの『闇の奥』とか、チャールズ・ラムの『エリア随想』とか、H・G・ウェルズもあったかもしれませんが、そういうのから始まって、これはだめだと。

石川 だめだ。クルツは分からん、と。

加藤 私自身もこれを英語の授業でどうこうって、なかなか難しいところもあって。

石川 ちょっとそこを伺いたいんですけど、例えば『闇の奥』って比較的薄いんですけど、それでも半期では読み切れないですよ。

加藤 すごくあります。

石川 「エリア」も薄めかな？

加藤 はい。

石川 例えばクルツとかの話なんだけど、『闇の奥』って最後まで行かないで終わるんじゃないかと思うんだけど。

加藤 終わります。

石川 どういうふうにその授業は・・・？

加藤 最初は律義に訳していたので、1回で半ページとか。

石川 ですよ。

加藤 いわゆる昔ながらの授業が進行してました。

石川 そうすると何か、『闇の奥』の旅が始まる前ぐらいで学期が終わる・・・

加藤 そうです。ベルギー行ってなんやかんやで・・・というような感じで。

石川 なるほど。その時代の授業の進め方っていうのは、「来週当たる人は〇〇君ですよ」って言うておいて、その人が予習してきておいて順番に「はい、〇〇君」とあてるといようなものだったんでしょうか。

加藤 どっちだったかな。

石川 読み上げて。

加藤 そういう場合もあったし。

水口 それはやったことない。

石川 先生は違う。

加藤 その場でっていうのもありました。だから私、ここに二つ目なんですけど、前、A 大にいてて、で、国立に来て何かすごくレベル高いようなイメージがあったので。どういうレベルでどういうことっていうのは、事前情報で全然リサーチしてなかったし、もらえなかったし。

水口 もらえなかったです。

加藤 そういうのもあって。

石川 研修もなく。

加藤 研修は。

水口 ガイダンスもなく、FD もなくだから。

石川 FD もなく。

加藤 ガイダンスみたいな、あれもなく。それは今から思うとすごい時代だったとは思いますが、そのときは一生懸命ですから。

水口 去年、こんな教科書を使ってましたって、一覧は見せていただいた気がするんですけど、どうい先生がどういものを使っておられるっていうのは、何か紙媒体で。

加藤 そうです。もちろん、紙媒体です。

水口 そういものは外部に一切漏れないんです。

石川 先生の論文で、(最近、教科書リストを作成してウェブに公開するようになって)教科書会社が喜んだって書いてありました。

水口 すごく喜んでおられました。そうい情報は一切頂けなかったので、教科書会社の方も足で回って、この先生はどういご専門だからどうい教科書持っていくとかって。

石川 なるほど。

水口 のんきな時代です。文学の先生方は格調高く小説だ、詩だ、なんたらだって。あと古典をやっておられた先生もおられたので。

石川 古典ってどの辺りですか。

水口 ギリシャ、ラテンの先生っておられたので。だからシェイクスピアやってた人もおられました。ですから、それから見ると言語学なんてみたい。まず自分がボキャ貧であるということとか、リーディングなんて解説ができないわけです、自分自身が。そんなバックグラウンドないし、



教養的な素養が全く違うので。あとすごく長年、研究者をやってこられた先生たちなので、積み上がってるものが全然違ってきて、そんな若い大学院出たての人が教えられることなんて何もなくて、一覧表見たって何の役にも立ちやしないっていうものなんです。ですからさっき言ったように、もしリーディングで読むときはちょっと言語学に引っ掛けたいものかどうか。

石川 その当時の、水口先生の授業での読ませ方というか、今で言うとタスクというか(はどうだったんでしょう?) 当時 100 分だったって記憶してますけど。

水口 そうですよ。長かったですよね。

石川 ですよ。100 分授業だったと思いますけど。

水口 私は訳が自分でできないんです。だから訳はとっても苦手なので、最初から質問項目をだーっと書いていくんです。

石川 黒板に。

水口 いや、プリント媒体に。で、英語でクエスチョンとアンサーしなさいみたいな感じで。読んで、はい、答えなさいみたいな感じでやってたような記憶があります。

石川 なるほど。それはいわゆるグループ学習みたいなイメージではなくて、個人的に一人一人、50 人のクラスで読んでいく。

水口 そうです。一生懸命回すんです。

石川 回すとは。当てるという意味。

水口 当てるんです。

石川 なるほど。

水口 だから目標はすごく多かったですけど、1 日 1 回はしゃべることっていう、そういうのを自分に課していて、みんなにしゃべらせるみたいな。若気の至りです。

石川 いえいえ。

水口 グループ学習っていう意識もあんまりなくて、10 年ぐらいしてからですか。グループでやったほうが効率的かもしれないと自分で気が付いて、ほそぼそとこっそりやっていました。

石川 なるほど。

水口 でもそんな、文学で格調高くやってらっしゃる先生の前では絶対言えず、だから自分ができるものしかできなかった。今も変わりませんけど。

石川 いえいえ、なるほど。

## 組織

石川 ちょっとこれは確認なんですけど、教科集団という制度ができる前、水口先生が赴任された当時は、まだ教科集団制じゃないと思うんですけど。そのときって、英語の担当者は、どういうバーチャルな単位をつくっていたんでしょうか? 意思決定とか、どういう会議体とかで行ってたんでしょうか。

水口 それって教養部が解体した後の話ですよ。

石川 教科集団ができる前、教養部の時代は？

加藤 教養部の中でじゃないですか。

石川 教養部の時代。教養部英語科みたいなものがあったんですか？

水口 教養部時代は英語科があったから、部屋もあったし。

石川 はいはい。そういえば、その部屋に、女性の方がおられましたよね。助手さんかなんかで。

水口 書籍がすごいたくさんあって、辞典とかも。図書館行かなくてもそこで全部。

石川 その当時の教養部英語科っていうのは、例えば科長がいるとか、選挙で科長を選ぶとか、何かそういう組織だったんですか？

水口 ありました、ちゃんと。おられた。

石川 デパートメントだったんですか。

加藤 いや、肩書はないんじゃないですか。役職はないんじゃないですか。

水口 いや、でもおられた。

加藤 代表はいたけど、でもそれって役職？

水口 知らない。

石川 例えば定例会議みたいなのもあったんですか。

水口 ありました。

加藤 それはありました。

石川 じゃあ、それを引き継いで、ほとんどそれと実態は変わらないような形で教科集団制度に動いていったっていう。

水口 そうそう。

石川 なるほど。

水口 でも、よくみんな、そこ、割とサロンみたいになってたから、結構。

石川 OED(※オックスフォード英語大辞典)並んでましたね。奥の壁に。

水口 もちろん。OEDは並んでたし。

石川 その横にLLの部屋なかったでしたっけ。LLの部屋、違ったか。

水口 LLではないです。

石川 LLの部屋ではなかった。

水口 (語種ごとの部屋は)ドイツ語もちゃんとあったし。でもあとフランス語とか中国語とかはなかった。そういう部屋はなくて。(英語は)わざわざ補佐員の方が1人ずつ付いておられたので、プリントしてもらったりとか、その部屋の管理とか、あと非常勤の管理(をしてもらってました)。非常勤の先生方がよくそこにおられて。非常勤講師室にみんな行くんじゃないで、それぞれ科目の(部屋の)ところにおられて。そこが面白かったのはアカデミックな話題で盛り上がる。今だったら研究室にみんなこもっちゃって出てこないけれども、そこでこんなの何か話して、「えー、これはこうやで」って、誰かが必ず何かを教えてくれるんです。だからそれはすごく勉強になった。

石川 なるほど。

加藤 結構「最近、医者にかかったけど」とか、そういう話題が多かったと思う。

石川 雑談ですよ。

水口 そういうのもあったんですけど、ただ、どこか演劇行こうとかそういう話も出てきて。だからちょっと今とは違った、たこつぼではない。そういう雰囲気はあった。よく飲みにも行きました。悪いことはいっぱい教えますみたいな感じで。今、悪いことも教えられないから。

石川 教養部の英語科のその会議がそのまま実質的には教科集団に移行していたと。

水口 そうです。

### 3. 1992年～(人文・社会・自然)

#### 3 領域カリキュラム

石川 はい、分かりました。その後、またさっきの水口先生の本が書かれた文章でいきますと、1992年か  
らいいわゆる「人文、社会、自然」の3領域で2単位ずつ取ることになりましたね。

水口 そうなんです。それで6クラス。

石川 で、6単位取るというふうには。

水口 幸せに6クラスになるんです。

#### コア・カリキュラムとの関係

石川 ですよ。その点について、私の恩師でもあった森晴秀先生が文章を書いておられます。コ  
ア・カリキュラムとの関係で、今の教養原論を人文、社会、自然の3本立てにしたから、そ  
れと連動させる形で英語も、人文、社会、自然の三つを導入したっていう記録があるんで  
す。この辺の背景というか、これもまた議論は一切なかったんでしょうか。テーマ別導入に  
関して。

水口 これも多分、当時文部省から随分言われたんだと思う。(教養部から)国文(※国際文化学部)  
に変わるときもすごく大変で、みんなが本当に(※設置審査で)査定されるわけです。その  
資料をつくるのもなぜか自分たちの研究費から出させられたとか、そんな覚えがあつて。

石川 それ、設置申(査)のことですか。

水口 そうそう。設置審がすごく大変だったんです。だから英語(の授業の内容をどうこうするという)  
よりかは、みんな設置審、全員掛かる(のでそちらのほうが大変な)わけです。当然、業績  
少なくて苦勞するわけです。若い人たちだけじゃなくて今まで割と長く勤めておられた方も、  
文部省の設置申の基準に合わない方もたくさんおられて。そういう設置申をやっているときに、  
ついでに、森先生が書いておられるよう(な改革がなされた)。これ、すごいポジティブに変  
えたみたいに書いてありましたけれども。

石川 そう書いてますね。

水口 これはすごい文章力だと、今見ていて。結局は「講読 1, 2, 3, 4」とかっていうのは、事務の  
人たちからも言われたんだけど、「あまりに何も考えてない」と言って、それで人文、社会、  
自然っていうのを無理やりつくり出したんだと思う。このネーミングは結構、文部省に覚えが  
良くて、文部省がどうも宣伝したらしくて、外部から視察に来られたときもあるんだけど、視  
察に来られるほどのものではなかった。すごい何か恥ずかしかったのを覚えている。

加藤 でも有機的に教養原論のコアとつながっているっていうことで、非常に、森先生が書かれて  
いるような感じで、説得力はあつたと思うんです。

水口 だって今までほとんど何もなかったもので、1, 2, 3, 4ですから。

加藤 そうそう。ちょっと統制をかけてということ。

水口 一応、ジャンル別に。理系のこともちょっとは考えてますっていう。自然っていうよりは。

加藤 人文、社会、自然のカテゴリーで切り取っているっていうことで、きれいだとは思いました。

## 教員の配当

石川 質問なんですけど、今だとうちはコミュニケーションやりたいですか、リテラシーやりたいですかと、ある程度先生方の意向を聞いて、それに合う形で(クラスを)配分していますけども、もし人文、社会、自然(という割り振り)だと、普通に考えるとみんな人文に手を挙げると思うんですが、そこはどういうふうに。

水口 割り振られた。

加藤 (意向調査的なものは)なかったです。

石川 機械的に。

水口 うん。

石川 なるほど。

加藤 「自然」だとちょっと困ったっていう気はしました。

水口 そう。

加藤 私は。

## 総合教材へ

水口 私も。だからそれからみんな、やっとな教科書を探すようになった。

石川 なるほど。

水口 それで総合的な教科書も大体この時期に出てきたので。

石川 自分の本当のこれまでやってきた専門じゃない内容を教えるっていうときに、何か頼るものがほしいと。そこで(総合)教科書っていうものを入れはじめた。買わせはじめた。業者も出てきたという。

水口 そうです。それがきつとこの時期で。だから総合的な教材っていうのは、昔はなかったんでこの時期からみんなが使うようになったんです。

石川 今、水口先生がおっしゃったように基本的には個人の判断っていうのか、教員個人で意識のある人はそういうものをやり、そうじゃない人はそうじゃないものをやりという感じだったんでしょうね。はい、ありがとうございます。これで大体、人文、社会、自然時代について伺いました。

水口 「自然時代」・・・

## 英語教員とESP

石川 先ほどの件に関して、ESP(※専門分野のための英語教育)のことを言ったときに、結局、英語教師が「自然」を教えていいのか、教えるべきなのかという議論がありますね。これは、今でも、やるべきだという人もいれば、やらないほうがいいっていう人もいますが、この辺りはお考えはどうですか。両先生。

水口 できることとしたら、本当に、「詩を読まない」という程度の、それくらいなんですけれども。ただ、学生は、例えば、直角ってどう言うの？ っていうのでも、それでもうれしかったです。

理系の学生は。そういうのは自分で言えないっていう。こうやって書くんだとか、教科書も自然系のものは今でもあんまり多くないんです。でも、多くないからきつと私、「タイム」とか何か他から取ってきたんだと思いますけれども、興味は持ってくれた。今の学生よりかはもうちょっとちゃんと読んできた。

加藤 イメージとしては、90 パーセントは EGP(※一般目的のための英語教育)だと思うんです。

石川 ジェネラルね。

加藤 はい、ジェネラルパーパスのほうで。で、10 パーセントに ESP があるようなイメージなので。

石川 それ人文、社会、自然時代は、ですか。

加藤 (その時代)も(現在も、ということ)、です。そうです。だからちょっとした味付け部分でなんとなく、自然よりかなっていうことで、バリバリの ESP をやることは教員にはできないから。私には少なくともできないし、それ用の英語スタッフを配置するっていうのも無理だと思いますので、ESP は上に任せるのが。例えばここで人文、社会と分かれてても、その自然はあくまで英語の教員が……。

水口 自然っぽいなっていう。

加藤 扱える範囲での ESP でいいんじゃないかと思ってます。

石川 なるほど。分かりました。

加藤 専門で求めているのは、パーティーで話せるようにしてくれみたいなことを言うじゃないですか。

石川 実際にはそうですね。ただ、さっき 3 区分制で文科省に褒められたっていうお話もありましたけど、学生の所属が文学部であろうが、医学部であろうが、経済であろうが、必ずみんな人文と社会と自然を 33 パーセントずつ取るっていうのは、理念としては確かに。

加藤 多様性というか。

石川 今聞いてもきれいな話というか、非常に分かりのいい話でした。はい、ありがとうございます。

水口 大きく変わったんですね。

#### 4. 2002 年～(リーディング, リスニング, スピーキング, プロダクティブ)

コア・カリキュラムから再び技能別へ戻った背景

石川 2002 年から、人文・自然・社会という教科名が変わり、「リーディングとリスニング, スピーキング・プロダクティブ」となります。今回、加藤先生に古い時代を調べていただいたんですが、どうも 1970 年代の(4技能)システムがこの 2002 年ぐらいに復活してくるわけです。このとき、それまでの 3 領域(人文, 社会, 自然)を放棄して 4 技能に戻そうとしたのは誰が決めたのか、どうやって決めたのかっていうところは？ 私が調べたかぎりでは分からないんですけど。

水口 分からないです。

石川 でもその頃先生、中核メンバーでいらしたんじゃないですか。

水口 きっとどこか上のほうで。鶴の一声で。

石川 でも鶴がそんな科目の内容まで決めますか。

加藤 いやいや。ワーキンググループについては……。

水口 やったのか。

加藤 ワーキングでやったんじゃないか。

水口 やったんだっけ。

加藤 これっていつ変わったんですしたっけ？

石川 2002 年。

加藤 資料の 4 番目ですか。

石川 はい。この水口先生の資料でいくと、2002 年からの 4 技能別時代です。

加藤 でもこれ、あれですよ。

水口 どうやって決まったのか。

石川 2002 年、平成 14 年ですね。このころの外国語第一部会の代表者は、平成 12 年度が宇津木先生。13 年度、横山良先生。14 年度、石塚先生。15 年度、米本先生。この辺りの時代です。教科集団会議でこのことを議論された記憶は？ 多分、部会には出席率をもっとも高いお二人の先生でいらっしやると思うので。

加藤 ともかくこの前の段階からコミュニケーション的なものが必要だっというの、1990 年の末ぐらいからあったんです。

石川 それは学内的には誰がどういうチャンネルで、そういう要望なり、圧力なり、希望なりを述べたんですか。なんとなく英語の教員がそう思い始めたんですか。

加藤 教員も思い始めたし、分かんない。上のほうに誰が会議で出て、そういうところで聞いてきたのかは、私は分からないけど。

水口 宇津木先生、横山先生……。

石川 宇津木、横山、石塚、米本(先生です)。

加藤 でも宇津木先生、多分、評議員とかになっておられるから。

水口 横山先生も評議員になってらっしゃいます。

加藤 横山先生も。  
石川 その辺がまた上に出ていって。  
加藤 そうです。  
水口 すごく喧々囂々と何か話し合った覚え、ありますか？  
石川 でも(変化としては非常に)大きいですね。  
水口 大きい。  
石川 内容別の3領域が技能別の4領域に。  
加藤 導入の前に「人文、社会、自然」の授業のときにコミュニケーション系の教科書はオールマイティーみたいな形で、例えば人文の授業で TOEIC 系のリスニングをやってもいいしみたいなルールというか、合意があったんです。  
石川 そうだったんですか。トランプのジョーカーカード(※「七並べ」ではジョーカーはすべてのカードの代替になる)みたいに。  
加藤 そうです。ジョーカーカードみたいに。  
石川 コミュニケーションなら何にでも置き換え可能って。  
加藤 そうそう。  
石川 そうなんですか。  
加藤 そういうふうに認めてたんです。だから全く講読ガチガチで3本矢で固めてるというよりは、80、90パーセントはそうだけど、10パーセントとか、20パーセントは。  
石川 多分、若い先生とかは、どっちかっていうとコミュニケーションをみんなやったほうが楽ですね。  
水口 私もこれはすごく、この時期は。で、何で(内容別3領域制を)崩したのかがよく分かんないです。  
石川 ちょっと戻します。すみません。  
水口 SOLAC(ができたころ)だよな。  
石川 話しを戻しますけど、人文、社会、自然から、このリーディング、リスニングの技能別に変えた、というか戻したというか。この2002年改革の、決定プロセスは、結局、先生のご記憶ではどうなんですか。  
水口 分かんない。  
石川 じゃあ、そのことを議論した記憶はないですか。その部会なり、(そういう場所で?)  
加藤 議論はしてた。  
水口 してるはずだけれどもすごく鮮明に残ってる記憶ではないので。  
石川 少なくともそこで、3分野を維持すべきだというような意見が出たわけではない。  
加藤 ない。  
水口 ない。  
加藤 これ、誰が主導したんだろう。  
水口 崩れてたからじゃない? きっと。



石川 そのジョーカーカード制みたいなものによって、(3領域が崩れ)事実上みんなオーラルみたい(になっていた)ってこと？。

水口 いや、オーラルやってる人は、今でもそうだけど、少なかった。そうすると英語の総合教材にだいぶ移行しているの、英語がすごく平易な英語になってるから、誰でも教えられるんです。だから格調高く、ストップードを読んでいたとか、シェイクスピアを読んでいたっていう。あれって本当のプロじゃないと読めないでしょう？ 背景も全部分かってる人じゃないと。でもそうじゃない人でも、時事英語とかもこの頃は割とみんなやったんじゃないか。そういうテキストもいっぱい出てきて。

石川 なるほど。

石川 そこ、ぜひ伺いたいですけども、全学の雰囲気というか圧力というか、期待という中で…。

水口 期待は何もないです。

石川 ないなりにですけど、リスニングみたいなことの、意見が出始めた(ということですか)？。例えば今だとプレゼンしろとか、何か学会用のリスニングしろとか、そういう声(ありますが)、先生が赴任されたときの雰囲気としては一切なかったですよ。「英語 1, 2, 3, 4」時代には。

水口 この変わった辺りから(そういう声が出始めました)。特に医学部です。医学部がいっぱい言ってきて、CNNをやれとかABCをやれとか、何かわざわざ指定してきて。

石川 医学部なんだけどCNNなんですね。

水口 医学部から随分と要望があって、ちゃんと文書で来たかもしれない。それでこういう組織ですからそんな動かなくて、承りましたぐらいで済んでいたら、そしたら医学部が業を煮やして自分たちで(教員を)雇った。

石川 今につながる。医学部独自英語のコマですね。

水口 そう。だからこの辺りだと思う。

石川 その発端がもしかするとCNN問題だったわけですね。

水口 いや、CNN(だけではなかったかもしれませんが)とにかくもっとリスニングを。ちゃんとその放送が、BBCでもABCでもCNNでも何でもいいですけども、あれが聞こえるぐらいのリスニング力を付けてほしいという要望は正式にあったと思います。

石川 なるほど。

水口 記録は多分、残ってないかもしれないけれども。それで業を煮やしたっていうのがあって、ですから入試なんかもそうですね。自分たちでやりますって言うって…取りあえずやってみてみたんじゃないか。

石川 なるほど。医学部は今も何か特任講師みたいなコマですけども、独自の英語の先生を確保しておられて、学部でも独自の英語の授業をやっておられますよね、大倉山で。

水口 そうなんです。

石川 その点、もしかすると起源がこの辺りにあるのかもしれない。

水口 だから、このキャンパス(※鶴甲第1キャンパス=教養課程)の英語には何も期待してない。

だめだと見切りを付けたんだと思います。

石川 なるほど。

水口 それがどうなってるかは、全然関与しないところなので分からないです。

加藤 待ってください。当時のメールが読めるかもしれない。

水口 恐ろしい。

石川 同じメーラーなんですか。

加藤 昔のこの Almail 時代のメールで。

石川 なるほど。物持ちがいいですね、先生。

加藤 多分、1997 年ぐらいからあったと思うんです。

水口 すごい。

加藤 メールとして使い始めたのは、もしかして……。

水口 私、変わるたびになくなってる。

加藤 座談会のどこかで見つけたら言います。

石川 また教えてください。

水口 すごいです。これ、大改革だったのに今はぼんやりしてて、すぐなくなっちゃったっていう。

石川 そうですよ。2002, 2003, 2004 だか、2004 年ぐらいですか。2002, 2003, 2004, 2005。

加藤 大正デモクラシーみたいな。

石川 一瞬よかった。

水口 ここ大好きだった。本当に。

加藤 先ほどの、分かりました。(内容別が)途中で変わってオーラル(などの技能別)が導入された経緯。沖原先生です。沖原先生がワーキンググループをやって、教科集団の代表もやっていたかもしれない。(教員向けの)アンケートも採ってます。

水口 ワーキングからアンケートがあった？

加藤 部会に対して。「3 区分を廃止するかどうか？」ちょっと言いますと、「(内容別の)現状このまま維持」が 5 票。「当初の(内容別の)趣旨を徹底して続ける」っていうのは、多分……

加藤 1 票。「新しい枠組みを現行の制度の中で設ける」が 7 票。「現行を廃止し、新しい枠組みをつくる」が 7 票。ということで「新しい枠組みを現行の制度の中でつくる」か、「現行の制度を廃止して全く新しい枠組みをつくる」かが(それぞれ)7 票で。この二つが拮抗してて、やっぱり変えようという。

石川 沖原先生判断。

加藤 沖原アンケートが出て、それに具体策もこれに載ってるので、また参照してください。

石川 はい。資料に加えて(おきます)。

水口 メンバーも書いてあります？ ワーキングの。

加藤 ワーキングのメンバーは今のところ(わからないです)、これ、ワーキングのと書いてあるだけなので。

石川 加藤先生自身はそこに入ってた記憶はあるの？ いや、入ってたからメールがある？

水口 私, ひょっとしたら入ってたかもしれない。

石川 入っておられた。

加藤 私も入ってたかもしれない。

石川 当事者が覚えてないんですか。

水口 メールがあるってことは。

石川 そう。ワーキングだからメールが来てるんじゃない？

加藤 これはでも, ワーキングからこんな結論が届きましたという教科集団の報告メールですけれども。

石川 部会ってというか集団に対するお知らせなのですね。

水口 沖原先生かそれか……。

加藤 やっぱり沖原先生がやったんだ。

水口 そうだ。

石川 なるほど。4 技能化って。

加藤 沖原先生は教育(学部)からこっちに移ってきてますから。

石川 なるほど。

加藤 今のメールが発信されたのが……。

水口 何か沖原先生の顔の表情, 思い出してきた。

加藤 2000 年の 1 月 26 日なので, 1999 年度の話です。

水口 この頃, 「人文, 社会, 自然」っていうのは見ばえがよかったんだけど, 実質は何もないっていうのがばれてきていて。

加藤 そうそう, 揺らいでた。

水口 そう。それでそろそろ文科省, まだ文部省か。分かんないけど。

加藤 文部省。

水口 かな。そろそろ怒られだしてる。

石川 当初はいいと思ったけれどもと。この実態では……ということになってきてた。

水口 今どきスピーキングもできないのはけしからんみたいな風潮があった。

加藤 ありました。

石川 なるほど。

水口 それでオーラルとかってやったんですけれども。

石川 なるほど。

水口 なるほど。

加藤 この時代, TOEIC とかに, 力を入れはじめる風潮がでてきていた。

水口 そう。A 大学なども。うちは, 「TOEIC ではやらない」とかって, 何かみんなで息まいてて。

加藤 A 大学 TOEIC ブーム。

水口 そう。あのときに(神戸大では)「教科書に TOEIC 指定しちゃいけない」とかって。やっところの辺りできたのかもしれない。

石川 なるほど。

水口 (科目改革で)オーラル出てきたから TOEIC に(というふう)に非常勤の方(がとらえられて、  
そういう教科書を)たくさん指定されたのかな? で、「これはどうでしょう?」、みたいなのが、  
集団、部会の中ではちょっと問題になって。

石川 なるほど。

水口 こんなものを授業で教えるのですかっていう、そういう考え方の方もいらっしやっしたし。

石川 はい、ありがとうございます。

水口 そっかあ。

#### 上級選抜クラス

加藤 あと少なかったけどネーティブとか、そういう人にオーラル系を任せた時期があつて、その圧  
力が徐々に高まっていて、2000年代、リーディング4単位とオーラル2単位です。オー  
ラルは2年生なんですけど、オーラルっていうのがあつて、この時代、非常によかったのは  
国文、法学部のみなんですけど、リーディング上級、リスニング上級、ライティング、スピーキン  
グ、同時通訳、実用英語(などもありました)。

石川 同時通訳。

加藤 同通。

水口 あつた。

加藤 集中講義で。

水口 藤濤先生のご関係で何か。

石川 なるほど。

水口 ご紹介していただいた覚えがあります。

加藤 全学的ではなかったんですけど。

水口 国文と法文。

加藤 そうです。法学部(の単位数)が一瞬この時代に復活して(※法学部は単位数が他より少な  
い)、これ、学生に希望を出させて、それこそ先生方の手作業でしたけど、どこかに集まっ  
て振り分けてやったんです。

石川 なるほど。

水口 私、そのクラス、教えました。すごくよく勉強してくれた。

石川 そのクラスとは、どのクラス?

水口 選択制の、そのスピーキング。

石川 上級クラス?

水口 そう、上級クラス。

加藤 リーディングの上級、リスニングの上級。

水口 このときに1クラスの人数がガタッと減ったんです。だからすごくうれしくて。

石川 それは選択だから減ったっていう。

加藤 選択だからだと思います。

石川 だからですかね。

水口 法学部の子も来てくれて、わざわざ自分で希望を出して来るのすごいです。熱心だった。だからこの時期が私、一番幸せだった。

加藤 この時期、よかったと思う。

水口 よかった、私もすごく。学生もすごく勉強したし、教師も1クラスの人数がすごく減った。(それまでのクラスサイズは)今と一緒じゃないですか。ほとんど。それまでは10人、20人多かったわけですから。だからものすごく感じが違ってて。

石川 そうですね。

水口 この時期が一番楽しかった。

石川 私、この時代に着任したんだと思う。だからK棟の一番上の部屋でプロダクティブという授業をやってた記憶がありました。

加藤 ありました。名前もプロダクティブでした。

水口 はい、ありました。

石川 スピーチしたりとか。結構おっしゃるように、やりたい子だけが集まっていたので、楽しい授業だったです。

水口 やりやすかった。

石川 これ、意外と好評な(感じだったんですか)。

水口 いや、教師には好評だったんじゃないか。

加藤 今思うと、私はこれ、いいシステム。学生にもよかったと思います。

#### 教育目標

石川 なるほど。じゃあ、この「リーディング、リスニング、スピーキング、プロダクティブ」時代の教育目標のことについて伺いたいんですけど、これもその担当の先生が目標から書いておられたのか、ある程度この辺は統一しようみたいな雰囲気だったんでしょうか？

水口 統一だった。

石川 統一だった。

水口 英語集団じゃなく、教科集団になってたと思うんです。

石川 はい。

水口 けど、誰かがリーディングはこうですとか、リスニングはこうですって書くようになった。

石川 恐らく当時の代表の人が。

水口 代表か、その時間割係みたいな。

石川 でしょうね。

水口 ちょっと大変な役をしてる人たちが書くようになって。ただ、まだSOLACができてないので順番に。さっきの代表の名前を聞いてても年齢順だよ。よほど事情がない限りは年齢順に回っていたので。

石川 これ、1年ごとで変わってたみたいですね。  
水口 そう。目まぐるしかったんです。だから引き継いで次。  
石川 ただ、1年だと本当に慣れるだけで。このころ代表になられたのは、辻本、笹江、森本、沖原、宇津木、横山、石塚、米本、水口の各先生、次に、2006年度に。  
水口 はい、そうだと思います。  
石川 その後、加藤先生です。お二人、並びでした。2006年度、2007年度で。  
加藤 変わるときですよ。  
石川 そうですね。

#### 組織改編

水口 そう。で、SOLAC 変わるときだったの、結構大変だった。  
石川 でしょうね。  
加藤 (英語の開講曜日が)月曜日、水曜日に、まとまったときですよ。  
石川 月、水です。  
加藤 何か非常勤にメールで聞いた覚えがあるか。変わってもいいですかみたいな。  
水口 あとこのときに誰が SOLAC 行くとか、組織がすごく動いたので。私、代表を年次順でやってたときにもものすごいっぱい会議かけた覚えがある。  
石川 会議。今で言う部会を多く開いたということ。  
水口 たくさん開いた。  
石川 なるほど。  
水口 細かいことが本当に大変で、今おっしゃったように今でもう少し曜日のバラつきがあったんですけど、月、水に決めるとか。そうすると非常勤に来ていただいている方がすごく制約されるとか。  
水口 で、私終わって加藤さんに。加藤さんが SOLAC に行かれることになって、次、加藤さんになってっという。  
石川 ちょうど今、教科集団の話が出たので、資料の 4 のところなんですけど、この科目集団なる組織について、ちょっと伺いたいんですが、これも細川先生の言葉なんですけれども、要するにこの教科集団っというのがすごく先鋭的な、全国どこにもない神戸の独自のブレイクスルーだったというふうなことを回顧しておられます。何がすごかったかっていうと、専門、いわゆる学部の先生が一般教養を教える箱がやっとできたんだと。それまでは教養部教員じゃないと般教が教えられないと。向こうは教えたかったかどうかは別として。それを教養部でもない、学部でもない、教科集団という箱をつくることで専門学部の人も同じように入ってくるができる。この仕組みが非常にユニークであって、ブレイクスルーであったっというふうなことなんです。この辺りの経緯、特に英語に関しての質問は、もしその箱が元教養部教員だけではなくて、全学の英語に関係する人が入る箱だったら、どうして他学部の英語関係の先生がたが入ってこなかったのかっという問題・・・ この辺はいかがでしょうか。

加藤 何かがないといけないということはあったわけなので(教科集団が作られたんでしょう)、教養部の先生方が分かれたり。でもほとんど教養部の先生方が引き継がれてますよね、うちの場合は。理系は分属しちゃったけど。国際文化学部で英語を担当していた人が90パーセントぐらい残ってて、それに文学部の人と、あとどこかな。文学部だけか。他の学部からは来なかったです。分属を受けてたところは・・・。

石川 リュック問題(※旧教養部教員が教養科目担当に関して持っていたノルマ。当該教員の部局が変わったり、後任人事があつたりしてもノルマは引き継がれるとされた)で。

加藤 リュックで出すということだったので。あと、海事の話はまだかな。

水口 まだです。

加藤 海事の話はまだ先なんだけど、だからここで書かれているいろんな受け皿としてほぼ、教養部の先生たちの、会議の枠組みを引き継いでいるので、そんなに議論にもならなかったし、あるとしたら他の学部からも入ったらいいのについてというような漠然とした思いはあつたけど、実際には文学部からしかなかったということなんで。

石川 なるほど。資料によると当時は毎年、毎年、代表が変わっていたんですけども、この時代の代表選出は選挙だったのか、持ち回りだったのか。どんな感じだったんでしょう。

水口 ほとんど年功序列。

石川 例えば水口先生がされて次、加藤先生がされてとか。

加藤 教養部時代ですか。

石川 ではなくて、教科集団時代。

加藤 教科集団時代って。

水口 どうだったっけ。

石川 米本先生から水口先生が引き継がれて、その後、加藤先生に引き継いでいく、時のプロセスのことですが。

加藤 選挙です。

石川 選挙。

加藤 選挙だったと思います。

石川 純粋な選挙ですか。

加藤 選挙でした。

石川 本当？

水口 覚えてないけど。

加藤 私が選ばれたのは少なくとも選挙です。私が水口さんの後を引き継いで選ばれたんです。Aさんと私、過半数に届かなかつたか何かになって、もう1回やった。

石川 じゃあ、選挙だったんですね。

水口 実際に選挙だった。ああそうか。

加藤 選挙しました。

石川 なるほど。

加藤 だけどみんな、なんとなく年齢順に。

水口 年功序列でそういう人に入れてたんじゃない？

加藤 そうです。

水口 そうだ。選挙でした。

加藤 選挙です。

石川 当然その頃の、代表には手当的なものはなかった？

水口 ない。全然ない。

石川 基本的には。

水口 ボランティアです。

石川 ボランティアってことですね。はい、分かりました。ありがとうございます。

水口 今でこそあるけど。

石川 ですよ。

水口 全くないです。

#### センター(SOLAC)の設立

石川 だんだん時代が進んできて、センターの設置ぐらいのところに入っていきます。国文の英語系の先生は、当初、例えば全員とか、あるいはもっと大部分がセンターに動くような話で始まったのか、あるいは、今の人数ぐらいが最初からイメージされていたものだったのか。あるいはもっと少なく、例えば 2, 3 人だけ動かして、その人たちに非常勤などのコントロールをしてもらうというのが狙いだったのか。この点に関して、当時の教科集団はどういうふうな意向だったんでしょうか。

加藤 多分、人数、先にあったと思います。15 人前後っていうのは、5, 5, 5 ぐらい。

石川 海事というか商船から 5、国文から 5。

加藤 うち(※旧教養部＝国際文化学部)からは 5。それでどこかから、多分、国文からのポジションをもらったんだと思います。あるいは学長から、全学からで別途 5 っていうようなことで。

石川 新任の 5 ですよ。新任っていうか外から来る先生。

加藤 そうです。

石川 柏木先生・横川先生・グリア先生と私が入った枠ですよ。

加藤 その国文から出る 5 については 20 とかっていうオーダーじゃなかったです。国文のほうも存続しないといけなわけじゃないですか。20 も外出たら大変なんで、そちらの支障があるのとのバランス。それから SOLAC として独立してやっていくだけの人数ということで 5 になったんじゃないか。

石川 その人数は例えば英語教科集団として、いや、国文教授会かな？ そういう場所で、5 も出せないとか、出たくないとか。(そういう話があったのですか？)

加藤 いや、英語だけの話じゃないので、(中国語の)中川先生とか(も国際文化からセンターに移られたので)。



水口 そう。津田先生とか。

加藤 そういのがあった。英語で来たのは私だけ？

石川 辻本先生。

加藤 私と辻本さんだけなので、教科集团的に 2 人も出たら駄目みたいな、そういう大きな話にはならなかったし、SOLAC ができるっていうのも既定路線化してしまっているの、辻本さんと私が出ることに對してすごい議論があったっていう記憶はないです。

石川 それは基本的に当時の部局長と個人の先生の個人ベース(の交渉)だったということですか。

加藤 須藤さん(※当時の須藤学部長)ね。

石川 出る、出ないっていうのは。

水口 いろんな。

加藤 いや、募集しました。

水口 募集だった。

加藤 募集っていうか、行きたくない場合は行かなくてもいいという前提で、結果的に。

水口 何かみんな顔色見てたみたい。

加藤 (一緒に映られた方は、あと、)沖原先生ね。

石川 そうそう。

加藤 沖原先生だけ。

#### センターと国際文化の関係

石川 なるほど。で、センターができて、結局その当時の教科集団はセンターと国際文化学部と文学部(の3部局だったですね)。最初は文学部からも来ておられて、3部局で英語部会を回していくっていうことになったわけです。当初はご記憶のように、部会長もどちから出てもいいと。文学部から出ても理論上、悪くはなかったはずで、途中の段階で、部会長や幹事はセンターのほうから出しようというふうな形で、部会で決めたわけなんですけれども、これをやってるのは英語だけで。未修(外国語)はやっていません。この辺のことについてはどんな背景だったんでしょうか。これは私もある程度、記憶もあるんですけども、両先生の捉え方としては。

水口 いや、石川さんが何か提案したのがあったっていう。

石川 文章を書いたような記憶はありますけど。

水口 確か部会で。で、まだ SOLAC の中で話してないっておっしゃるから、じゃあ 1 回、SOLAC に持ち帰ってくださいと、私は言ったのを覚えてます。

石川 なるほど。

水口 そのときに石川さんは、「このままだと何も変わらないですから、もう業を煮やしました」みたいなことをおっしゃったので、それはすごく鮮明に覚えてる。

石川 結構、怒ってましたよね、あの頃。

水口 怒ってました。

石川 よく叫んでましたよね。大きな部屋で集まった、全員の外国語の先生が集まった会議もありました。1回だけ。

#### 外国人教員

水口 私、SOLAC ができる前の英語集団のときってというのは、実は外国人の先生とかには会議のお知らせすらやってなかったんです。そうすると彼らには、「自分たちには情報が来ない」と。「出る権利もないのか」って言って、かなり難しくなっていて。私のときからご案内を差し上げるようにして、じゃあ、会議のときの使用言語は英語なのか、日本語なのかみたいなこともあって。

石川 外国人教師の方に連絡をするようになったのは、年号で言うとどのぐらいの時代からですか。先生の部会長時代？

石川 教科集団代表じゃなく、部会長の時代ですかね？

水口 教科集団です。まだ英語部会になってない。

石川 なるほど。

水口 だって、加藤さんから(部会に)なったわけだから。その前ですから。

石川 はい。じゃあ、平成16年度ぐらいから一応、連絡をするようになった。

水口 そのときは文学部の先生方も出てこられたんですけども、やっぱり来ても、シャンシャンシヤンの会議ですよ、言ってみれば。何が決まるとか、すごく姿勢が変わるとか、そういうものではないので、次第にみんな出なくなったというか。この頃、組織が動いたので、外国人の方々も自分がどうなるかっていうことがすごく不安で、それで情報を送るみたいな感じで。

石川 なるほど。出ておきたいって。

水口 出てこられました。でも、すぐに出てこられなくなりました。これは出てもしようがない会議だっと思われたんです。

石川 確かに。

水口 彼らは学長が直接雇っているのか。何か雇用形態が違うんです。だからこれは別に出なくてもいいんだと、さっさと見切りを付けて。それでだんだんまた出なくなって。今だって本当は出なきゃいけないんだよね？ 英語部会だって。

石川 そうです、出てもいいし。本当は出ていただきたい。

水口 出てこないよね。

石川 なるほど。

#### 部局協力とノルマ問題

水口 本当はそういうのは良くないと思います。キャンパスが離れているっていうのもあるんですけども、キャンパス近くでも出てこない。そのうち文学部が教えなくなったとか。あれも文学部の人たちが「なぜ、自分たちが教えなきゃいけないのか」って、ずーっと思っていて。教養部が解体したときに……。

石川 Aリュック。A先生のリュックとして向こう(文学部)に動かしたんです。英語のノルマは。

水口 いや。沖原先生は(教育学部から)こちらに来られたんですけれども、(教育学部から)文学部に行かれた先生もおいでだったので。

石川 教養から？

水口 教養ではなくて、上の。発達・・・じゃなくて当時の教育学部。

石川 おられました。B先生とか。

水口 Bさんは・・・。

石川 あと、C先生。文体論の。

水口 C先生とか、多分、そういう方々はリュックがあったんだと思いますけど。

石川 C先生、教育から動いたんだったらリュックは背負ってないし、B氏も背負ってないはずですよ。文学部が継承した英語のリュックは、やはりA先生のリュックでは？

水口 その座布団って言う、座布団って言ってたんですけれども、それも公式な記録はあえて残してなかったの。だからどこかトップのところで、リュックが動いた、動かないのって決まった。

石川 座布団って今、われわれがリュックって言うのは、昔、座布団って言ってたんですか。

水口 座布団って言ってた。

石川 それ、どんなメタファーなんですか。

水口 知らない。

石川 リュックは何か分かるじゃないですか。荷物をしょってるイメージ。

加藤 居座って、その人は変わっても笑点みたいに座布団が残るって言うこと。

石川 週9枚分とか、週6枚分の座布団があるみたいな。

水口 その座布団が何枚なのか、実は誰も分かんなくなっちゃっていて、いつもそれで文学部と何かごちゃごちゃ上のほうでやって、下々はまたやってるとかって思って。結局は英語を教えたくないのよねって言う、そこに行き着いてしまっていて、文学部の人たちも何人か教えに来られましたよね。

石川 あんまり経緯を分かってない先生の場合は、意外と張り切ってやってくれてたことがあったかもしれない。分からないですけど。

水口 私が知ってる人たちは、みんな気が進まない感じでやってた。

石川 そうですね。

## 5. 今後の展望

石川 だんだんつながってきました。最初の資料の9番、今後の展望っていう辺りにいきまして。

水口 はい。一番大事なところ。

### コマ数の変遷

石川 その前にちょっとコマ数の変遷の話を知りたいんですけども、今の話を伺うと英語についてはどうやら「英語 1, 2, 3, 4」時代までは8単位(※2単位×4クラス)あったようです。なぜ私が合計6単位で済んでたのかというと、もしかすると文学部だったので専門でやるからいいよということだったのかもしれない。

水口 文学部だけ違ってたのかもしれない。

石川 かもしれません。

水口 昔から違ってたかも。今も違うけど。

石川 1992年に座談会があって、細川委員会を率いておられた細川先生が「英語を何単位にするか随分もめた結果、英語は6、未修は5と決まった」ということをおっしゃっています。このときに、教養部の先生が「いや、6はけしからん」とか、「8を維持しろ」とか、「いや、6でいいんだ」とか、どういうふうに議論に関わっておられたのか、関わっておられなかったのか。

水口 当時、教養部だったので、全学的なところに出ていく場がまずなかったっていうことがあって、あまり覚えてない。

水口 いや、英語集団で、みんなでボトムアップで意見を吸い上げましょうという、そういう組織ではなくて。だから今おっしゃったようにそのヘッドの先生ですね。ヘッドと何か。

石川 ボス交渉みたいな感じで。なるほど。

加藤 要は大綱化と連動してるということは、教養部の廃止と連動してて国文ができるということがあったわけです。そうすると英語だけじゃなしに専門科目を教えなきゃいけないっていうような…。

水口 主張があつて。

加藤 われわれの提供できるコマ数の関係があつたので、これ、8では持たんだろうという、恐らく田中さん[注:田中雅男教授]か、多分、何か言ったと思うんですけど、こういうことになったら。だから非常に外部的なあれがあつて、6だと英語教育が崩壊してしまうっていうような正論を出す人はいなかったと思います。

石川 なるほど。結局減らしたっていうのはすごく簡単にいうと、教養部の先生が国文に変わられるときに新しく専門を持つからコマが増えるであろう、であるならばその分は一般教養のほうを減らす。それを保証するには全体のコマ数を減らすっていうような議論があつた可能性が高いですね。

加藤 非常に高いと思います。

石川 なるほど。別の資料を見ますと、瀧上先生へのインタビューというのがあつて、そこで、大教の山内先生が関心を持って尋ねておられるのですが、「何で神戸大は6なんだ」と。京大と

か阪大に比べると今も昔も少ないですよ。今も少ないんだけど昔から少なかったという話なんですけれども、インタビューでは、結局学部の側からいらないと言われたと。そうであるならば教養のほうもある意味、売り言葉に買い言葉ではないんだけど、であるならば減らすぞというふうなことで、決まったんじゃないかっていうくだりがあるんですけど、この辺りはそんな感じの雰囲気だったんでしょうか。

加藤 私は全く分かりません。

水口 私も分かりません。その下々の教員がそういう詳しい情報や裏情報っていうのは一切関与できなくて、鶴の一声みたいな感じでトップ交渉だったのと、あとひょっとして、単なる推測ですけども、学部からいらないって言われたのは特に理系からの突き上げで、こんな詩とかシェイクスピアを読んでも何の役に立つのだっていうふうなのは、ずーっとあって、国際会議行っても全くしゃべれないじゃないとか、あるいは、自分たちがやっている理系の英語っていうのに触れる機会がないっていうのはけしからんっていうのは、ずーっと沸々としてありました。

望ましいコマ数

石川 それで今後について、ぜひご助言を頂きたいんですけども。単位数ってのは、これ、われわれが例えば10にしたいから10になるっていうもんじゃないんですけど、今、4になってるという現状(※2019年度より全学部4単位になった)についてはどんなふうにお二人は受け止めておられますでしょうか。

加藤 私、遺憾です。

石川 何？

加藤 遺憾です。遺憾だと思います。

石川 遺憾だと思っておられる。

加藤 遺憾だと思う。4の話でしょう。

石川 4です。

加藤 少ないと思ってます。

石川 でも具体的にっていうと4が少ないって、6ならいいってそういう感じでしょうか。

加藤 6は死守。

石川 死守。

加藤 で、8になれば理想だというのが私は思ってます。

石川 昔、8でしたね。

加藤 いろんな条件を別にして。

石川 ですよ。

加藤 4については少なすぎると思ってます。

石川 水口先生、ここの、まず数の問題は何でしょうか。

水口 私、これがなかなか言えなくて、今後の展望とかここの課題にもつながるんですけども、こ

何ができないかっていうと、トップダウンの議論をまずしないんです。こういう目標があるからこういうカリキュラムがある。だからこういう、これだけの単位数がいるっていうのがあったら、すごく考えやすいんだけど、いつも部会で何か出掛かっては結局はみんなうやむやになってしまうっていうのが(あります)。神戸大としてどれくらいあったら学生に力が付いてるんだろうかっていうのを。今、外部試験っていうのは入ってきていますよね。それで何点以上だったら単位いらないって言うてるんだから、そろそろ言ってもいい時期かって私は思っていて。じゃあ何点くらい取ったら単位もいらないんだから、後は自分で勉強してっていうことですよ。だからこれくらいの力をつける、というのを明示すべきでしょう)。入ってきたとき、みんな違いますけれども。だから本当はもっと抜本的な改革が必要で、神戸大に来たら、最低、TOEICとかTOEFLでも何でもいいんですけれども(そういう試験でこのあたりまではいくというような)。きっと世の中そのようになっていくんだと思います、これからグローバル化で。大学院だって外部試験でいいっていうところがすごく増えてるわけだし、きちぎちにすると、いつもおっしゃってるけど私たちが私たちが自分の首絞めることになるので、それは避ける方向で(いくとしても)大体これくらいの力が付いたらいい(というような目標設定)。じゃあ、そのためには何単位必要なのか(ということでしょう)。あとは専門のことは、医学部のことなんて教えられるはずもなく、理学部も分からず、工学部だって分からない。だからその最低のところ。その外部試験でいいっていうくらいの力をつける。それには何単位必要かっていうのが。

石川 なるほど。そこがない限りは6か4かとか、4か8かという議論が成立しない。

水口 人によっても違いますよね。

石川 ですよ。

水口 最初から受ける必要ない子だっているわけだし、10単位やったって駄目な子は駄目でいるわけだし。だからすごくそこは判断が難しいところなんだけども、ただ、外的に説明するには、そっちのほうがいじやないかって思いました。

石川 なるほど、はい。

水口 で、大体の平均でいいですから、例えば学部の、入ってきたときは大体これくらいなんだから何単位いるんだとか。それで試算して行って、実際にどれだけのコマ数があつて、それには何人ぐらいの人員が必要でっていうのは、私はすごく計算しやすいんです。だからトップダウンに、商売柄そういうのに慣れているのでその発想はよく分かるんだけど、逆に「どうしても10単位必要です」とかって言われて、「なぜですか」っていうのがなかなか説明が難しいと思って。

達成度をどう評価するか

石川 今日、この後、外部評価委員会があつて、そこでも叱られるかもしれないんですけども、神戸大学の英語教育の成果は？ゴールは何なのか？っていう話につながっていくと思うんです。加藤先生はこの点については？単位数の問題があるにしても、それをやっていってど

ういう出口、どこを目指させるのか？って。それを明示的に計量するのが世の流れであるとするならば、我々もそうしていくのか。あるいは、私なんかはそう言ってるんだけど、TOEICは嫌だ嫌だって言うんだったら、それに代わる何を見せるのかっていう、その辺りについては。

加藤 筑波大学のやってるような、筑波だったか、何か最後の共通テストみたいな。

石川 昔やりました。

加藤 今はやってない。ああいうのができない以上、その力がないのであれば、言い方はあれですけど CEFR。CEFR ということは TOEIC ということです、換算すると。

石川 何らかのテストですね。TOEIC, TOEFL って。

加藤 何らかのあれで B1 とか、B2 とかいうんであったら、B1, B2 自体を測るものは CEFR の、Can-do のやつでやってる人も分かんないじゃない。

石川 分かんないですね。

加藤 だからレファレンスして外部テストでやるしかないの、いろいろとあるけれど私はそうだと思います。

石川 そうかあ。水口先生からその方向の話が出たので、加藤先生に(議論を)中和してもらおうと思ったんだけど、スタート地点の違うお二人は最終的には未来展望は同じところに行くわけですね。いろいろ思いはあるだろうけれど。

加藤 抽象的なことで今言ってるとしても、それを何らかの形で可視化しないことにはっていうことになると、他に私は思い付かないんです。

石川 例えばの話。今、TOEIC でいくと 1 年生の平均点が 550, 560 点ぐらいです。大体どの学部もそんな変わらないです。で、そういう人たちに一般教養として 1 年間、新制度では 4 単位で 1 年間、英語を毎週 2 回受けさせる。90 分を週 2 回受けさせて、1 年生が終わったときに、元が 560 だとすると、どんな感じがゴールなんですか。600 点になってれば OK みたいな？

水口 今、単位もらえるの、何点でしたっけ？

石川 今は 730 で 1 年生後期単位が免除です。今度(4 単位化をふまえて)もうちょっと上げて 800 にしようとか言ってますけれども。

水口 そこまでは無理です、1 年では。

加藤 全学統一で「神戸大学は 800 点です」っていうような言い方だと無理があると思うので、人によって違うということを考える。それから、4 月に英語を受けて 3 月に終わって、学生自身、あるいは教員も、(学生の英語力が)同じだとか、下がったなというようなことでは駄目だと思うんです。上がったという実感は持ってほしい。

石川 ただそこも難しい話で、A 大学の例でも、私が昔調べに行ったときには、学部ごとに卒業時の目標の TOEIC スコア、違うんです。A 大学は体育学部とかもあって、神戸大以上に学部間の学力差が大きいとこなんだけど、例えば神戸大でそれをやったらどういうことになるか？ 大体イメージはできるんだけど、もしそれをやると、「この学問分野だから英語はとりあえず 600 でいい。この学問分野だから 800 いる」という風にはならなくて、結局、入学偏

差値みたいなものを単に TOEIC の数字に置き換えるだけになるんじゃないかなと・・・つまり、入学偏差値が相対的に低い学部はゴールのスコアも低くなって、医学部のように、入るのが難しい学部はゴールが 800 点っていうふうになりそうです。で、そういうふうになった場合、その数値目標の意味合いっていうのは、説明は難しい。

水口 あまり説得力がない。

努力か能力か

加藤 私が言うのは伸び率が見たいので、一人一人違っていいと思うんです。

石川 伸び率。私、資料には、「努力を見るか、能力を見るか」って書いてあるんだけど。

加藤 あるいは 500 の人が 600, 700 は 800, 900 の人は 950 とかいうような意味での、一人一人違っていいと思うんだけど、伸び率があることが大事だということ。

石川 ちょっと意地悪問題みたいで恐縮なんだけど、ある種の思考実験として、500 の人が 600 になった場合と、700 の人が・・・。

加藤 800 になった場合。

石川 違う。700 の人がちょっとさぼって 650 になった。でも絶対的なレベルは 650 のほうが高いとする。TOEIC で決めるっていう理念は、努力を見ないで、測定されたプロフィシエンシーの高い順に点を付けていくっていう概念であると私は理解するんだけど、そのことと、努力を測るとか、伸び率を測るっていうのはどういうふうに整合するんでしょうか。

加藤 努力か能力かですよ。半々。

石川 半々？

加藤 半々。絶対的な TOEIC の点数は、これは評価はする。それから伸びたのか下がったのかも評価するみたいな感じで、今のでいくとプラマイで結局同じように評価するみたいな、そんなイメージです。

石川 水口先生、こここのところのその TOEIC なるものをもう少し使った場合に、絶対的なスコアの高さ、低さで見ていくのか、努力というか、伸び率というか、頑張りというか、その辺りってどういう。

水口 努力の可視化がすごく難しいですよ。

石川 難しいです。

水口 あと、神大に入ってきたら、1 年たったら学生たちは「絶対下がってる」って言うんです。「(1 月の授業で)もうすぐセンター(の時期)ですね。皆さんもう 1 年たちましたね」とかって言ったら、あの頃は毎日英語を見ていた。今は見ない。だから下がってるって言わせちゃ駄目だなんて思って。学生がそれは自分で努力もしてないし、能力も自信がないわけです。そういう学生を私たちはずっとつくり続けているので、それは組織の問題だって自分でも思います。で、どうやって見るかっていうのは、これは一大学でうんぬんしてもしょうがないんじゃないか。結局英語教育って社会からの圧力がすごいわけですから、その社会に向けて一応これやってますって見せるのは、今のところ、私も TOEIC は好きではないですけども、



TOEIC のスコアである。TOEFL は使わないから。企業が使わないんです。それだけの話  
なんだけど、ここは大学だから TOEFL でも、IELTS でもいいです。必要枠で換算すればそ  
れで済むことなんですけれども、大学生としてやるからには(一定のスコアがいるというこ  
を示すべきでしょう)。イスラエルなんかそうなんですって。イスラエルの人ってすごくみんな  
英語が堪能ですよ。

石川 お上手です。

水口 あれは大学ですごい高い基準があって、それをクリアしない限り卒業はできないんです、とイ  
スラエルの学生さんに聞きました。

石川 ただ、イスラエルなんかだとどうなのでしょう。大学の上級レベルとかだと、恐らく英語でのイ  
ンストラクションじゃないですか。

水口 そうですか。

石川 EMI(※English as a medium of instruction)。英語ができないと(専門の)勉強ができないって  
いう。

水口 でも、それはそのまま(日本に)導入することはもちろん無理ですけれども、ただ、何らか  
の…。

外部試験をどう使うか、使わないか

石川 中国の CET8 とか。全大学共通、全国共通の大学修了試験みたいなものを英語に関してば  
んと置いておいて、そこを通らないと卒業させないみたいな、そんなイメージですかね。点  
数をパンッと明示して。

水口 本当にさっきも言ったけど、(このスコアをクリアすれば英語の授業を)受けないでいいって言  
ってるそういうスコアがあるんだったら、そこの整合性をまず考えないといけない。

石川 そうなんです。私もあれをつくっちゃったっていうか、つくられたときに嫌だなと思って。あれ  
をつくっちゃうと、もう(TOEIC 等のスコアの使用に)反対はできないので。一方で何点取れ  
たら、はい、単位出すって言うっておきながら、いや、うちの大学は TOEIC は目標じゃない  
ですとか言ってるのは、整合性が破綻してるので。

水口 (すでに基準点があるのに)4 単位取りなさいっていうのが、整合性取れないです。

石川 ないですよ。

水口 だからそれを何かうまくつくらなきゃいけないのと、あと外部評価とかで必ず言われますよね。  
この目標は何ですかっていうのを言われるので。

石川 ということは目標論に関しては両先生、TOEIC 的なもののスコア以外には方法はないという  
ご意見で。

水口 可視化できるものが求められるっていう前提に立てば。

石川 それは「人文、社会、自然」の 3 領域を幅広く学んで、内容に触れて、人間の人格をどうこう  
するというような森先生の作文ではもはやちょっといけないということ？

水口 いや、それはそこから個人がやることであって、英語教育でやることなのかしら。

石川 なるほど。

水口 知識とか知恵とかってというのは、英語教育で何単位やったから身に付きますっていうことになると、それは「はい、そうです」とは、私には言えない。これは英語教育のことを考えればいいんですよ。

加藤 大きな本当の人間性です。最終的な教育の目標はそうではあるんだけど、英語のレベルまで細分化されていったところでは、やはり何らかの支えみたいに外的な枠組みみたいなものも必要なんではないかって思うんです。

石川 なるほど、分かりました。

加藤 それの至上主義とか、絶対化するっていうのはおかしい。

水口 おかしい。

石川 ただ、難しい。何か入れてしまうとそれが絶対化・至上化しますよね。目標は何点だっていったんいってしまうと。

加藤 努力を見る。一生懸命頑張ってる子。

石川 最近しなくなりましたが、私、加藤先生とこのテーマで結構論争しましたよね。

加藤 そうですか。私と逆の立場だった？

石川 常に、私の反対のことをおっしゃる。

加藤 そうかなあ。

#### 教員の資質

石川 じゃあ、次の話は、英語の指導者の資質。例えばの話、TOEIC 予備校から先生に来てもらったほうが、多分、TOEIC の点数を上げるのはお上手かもしれない。英語学者、英語教育学者、英文学者がいいのか。あるいは、専門家よりも、グッドティーチャーみたいな人がいいのか？ これからの神戸大の英語教育を中心的に担っていく人はどういう人であるべきとお考えでしょうか。

水口 目標と、あと学生が今やりたがってることをちゃんと見据えないといけないと思うんです。学生は自分の言葉でしゃべりたい。でも私、音声はすごく、1 から、フォーニーム(※音素)から全部教えるんで、イントネーションまで教えるんですけど。習ったことがありませんって、ほとんどの子が言う。それはよろしくない。いつまでもコンプレックスを持ってはいけないので、音声教育をやって、もっと学生に自信を持たせる。あなたの発音大丈夫。聞こえないのは相手のせいって思わせるくらいにしとかなないと、自信もってしゃべれないです。あと、今いろいろイクイップメントがあるのに、使い方、知らないですよ。音声にしてもそうだし、ライティングにしてもあるんだけど使えてない。こうやってできるんだとかって。あと留学生も来ますけど、留学生も「スズキクン」(※東大の開発した日本語韻律発音トレーニングサイト)を全部たたき込んで、プラート(※音声分析ソフト)の使い方もたたき込んで。そうすると自分で分かるっていうんです。

水口 これはすごく難しいことなんだけれども、神戸大の最大の弱みは二つあって、一つは目標が

ないことと体系化してないこと。致命的だよね。

石川 その言葉でこの座談会を終わるのは、私としてはちょっとこれはつらいんだけど。

水口 私は37年もいたのに、結局個人のレベルでしか何もできなかったの。

石川 それはみんなそうです。

水口 それは石川さんが昔、怒ってたのはすごくよく分かるんだけど。

石川 もう怒んなくなりました。

水口 怒らなくなったら終わりだ。

加藤 目標もつい最近、アカデミックという枠組みで固まってきたし。

水口 そうしたらアカデミックにいくための最低のものを付けてあげたらいい。一般教養で。

石川 なるほど。

水口 そうすると大体何点。そのためには何と何がいきますから、こういう科目数をオファーします。

こちらとしては提供しますっていったって。これをクリアしていただかない限りは上に行けませんっていう。

石川 なるほど。

水口 そうしたら私的にはすごくはっきりとした、つくるのは大変ですけど。そうやって去っていきませんが。

石川 分かりました。

加藤 私はだからこの指導者の資質としては、もちろん真ん中に人間性ですよ、私はね。人間性みたいなものがあるって、(さらにその上に)英語学も知ってる。英語教育も知ってる。文学も知ってる。運用能力もあるみたいなのが周りを囲んで。深くというか、英語学一本道というんじゃないなくても、自分は英語教育の専門なんだけど、英語学も英語史もいろいろと知っていてオールラウンドであるのが良い先生ではないんですか。

石川 分かりました。

加藤 むっちゃ理想だけど。

水口 むっちゃ理想、なればいい。

石川 ありがとうございます。きょうは大変長い時間にわたっていろいろご意見を聞かせていただいてありがとうございました。

## 参考文献

大野隆(2017)「神戸大学における教養教育の現状と課題:8年間の振り返る」『大学教育研究』(神戸大学)25, 1-11.

瀧上凱令・川嶋 太津夫・米谷淳・山内乾史(2005)「瀧上凱令・元大学教育研究センター長を囲んで:座談会」『大学教育研究』(神戸大学)13, 71-87.

多淵敏樹他(1997)「<座談会>神戸大学における教育システム改革を考える:多淵敏樹先生を囲んで」『大学教育研究』(神戸大学)5, 1-28.

水口志乃扶(2018)「ミセラニとは何だったのか」神戸大学英米文学会(編)『教養主義の残照—

Kobe Miscellany 終刊記念論集』(pp. 267-277) 開文社.

森晴秀 (1993)「ハーヴァード大学のコア・カリキュラムと神戸大学の教養原論」『大学教育研究年報』  
(神戸大学) 1, 9-22.

油井清光・合田涛・竹内康滋他 (1993)「座談会「大学の将来を考える」」『大学教育研究年報』(神  
戸大学) 1, 28-44.

